

950.2-Y87-2㉔



1200500760356

950.2

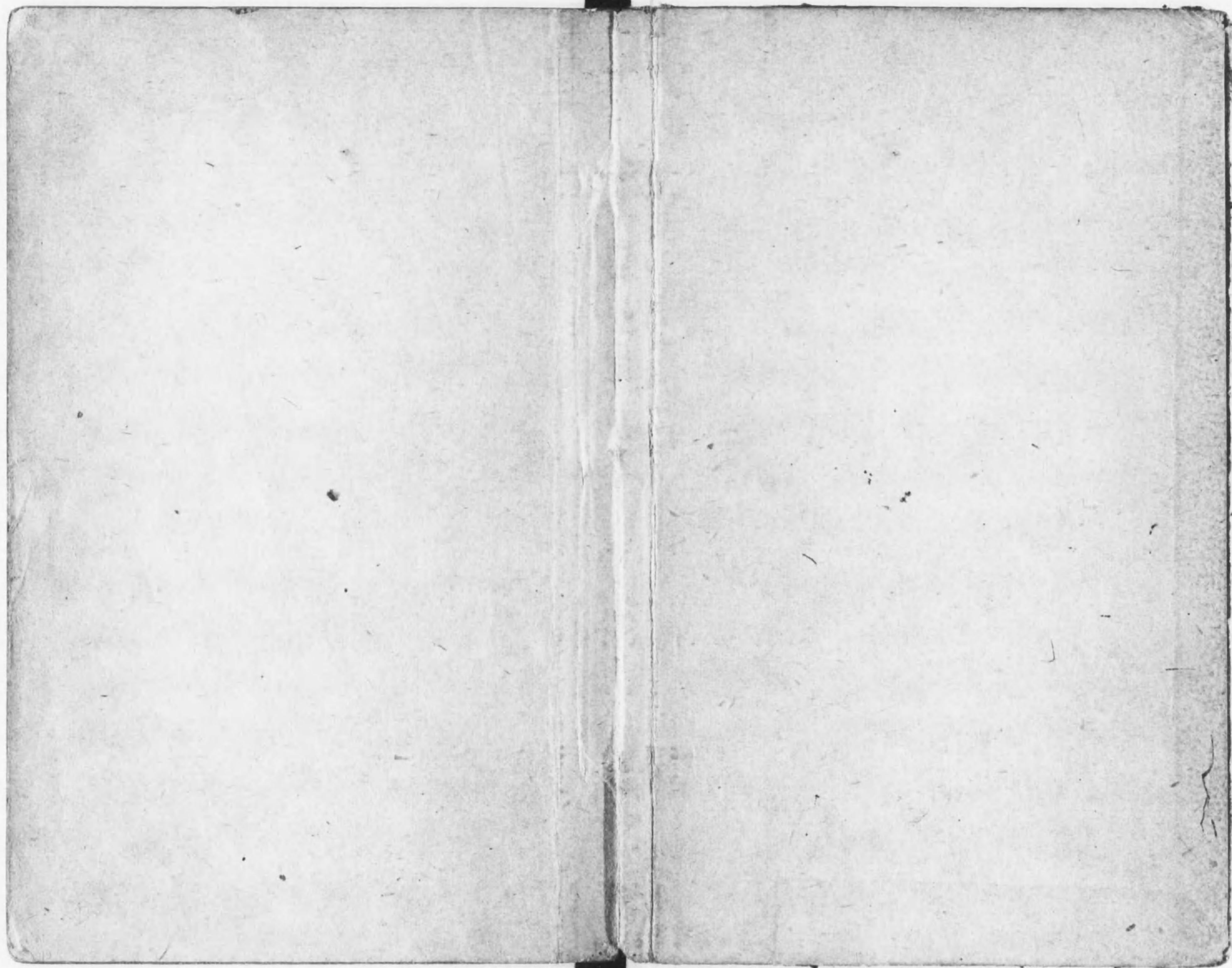
Y87

2 ㊦



始





6

278

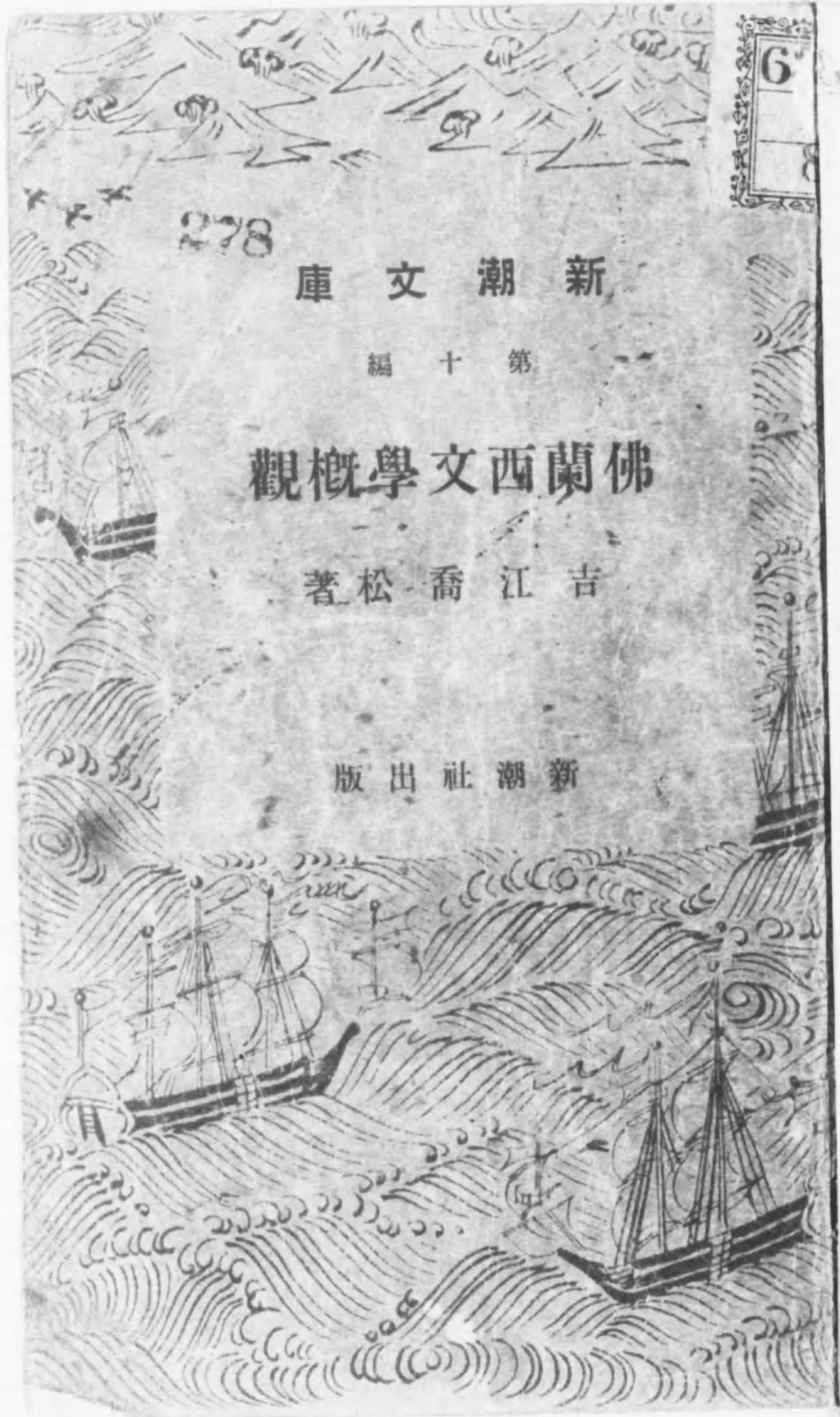
新 潮 文 庫

第 十 編

佛 蘭 西 文 學 概 觀

吉 江 喬 松 著

新 潮 社 出 版



950.2
Y87
2

佛蘭西文學概觀

吉 江 喬 松 著



新 潮 文 庫

— 10 —

新 潮 社 出 版



佛蘭西文學概觀

吉江喬松著

目次

第一篇 封建制度以前の佛蘭西文化と文藝……………三

(一)ゴオル獨立時代(紀元前五、六世紀)——(二)羅馬人の征服——ガロ・ロマンの時代(紀元一世紀—五世紀)——(三)ジェルマン族侵入期より封建制度發生期まで(五世紀末—十二世紀)

第二篇 封建時代の佛蘭西文學……………四三

(一)封建制度隆盛期の文藝(十二、三世紀の文藝)——(二)封建制度崩壞期の文藝(十四、五世紀の文藝)

第三篇 近代佛蘭西文學……………一三三

(一)文藝復興期の文藝——(二)近代古典期の文藝——(三)大革命前期の文藝——(四)大革命後、浪漫派、現實自然派の文藝

第四篇 現代佛蘭西文學……………二二七

明治文藝と佛蘭西文藝——象徵主義の文藝——自然主義文藝——反自然主義文藝——傳統主義文藝——個人主義より民族主義へ——民族主義より國際主義へ——實行的世界主義への伸展——象徵主義以後の文藝——現代小説概観——現代劇文學概観

630-
630-8



第一篇 封建制度以前の佛蘭西文化と文藝

一、ゴオル獨立時代

一、ガロ・ロマン時代

一、ジェルマン侵入、メロヴ、カロロ兩朝期の文化と文學

一、ゴオル獨立時代

(紀元前五、六世紀)

佛蘭西人を構成する歴史的、人種的要素——ゴオル人等の生活——ゴオル人及びその他の種族との關係——森林の尊重——自然宗教——ドリュイディスムとは何ぞ——原始文藝——ゴオル人の本質——その兩方面——佛蘭西文藝との關係

一國の文學の歴史は、その國土の自然環境の比較的永續的な刺激を緯とし、その國の社會環境の種なる階層、政治的、經濟的、宗教的その他種々なる構成要素を経とし、時代相の變遷を緯として織り出さるゝものである。

佛蘭西文學の概観もおよそこの見地から觀察しようとするのである。従つて普通これまでの佛蘭西文學の歴史に記述されてゐるよりも、最少し遠い源泉に溯つて、佛蘭西人なるものを構成する歴史的要素、及びその佛蘭西人なるものが、積み來つた經驗、素養などを究めて見ることが、外國文學として佛蘭西文學を知る上に、まづもつてなされねばならぬ手段であると考へらるゝ。

4 クリスト紀元前およそ五、六世紀頃、南は地中海の岸邊から、東はアルプの連峯、ジュウラの山系、ヴォジニ山脈を経て、ライン河に沿うて北の海へ、それより海峽を前にして大西洋の岸邊へ、やがてピ

5 レネの山脈の麓にいたるまでの、この自然の領域へ落着くことになつたのが、即ちセルト(Celts)の民族である。

この自然の領域は、東北方面のライン河の線に於いてこそ、今日にいたるまで尙、特に消長は烈しいのであるが、その他の方面では、歴史的に、時代的に、幾多の侵入や併合はあつたにもせよ、大體としてその自然の境界を持続し、その境界に守られて、佛蘭西なる一國を構成してゐるのである。そしてこの自然の領域のなかを、ラムウズ、ラ・セエヌ、ラ・ロワル、ラ・ガロンヌ、及びル・ロオヌの五大河が貫流して、それらの特殊な文化を地方的にも展開してゐるのである。

セルト民族をもつて歴史的に知られてゐる根本の要素とし、それに南方より征服し來つた羅馬人、及び東北方より侵入して來たジェルマン族、それ等三様の人種的及び文化的混融をもつて佛蘭西人なるものを構成し、佛蘭西文化を築く基礎と考ふる事は何人も否定出來ぬ事實であらう。

セルト族以前の先住民族が如何なる生活をしてゐたかは十分なる確證は立てられぬ。但し巨石の遺物たるトルメンヤ、メニールなどから判断すれば、相當發達した文化をもつた族長政治の行はれてゐたことだけは言ふ事が出来る。そしてその文化がまた相當にまで後繼民族たるセルトの中へ吸収せられたものたる事も考へられる。

紀元前およそ千八百五十年頃から九百年頃まで、即ち、青銅時代の終り頃まで、この自然の領域を占めてゐた人種をリギル(Ligures)と呼ぶ。それが次第に北方からはセルト族に、南方からはイベ

ル(Ture)族に壓迫せられ、漸次ロオヌ河の流域や、地中海近くの山地へ追ひ込められ、紀元前一世紀頃は、南部の山間や、ジエノワ灣の周圍に僅かに棲息を續けてゐたものである。

イベル族は、おそらく紀元前七世紀頃、ピレネ山脈を越えてガロンヌ河の流域へ進出して來たのであらう。この種族は、西班牙へイベリア半島といふ名を残し、今日も尚、ピレネ山下のバスク(Basques)の國に生存してゐるのである。(ピエル・ロテイの「ラマンチヨオ」は此處に取材したものであり、ピエルの文字を名に持つ人は、大方バスク人であり、その國人の言語風習が日本人に酷似してゐるといつて、近來特に傳奇の人々の様々に話を耳にする。)

セルト族はインド・ユウロピアン族の一つと見られてゐる。セルトといふのは彼等自身の稱した名であり、希臘人はガラテ(Galates)と呼び、羅馬人はガリア(Gallia)と呼んだ。それからゴオロワ(Caulois)なる名稱が出て來たのである。

このセルト族が歐羅巴全體に擴がり出したのは、紀元前八、九世紀頃から、即ち鐵器時代の初め頃からで、最初はシシリイに、小亞細亞に、埃及に、カルタージュに、西班牙に、ブリテンの島々に、やがては、西班牙、伊太利の北部、獨逸の南、ボヘミヤ、奥太利、ダニユフ河の流域全部に互つて、即ち西歐羅巴の大部分を占め、前に言つたピレネ山下から、ライン河にいたる自然の領域へ落着いたのが即ち紀元前五、六世紀の頃である。それ以來この土地をラ・ゴオル(La Gaule)と呼ぶのである。その時期から紀元前五十年頃(詳しくは五十八年から五十年まで)シイザアが羅馬人を率ゐて征服に來るまでの間を「ゴオル獨立時代」と呼ぶのである。

但しこの期間このゴオルの國を占めてゐたのは、セルト族が唯一であつたわけではない。ピレネ山下とガロンヌ河の間には前に擧げたイベル族が棲息し、それより北、セエヌ、マルヌの兩河にいたる中央部をセルトが占め、南方では紀元前六世紀に既に希臘人等が地中海岸へ植民してマルセイユの港をつくつてゐた。北方では、ムウズ河からライン河に到る一帯の土地にベルジュ(Belges)が棲息してゐたのである。

このベルジュ人はセルトとジェルマン(Germans)族との混合種族であり、性質剽悍で、絶えず北からセルトを壓迫した。それ故セルトは勢ひ南へ進出して、一時は希臘半島にまでも迫り、デルフの神殿を破壊し、小亞細亞へガラテイの國を建てずにはゐられないほどであつた。そのベルジュは南下して來てセエヌ河までも押し迫り、紀元前三世紀には海峽を越えて英國へまでも押し渡つた。このゴオル北部の地方、ベルジュ人が落着いた土地が即ち白耳義(Belgium)である。

さて、このゴオル人等が落着き定住しはじめた自然の領域は廣大無限な森林に包まれ、いまだ自然の通路を見出さない水溜りが到る處に見られ、その森には榊や山毛榉ナが特に繁茂してゐた。彼等はその森の中に出没し、樹を伐り草を焼き、麥畑をつくり、葡萄を栽培し、山野に獵し、礦物を採掘して生活してゐた。葡萄と橄欖とをばゴオル人等は希臘へ輸出もしてゐた。彼等はまた鐵、鉛、錫、金銀をも採掘し、加工し、調度に、裝身具に、武器に用ひ、二人乗りの戦車をも有してゐた。但し騎乗といふ事は羅馬人の征服以後に初めて習つた事である。

この森林は、さればゴオル人等にとつては生活上の重要な土地であり、大切な住家であり、敵からの隠れ場所でもあり、又その林間の空地は彼等の集合の場所でもあつた。即ち重要な大切な、従つて彼等にとつては何よりも神聖な場所でもあつた。ことに榊の樹の頂きに黄色くこんもりと茂る宿り木 (G.E.) は、冬枯れの落木の森の中では、一種の不思議なものに思はれた。他の木の實が落ち盡くす中に、たゞそれだけ赤い無数の小さな珠のやうに掛つてゐる蔓梅の實が、また何か不思議な力の籠つてゐるもののやうにも思はれた。彼等はそれ等の宿り木を特に尊重し、その中に目に見えぬものの力を讀まうとした——これ等の森林の中でも、アルデンヌの「深黒な森」の如き、ヴォジユの森の如きは彼等にとつて最も大切な神聖な場所であつた。今日でも北部のアルゴンヌの森、中央部のセヴェンヌの森、巴里近きフォンテンブローの森、或ひは巴里の周囲の幾つかの森林公園などに於いて、我々は往古の人々の森林尊重の跡をとめて見る事が出来る。

この森林の空處にゴオル人等が集まつて何か大事を議する時、その集合を指導し、また自然の神をまつる祭事一切を掌つてゐた一連の人々があつた。それがドリユイド (Druide) と呼ばれた。(ドリユイドとは物論りといふ意味である。彼等にとつて必要な事を知つて居り、殊に彼を支配する自然の神の意志を、力を知り、それに仕へる事を知り、仲たちとなる人々である) このドリユイドの連中は、一つの族制ではなく、父子傳承ではない。同業組織が固く出来てゐて、その首長をば選擇することになつてゐた。但し彼等は軍務に服さず、租税を納めない特權だけは持つてゐた。

彼等はおそらく先住民族から語りつき言ひつきせられた生活に必要な知識を他の者共より多く持つ

てゐたのである。彼等にとつて生活の直接依存するものは自然現象である。彼等はそれに對する準備を持たねばならぬ。それがためには、天文に關する單純ながらの知識を持ち、それで曆をつくり、また未來を判斷する一種の卜星術をも心得てゐた。その自然現象がまた彼等には或る不可思議な力の現はれ、不可測なもの發動の如くにも思はれた。ドリユイドにはその力に祈り、またその力を調伏する能力があると思はれた。彼等は耕作をも醫術をも心得てゐた。彼等は更に裁判をもやらねばならぬ。特に私闘の場合には、彼等の一喝で雙方の武器を投げ出させる威力も持つてゐた。その上彼等は委された多數の子女の教育をも引き受けねばならなかつた。但し彼等の裁判の權限はゴオルの凡ゆる階級に及んだのではなく、大首長にはその配下を裁く力があり、小首長等もそれ／＼部下を罰することは出来た。ドリユイドの權力は、丁度後代のカトリック教會が一般民衆に對して持つてゐた權力と同じやうなものである。

ドリユイドの信ずる教義の一つは、靈魂の不滅、輪廻轉生である。死後靈は一つの體から他へ移つて行く、従つて死は最後ではない。恐るゝに當らない。彼等はこの信條で人々を鼓舞した。

ドリユイドはまた種々な祭事を行つた。例へば十一月の一日と二日には、ゴオルの凡ゆる火が消された、これは原始人が火を尊重する意味からその威力を忍ぶためと、その日はゴオル人等の最も尊重する Tenites の神が死者の裁きをする日と考へられた。やがて祭壇の上へドリユイドが點する火が燃え初める。それと共にゴオル人等は新たな火を一齊に燃してその悦びを味はふのである。新火祭であ

る。これが後のカトリックの諸聖日にかへられた(即ち日本の掃部祭にあたるのである)。また新年の來らんとする頃、彼等が萬病を治すると信じてゐた榊の樹の寄生木を伐り取る祭事がなされた。その榊の樹の下ではうたげが催され、犠牲の準備をする。また軛にかゝらない二頭の眞白な牝牛が連れて來られる。白衣をまとうたドリユイドはその樹に登り、黄金の鎌で寄生木を切り落とす。白布を地に敷いてそれを取り集め、やがてその犠牲を屠るのである。その間ドリユイドに附屬するバルド(Bardos)(うたひ手の一群が唄をうたふのである。この寄生木の祭事が、クリスマス・トリイの起源でもあれば、佛蘭西人等が寄生木を尊重する習慣の始源でもあるのである)。

ドリユイドが犠牲を供する時に唄ふバルドの群は、その場合だけは祭事を助けるのであるが、その他の場合は、自由に族長等の館へ參し、宴席に加はり、堅琴の一種であるガットを奏でて、祖先の功績や、種族の繁榮をうたひ、或る時は戰士等を鼓舞し、或る時はそれ等を取り鎮めもした。全く中世紀に於けるジョンゲラルと同じ役目を演じてゐたのである。彼等がうたつた歌をバルディ(Bardis)といふのであるが、これ等はアイルランドに於ける幾らかを除くほか、今日まで保存されてゐないのである。

この神職、唄ひ手たるドリユイド、バルド等は當時の言はゞ知識階級である。一般民衆なるものは大方、侵入者と被征服者、降伏者との混合から出來てゐた。その生活状態は、木で造り、或ひは土を固めた小屋(Hut)で、戸はあれど窓はなく、煙出しの穴だけしかない中に住ひ、粟や毛皮の上に臥し、枯草束へ腰掛け、食器はなくて兩手の指で食事をした。それ等の下に奴隷がゐた。捕虜や罪人等で、

賣買も殺戮も全く自由で、家畜同様な取扱ひをされた。

それ等全部の上を支配する階級は即ち首長等であつた。シイザアのゴオル征服當時は、四十九の首長がゐた。その中の九人が王といふ名號をつけてゐた。その首長等の名の語尾はニウスで終つてゐた。その最も有名な、ゴオル最後の族長が即ちヴェルサンジュトリクス(Versingetrix)である。即ち彼等はいまだ封建制度以前の族長制度の文化に止まつてゐたのである。

ゴオル人等の家長は、妻に對しては生殺與奪の權を持つてゐた。更に彼等は數人の妻をも持つてゐた。彼等が死ねばその妻も奴隷等も殉死せしめらるゝ習慣すらあつた。けれどゴオル人の妻は經濟的には獨立を保つてゐた。彼女等は買はれて妻となるのではない。ロガを持つて夫婦生活を始めた。そしてその生活で稼ぎ得た半分は自分のものとする事だけは確立せられてゐた。長子權は知られず、親の財産は子等に平等に分配せられ、時には末子權が認められた。ゴオルの女性として屢々文藝の中に取扱はれてゐるのは有名なエポニヌ(Eponine)である(彼女の夫は、羅馬軍に反抗して、敗北し、或る洞穴の中へ身如き様子を見せてゐながら、その洞穴へ凡ゆる危險を冒して近づき、九年の間人知れず夫を養ひ、その間双生兒を生み育て、遂に發見せられて夫は刑せられ、彼女もその後を追うて行く。紀元前七十八年のことである)。

さてこのゴオル人とは如何なる素質を持つた種族であつたであらうか。それは羅馬人等の眼に映じたるものから判斷するより他に途はない。彼等の描き出すところでは、ゴオル人等はくつきりした體格で、筋肉の強健な、眼の碧い、金髪である。彼等は克く戦ひ、克く喋べる。勇氣と雄辯とがまづ彼

けれど、以上はゴオル人の一面であつて、他に一層原始的な、土着的な、先住民族的要素を多く傳へてゐる方面があるのである。以上挙げた如き特色は、ゴオル人の中では特にガエル(Gael)族の特色であつて、つまりゴオル人の支配階級の持つてゐた特色であつて、他の同種族中ではあるが、キムリック(Kymric, Gynic)族は、骨格から言つて異つて居り、ガエル族は頭蓋が圓形であるのに、キムリックは楕圓形である。この種族は一層舊い傳説を傳へてゐる。おそらく被征服民族の土着性をより多く享け傳へ、被治者の側へ置かれたものであらう。自然現象との直接交渉を深く記憶にたくみ込み、それに由つて神経を鋭く働かせ、感性を持続し、いつも何等かの憧れを求め、神祕的な夢想を抱く性向を持つてゐるのである。アイルランドや、ウェルスの文學に特にその特質を具體化し、佛蘭西文學にもいつもセルトの流れとして遠い脈絡を引いて居り、ロマンティックの要素となつて深く潜在し、時期が來れば輝かしい發揚を見せもするのである。中世紀の傳説「ブルトン物語詩」の源とも考へられ、ジャンヌ・ダルクの出現をもそれと聯關して説明され、いつも神祕的要素を文藝に供給し、ドビュッシーの音樂にいたるまでもその脈絡を見出さうとする人もあるからである。

兎に角この兩方面のゴオル人の特色が佛蘭西人の根柢をなして居り、それが文藝の上へ時代及び社會環境に伴つて、發露して來るといふ事だけは認めずには居られないのである。

二、羅馬人の征服 ガロ・ロマンの時代

(紀元一世紀—五世紀)

シイザアのゴオル征服——ガロ・ロマンの社會組織——新言語、ロマ語の發生——ゴオル人の本質と羅馬の教養——雄辯——詩歌の發生——異教、クリスト教の布宣——信仰上の迫害、混融、統一——羅馬帝國の衰亡

クリスト紀元前五十八年から五十年にかけてのシイザアのゴオル征服は、その勇敢なる者を或ひは殺し、或ひは奴隷とし、または他へ移住せしめ、従順なる者を降服せしめた結果となつたのである。プリユタルク(希臘の歴史家)によれば、シイザアは八百の都邑を陥れ、三百の民族を降し、幾度も戦ひで、三百萬のゴオル人を相手とし、その百萬を殺し、その百萬を捕虜とし、その他を降服せしめたといふのである。彼は征服と共に一方には極力恩を施し、ゴオルの統一を圖り、被征服者の軍隊をも組織して名譽を與へ、有力者をして羅馬の施政に参加せしめ、同化と統一を企て、族長制度を羅馬の組織の下に歸せしめんと努めたのである。その結果はこの權力者の下へ總てが歸服して、ゴオル全體が羅馬帝國の植民地たる一州となつたのである。「十年の戦役で軍神ジュル・セザルを惱ましたこの國は、一世紀の不易な忠實さで、その十年を贖つたのである。」と羅馬皇帝クロオドは言つてゐる。この同化混淆状態をカロ・ロマンといふのである。

この征服せられたゴオルの國は、最初四つに區分せられた。ラ・プロヴェンス (La Provence) ラキテヌ (L'Aquitaine) ラ・リオネエヌ (La Lyonnaise) ラ・ベルジック (La Belgique) である。その中プロヴェンスだけが羅馬の元老院の支配下に置かれ、他は羅馬皇帝に直屬することとなつた。そしてゴオル全體を通じて初めて共通な法律が行はれ、全體の主として羅馬皇帝を戴くこととなつた。

ゴオルの以前の大家族等はガロ・ロマンの貴族とせられ、レ・バルティシアン (Les Particiens) と呼ばれて、羅馬の元老院にも列する權力を與へられ、その下にレ・キュリアル (Les Curiales) と呼ばれる小貴族即ち地方貴族が置かれた。それに次いで、産業の發達に伴つて著しく富力を増して來た地主及び商人職工の階級があつた。この階級が後代の佛蘭西の第三階級 (Le Tiers Etat) を構成する主要素となつたのである。その下に大多數の小作人 (Colons) の階級があつた。これは奴隷ほど嚴格に自由は奪はれてはゐない。合法的結婚も出來れば、場合によつて地主の階級へも經上ることも出來た。けれど彼等の耕す土地へ結び付けられたやはり一種の農奴の如きものであつた。その小作人の下に更に奴隷があつた。これ等は妻子は持つても全然權利のない、所有主にとつては一物件たるに過ぎない存在であつた。勿論この他に自由農民として武器を捨て、永住した羅馬の兵士の多數及び植民等があつたのである。

羅馬の征服以來、ゴオルの國には農業が著しく發達した。ストラボンと言つてゐる。「嘗てゴオル人は耕作するよりは戦ふことに意を用ひてゐた。今や羅馬人が彼等に武器を捨てしめると、彼等は戦ふ

と同じ熱意をもつて、田野を耕し始めた。彼等は一層文化的なその習慣に同じ嗜好をもつて身を入れ

た。」と。羅馬人等はゴオル人を目して最も生産的な民族としてゐる。それに農業の組織も羅馬の統一以來稍々大農式に變革せられ、農作物の種類も増加して來た。製造業も次第に發達し、武器、貨幣をも造り、地中海方面の都市は特に盛大となつた。嘗てゴオル人の都邑であつた場所は、羅馬人の侵入とともに、道路、水道、圓形劇場、墓場、會堂、凱旋門が備へられて、全き羅馬の都市となつた。

この混淆、同化、順應の姿を最もよく示してゐるものは言語である。これは羅馬人の統制力と、ゴオル人の順應性との兩方面から考ふるべき事であらうが、一世紀から五世紀にいたる羅馬人の政治の下で、大多數の者は古いセルトの語法は殆んど全く忘れてしまつた。今日佛蘭西語の根源をなしてゐる四五千の原始語の中で、セルト語、ジェルマン語、イペリヤ語、希臘語など併せて約一割、その他雜多の語源が約一割、大體三千八百語ほどは悉く拉典語を語源としてゐる。但しゴオル人等が用ひた拉典語は、切り縮め、簡抄した、響の鈍い、即ち卑俗化した拉典語である。ヴォルテールは、凡ゆる語を簡省するのが野蠻人の持前であると言つてゐるが、如何なる國に於いても、言語の轉換期、更生期には語の簡省、收縮作用が敏活に行はるゝものである。このゴオル人等は普及した卑俗の拉典語、それが即ちロー語 (Le Roman) となつて、後の舊い佛蘭西語とせられたものである。但しこの卑俗な拉典語が一般に行はれて行つたと同時に、特に南部の都市では、諸學校で、哲學醫學などは勿論純粹な拉

典語で教へたものである。そして羅馬帝國の凡ゆる州領の中で、ゴオルの國が最も純なる拉典語を喋る國であつたと言はるゝのは、この南方の諸都市を指したものである。

この南方の諸都市、オタン、マルセイユ、トレヱヴ、ナルボンヌ、トゥルウズ、ボルドオの如きの諸學校は、哲學に、宗教に、醫學に、修辭に凡ゆる文化要素を普及せしむる事に努め、羅馬の文章修養はこれ等の地方で特に扶植涵養せられたものである。拉典語の書物、羅馬政府の官報の如きも行き互つた。そこで、本來がお喋り好きであつたゴオル人が秩序立つた辯論の訓練を受け、修辭の術を教へられたので、素質と教養とが合致して、紀元一世紀以來既に羅馬の都市へ續々とゴオルの雄辯家等を送り出したのであつた。ドミニティウス (Dominicus) の如き、モンタニヌス (Montanus) の如き人々は、羅馬の都に於いても、最大な雄辯家として知られ、第四世紀には、ウメヌ (Euné e, 150—311) の如き、オゾヌ (Aus. n.?, 310?—394?) の如き、ポラン (Paulin) の如き、雄辯家、修辭家、詩人として、全く拉典文藝家の卓越した人々を出すに至つた。

以前のドリユイドの子孫は、今や羅馬式教養を積んで本來の素質を發揮したのである。オゾヌの詩に於ける自然描寫、その柔かき清新な情緒、原始的なロマンティックである。彼の生存時は既に羅馬帝國の衰亡期に向つてゐるのであるが、ゴオル人本來の樂天的な快調さをば飽くまで失はずにゐるのである。ポランはオゾヌと同時代の友人であるが、後者が全くの異教徒であるのに對して、ポランはクリスト教の司祭であり、詩人でもあり、歴史を語り、快活な點と機智の働きたに於いて、彼もまた佛

蘭西文藝の始祖の一人である。五世紀の初めに於ける詩人、ルティリウス・ナマティアニヌス (Rutilius, Namatianus) の如きは、特に羅馬とゴオルとの混淆の代表者である。彼はいつも懐しい二つの故郷を持ち、父は彼に兩様の名前を與へてゐた。

この羅馬の政治的統一傾向、及びその文藝上の教養は、ゴオル人の間に強く根をおろしてゐて、後代十六世紀の所謂文藝復興期に際し、それが單に古代文藝の復興ばかりでなく、佛蘭西人自身の復活であるといはるゝほどに、一般に浸潤してゐたことは忘れてはならぬ。そしてそれが十七世紀の王權的統一に導く遠因にもなれば、また文藝復興の精華をして何處の國よりも好き實を結ばせる遠い素因になつてゐたことも無視してはならぬ。

ゴオルの社會組織に、産業に、教養に統一を與へたものは、羅馬の治政であり、やがて信仰上の統一を導いたものはクリスト教の教化である。

最初シイザアの征服とともにゴオルの國へ持ち來たされたものは、羅馬人の宗教、即ちパガニスム (Paganisme) である。羅馬人のこの宗教はゴオルの宗教とあまり相異のない多神教である。従つてこの二つの異つた宗旨の神々は、次第々々に合流する形をとつて行つた。けれどその間で、二つの際立つた變化が示された。そしてゴオル人を全く驚かした。その一はドリユイド組織の廢滅であり、その二は羅馬の神殿の建立であつた。

征服者羅馬人は被征服者ゴオル人に公許なき一切の集會を嚴禁した。ドリュイドの制度もこの公許なき集會と見なされた。最初皇帝オギュストは羅馬の市民權を得たるゴオル人にドリュイドの祭事に列する事を禁じ、別して人身犠牲といふ事は嚴禁した。オギュストの後繼者等は次第々々にドリュイディスムに壓迫を加へ、絶滅せずには置かなかつた。そこでドリュイドの或る者は身をもつてブリテンの島國へ逃れ、或る者は改宗して、新宗教の司祭となり、また或る者は祕かに新歸付の貴族の館内に地位を求めて、若い貴族の子弟等の師父となつて、古來からの教義傳説を保存もし、教へもし、また暗に羅馬の宗派に對抗もしてゐたのである。それ等が後の中世紀の吟遊詩人等、トルヴァドゥル、トルヴェエルとなつて發現する素因を作つたものであり、セルトの傳説がクリスト教と結びついて中世紀文藝の主要な開花を見することにもなつたのである。また或る者は一般民間に潜伏して、賣卜者、豫言者の如きものとなつて、古來の文化の變形を流布せしめ、或ひは不思議な醫術などを人々に施してゐたのである。被征服者の文化はかういふ形式で保存せらるゝ場合が多い。

他の最^も一つの驚きは神殿の建立である。ゴオル人等にとつては、榊の森以外には聖地はなかつた。彼等は神々が殿堂内に閉ぢこめらるゝものとは思はなかつた。羅馬では「諸神の殿堂」即ちバンテオンを初めとして、ジュピテル、アポロンその他の神々のそれ／＼の神殿が有り、更に東方の異教の神、例へば埃及のイシスの神の如きをも併せ祭つた。それ等をゴオルの國へ、特に南方の都市に持ち出して、到る處にその神殿の建てられるのが見られた。リオンに於いてはオギュスト皇帝と、羅馬の都

市そのものを示す群像の立てらるゝにさへいたつた。

この偶像及び神殿の建立はゴオル人等を驚かしはしたが、羅馬の諸神とゴオルの神々とは性質は略似通つたものであつた。例へば日の神アポロン(Apollon)はベルウ(Belou)に、雷神マルス(Mars)はカミュリュス(Camulus)に、森と狩獵との女神ディアヌ(Diane)はアルデュイナ(Ardina)に類似性を認むるが故に、それ等の神々の出現にはさまで驚きはしなかつた。たゞ森の聖地に自在な存在を示してゐたゴオルの諸神が變裝して、神殿内へをさまつたといふ相違だけであつた。

更に最^も一つの相違は、このガロ・ロマンの社會生活には、ゴオル獨立時代に於けるドリュイディスムの如き、またクリスト教國となつた佛蘭西に於ける教會組織の如き定つた制度はなく、凡ゆる市民が或る時間には司祭であり、また家々では家長が司祭となつて、家の神々を祭り、祈りをさゝげたものである。羅馬人等はゴオルの國へその神々と共に、曆を輸入し、今日までも十二箇月の名前、週日の名前は悉く羅馬の神々の名を傳へてゐるのである。

このドリュイドの神々とパカニスムの神々の混交状態の上へ、クリスト教は一層徹底的な信仰統一の組織を與ふるために、持ち來たされたものである。そしてそれ以後の佛蘭西文化を特色づける大切な役目を演ずるのである。

クリスト教はその發生の當初非常な迫害を蒙つた。それは、若しクリスト教が他の宗教と同じく一種の宗教として、唯一の神を立てるだけで、その神を他の異教の神々と同じ地位に置く事に満足して

みたならば、羅馬のパンテオンは、クリストの神體を他の神々に同じく列せしむる事を許したであらう。けれど、クリスト教は唯一絶対の神を求めた。他の諸神をば悉く破壊せんとした。更にクリスト教は羅馬の政治組織の基礎をなしてゐる帝王の神性を全く否定し、國定の宗教儀式を無視し、やがては軍務に服することをも拒否した。さらに教會組織を立て、不信者をば加はらしめない。羅馬政府から見れば秘密結社を組織した事となり、國禁に觸れて、壓迫を加へらるゝ事となつたのである。

ゴオルの國へは勿論最初は南方の諸都市へ、クリスト教の布宣は初められた。リオンに於いて初めてゴオルの國のクリスト教會は建てられたのであるが、このゴオルの國內に於いても二世紀、三世紀はクリスト教に對する迫害は最も烈しく、この時期がクリスト教徒の悲劇的英雄的な時代である。殉道者の殺戮は到る處で演ぜられた。巴里郊外の「殉教者等の丘」(Le Mont des Martyres)は、今日もモンマルトル (Montmartre) の名に於いて傳へられてゐるのである。

但し初期に於ける宗教の迫害といふ事は、明確な信仰の相違、觀念の相違から生ずる争鬭迫害といふよりは、寧ろ慣習の保存性の現はれである。勿論宇宙に於ける唯一絶対の神を信ずるといふ事が困難であつたには相違ないが、それよりも從來のガロ・ロマンの風習たる偶像崇拜を捨てること、手近かな具體的な目に見える神々を捨て、目に見えぬ唯一の神に仕へるといふことが不可能に思はれたのである。

然るに時が経つにつれて、即ち三世紀から四世紀となると、今度はクリスト教徒の方から進んで、

欠

欠

この主權を占めようとする企てに兎に角成功し、他の種族等に打ち克つて、初めて佛蘭西の王者の位に即いたのがフランク族を率ゐてゐたクロヴィス(Clovis、四百六十六年—五百一一年巴里で死す。四百九十六年に洗禮を受けて、クリスト教徒となつた時、フランク族とガロ・ローマとは初め)である。そして舊時ガリアと呼ばれてゐた國にフランスシア(Francia)即ちフランス(France)といふ名を與へることになり、メロヴェンジアン(Merovingien)といふ佛蘭西の第一の王朝が開かるゝこととなつたのである。

このフランク族を代表とするジェルマン種族の特色は精力的で、頑強で、眞面目で、所謂ゴオロワ氣質とは相當異つた對照をなすものであり、これと九世紀頃に侵入して來たノルマン人の影響とは、佛蘭西人の氣質をつくり出すのに最後の最も大切な役目を演じてゐるのである。そして人口上からもまた生物學的影響の上からもジェルマンの侵入は佛蘭西にとつて非常な出來事であり、羅馬人が教養と信仰と制度とを教へて行つたのに對して、ジェルマンの混合はまづたく實質的に大切な要素を佛蘭西人に加へたものである。

フランク族はジェルマンの風習を保持してゐて、彼等の中には絶對專制の君主は考へられなかつた。特別な武人階級はなくて、總ての自由人が武器をとつて集まつたのであり、特別な法律を定めず慣習で事を處して行き、人を殺せば刑せらるゝよりは、その者の近親から復讐を受けねばならず、特殊な租税はなくして、王は人民の好意的寄進を受けてゐた。と同時に王は臣下の功績に己が直接の好意で報いをしてゐたのである。つまり彼等はいまだ族長制度の習慣を守つてゐたのである。絶對專制の羅馬

の後では、ゴオル人等は寧ろこの風習を悦び迎へたのであつた。けれどクロヴィスを初めその他の後繼の王者等に見れば、羅馬の統制に従ひ、一意それを目標として、統一主權を握ることを目標として努力したのであつた。けれどその目的は容易に果たされる事ではなかつた。

第一にクリスト教會の勢力は全く一大王國の如きものであつて、その組織は次第に強固になり、富は増し、その上 神の名に於いて土地をも財産をも集めることができ、その廣大な教會の領土に對しては免税しなければならず、若し教會の權力に手を觸れようとすれば、王者の前とても司教等は傲然として「神に屬するものを奪はんとならば、神はおん身の王國を奪ひ取らるゝであらう」と言ひ放つた。其處で軍務に於いては優秀なフランクの王も遂に、その教會へは降服せずにはゐられなくなり、クロヴィスは四百九十六年に、部下三千の兵士等と共にラエンスで洗禮を受けて改宗し、それ以後佛蘭西の代々の王は *Tres Chretien* と呼ばれるゝやうになつたのであつた。征服者が被征服者の文化に降服した姿である。

次には、教會の領土から租税は取れず、その他の領地からもいまだ定額の徵税をする制度は立てられず、その上、王は功臣等には報酬を與へねばならぬ。そこで已むを得ず、その功臣に報ゆるに領土を持つてするやうになつて來た。領土が分割せらるればせらるゝほど一國共通の徵税法は立たなくなる。遂には王も諸侯の一人の如き弱小なものとならずにはゐられなくなつた。

それにクロヴィスの死後、國土はその子等の間に幾つかに分有せられ、その別々の家々の間に争ひが

續き、更に後繼問題などでメロヴェンジャン王家の歴史は、その間に、クロテエル二世 (Cloaire II) ザゴベール一世 (Dagobert I) の如き明主はあつたけれど、殆んど常に暗殺と流血との連続をもつて終結したやうなものであつた。

そこで新たな第二の王朝「ロランジャン」が起つた。その中にシャルマアニエ大帝 (Charlemagne, 742-814) がゐるのである。彼に於いてこそフランクの王者等が望んだ羅馬式統一が前後に比類なくなされたのであつた。されどシャルマアニエ自身は羅馬法王から皇帝の冠を贈られ、その位に即いたとはいへ、生涯に二度しか羅馬皇帝の服装は身につけた事のないほどに、飽くまでジェルマン人の風習を保つてゐた。そして佛蘭西に於いては、特に彼は農耕を奨励し、民衆を愛し、それに對する壓迫は極力防ぎ止し、教會に對しては自分自身が教徒としての宗法を嚴守すると共に、從來メロヴェンジャン王家の人が憚つて手を下されなかつた制裁をも十分加へ、かくて伊太利に、西班牙に、獨逸全體に、佛蘭西は勿論、廣大な領土を獲得し、南にアラビヤ人を追ひのけ、北にスラウ人を壓倒し、文字通りの大帝國を打ち建てたのである。

けれど彼のこの功績は、後代の「武功史詩」ロオランの歌のなかに讃へらるゝ傳説を残して、右に猛きロオラン、左に賢きオリヴィエを従へた馬上白髯の老帝の姿を永遠にとどむることにはなつたが、彼の死後はまた、伊太利、佛蘭西、獨逸がそれ〴〵獨立するばかりでなく、佛蘭西國內が四分五裂して、彼の死後八十年の後には佛蘭西は既に封建時代に足を踏み入れてゐるのである。

九世紀の半ばごろから、ジェルマン種族の一種ではあるが、スカンディナヴィアから出て来たノルマン族が次第に南下して、佛蘭西の諸々の河口から侵入し始めた。八百八十五年にはルアンを侵略し、セエヌ河を溯航して巴里へ迫つて来た。七百の帆船はセエヌを埋めて巴里を包圍した。彼等は勇敢な種族で、殆んど一年近く巴里を圍んでゐたが陥れることが出来ず、火を放つて焼いたまゝ引き退き、やがて南方へ進出し、疾風の如き勢ひで地中海の岸邊までも達したのであつた。後に彼等が永久に定住した地方が即ちノルマンディであり、この種族がまた佛蘭西人に混入して、その氣質をつくる一つの大切な要素とはなつてゐるのである。少くもノルマンディ出の文藝家を擧げて見ればその特質は窺はるゝのである。

ジェルマンの侵入から封建制度確立にいたるまで、メロヴ、カロロ兩王朝を通じての約五世紀間、人種の混淆と、交戦掠奪と、その間に社會組織は貴族、僧職、武士、市民、奴隸といふやうな階級に區別を立てさせるやうになつて来た。その貴族と武士とはガロ・ロマン系のもので、ジェルマン系のもつとがあり、最初のうちはジェルマン系の人々は都市内に生活することを恐れて、新たな領地のなかへ住みつくやうになつた。それで從來の都市の中には一時衰微するものが生じ、また廢滅するものすらあつた。従つて都市住民の移動が生じ、手工業その他の發達は非常に遅れて来た。

また一方從來の農村の住民は、侵入、掠奪、交戦の結果、地主、自由耕作者等は所有地を失ひ、轉住を餘儀なくせられ、從來の奴隸階級と選ぶところのない状態に置かれた。それにクリスト教は寧ろ

奴隸階級の存在を不法として、その自由と合法性とを認むることを要求する結果、從來の自由耕作者と奴隸階級とが混交して、合法的には自由人であつても、實質的には一様に悲惨な状態に沈んだ。シャルマアニエ大帝はこの状態を改更するために意を注ぐ事は怠らなかつた。

従つてこのゴオル・フランク混交の時代は農業も、工業も、以前のガロ・ロマンの時代よりは寧ろ不振であり、商業は國內に於いて猶太人、西班牙人、伊太利人等の手によつてなされ、しかもそれ等とも武装して歩かねば危険な有様であつた。また一國共通な法律も立たず、羅馬の法律に従ふところ、教會が一切を裁斷する地方、またジェルマンの習慣法に據る部面もあつた。

その中でクリスト教會のみは獨り統一ある存在を一層明かにして、司法權を握り、一般の被害者等を保護し、厳格な宗法を規定して、司教等は全國的に定期的な屢々會合し、修道院を到る處に創立し、嘗ては十字架や十字架像を存置して舊き偶像の破壊に努めた如き山深き場所に於いては、殊に修道場を設置して、修道者等をして斷食結齋の業をつましめ、一方には王や貴族や地主等の寄進を受け、領地には絶對の免稅權を有ち、富と實力と共に充實したる教國を構成してゐた。殺伐な時代に厳しい宗法を課する時は、一方に傑出した聖者等を生むと同時に、他方には惡魔の誘惑といふ觀念も生じて来るのである。聖者と惡魔の對立はこの時代の所産である。そしてカトリック曆の中へ名を連らねてゐる聖者達は大方この時代、即ちフランクの聖者等である。この教會組織の中へもジェルマン風習は影響せずにはゐなかつた。それはジェルマン人等の司教や司祭等が自分等の以前の習慣氣質を教會内へ

持ち込んで来たといふことと、教會自身の領地の保護、權威を保つといふ點からとて、武器を執り、戰爭に参加することをも辭さなくなつて、其處に全くの教職の諸侯が軍職の諸侯と嚴然對立してゐる姿をとるやうになつて来たのである。

種族の混淆から、日常生活の慣習の混交が生ずる。王宮内に於いてもガロ・ロマンの武士が七絃琴を弾ずれば、ジェルマン武士は豎琴を奏するといふ有様であつた。言語の混成はその期間に於いてまた相當複雑であつた。第一に拉典語は教會内及び公文書、法律行政には依然として用ひられてゐた。その拉典語の通俗化したロマ語は一般に行き互り、八世紀、九世紀には既に説教には全くこの語を用ひずにはゐられなくなつた。次に、ジェルマン族と共に入つて来たジェルマン系の言語、特にル・フランスイク (Le Francique) 即ちフランク語は一時相當な勢ひを示してゐたけれども、次第にロマ語の中へ吸収せられ、僅かに軍事語、その他の名詞などにその痕跡を止むるだけになつた。第四にはジェルマン族が英吉利へ侵入すると共に、五世紀から六世紀へかけて、其處のセルト人等が再び大陸へ避難し移住して、一たび消え失せたセルト系の言語をブルターニュの一角へ止めることになつた。ブルターニュなる語すらその時から初まるのである。最後にノルマンの侵入が持ち來した語、それはスカンディナヴィア語で、これはノルマンディへ主として保存せられたのであるが、前のブルトン語と同様、ロマ語の中へいつしか吸収せらるゝやうになつたのである。

然るにそのロマ語なるものが南方語 (Le Provençal) と、北方語 (Le Français) との二つに分れてゐて、

それを Langue d'oc 及び Langue d'oïl と呼ぶのである。そしてこの南北兩様の言語からそれ〴〵特殊な文藝が十二、三世紀にいたつて發現せらるゝやうになるのである。ところが、その北方語の中で、特に佛蘭西の中北部、イル・ドゥ・フランス (Ile-de-France) の地方語が政治的勢力と共に、王宮の語となり、首都の語となり、即ち標準語とせられて、公文書に用ひられ、文藝語として十二、三世紀の史詩、物語詩などを書き現はすやうになつて初めて、獨立した言語、今日でいふ舊佛蘭西語 (l'Ancien Français) となつたのである。近代の佛蘭西語、即ち現在の佛蘭西語が構成せられたのは、所謂文藝復興運動を経過して、十六世紀の終りから十七世紀へ互つての事である。

そこでこの種族、言語、慣習の混淆する時代、大體として交戦奪略の混亂期たるメロヴェ、カロロ兩王朝期の文藝はいかなる表現をなしたであらうかといふに、當時に於いて暇のある、文字を知る、學識のあるものは僧職等であつた。彼等が當代の見聞を書き止めるか、聖者等の傳記を書くかする事が主なる文藝表現となるのである。そして用ひらるゝのはいまだ拉典語である。勿論民間に於ける傳説や、歌謡や、嘆きやの表現があつたであらうけれど、それ等は書き止められもせず、また直接文字で現はされもしなかつたのである。六世紀頃では學校なるものは悉く僧職の司る極めて不備なもので、僅かに読み書きを教へ、最も進んだものに聖人傳を、羅馬法の一部を、或ひはウィルジルなどを讀ませる事があつた。それも極めて少數の者になさるゝ教育であつた。

メロヴェ王朝に於ける年代記、歴史の著名なものは、グレゴワール・ド・トウル (Gregoire de Tours, 538:

—594) の *Historia Francorum* 即ち「フランクの歴史」である。彼も司教の一人であり、親しく見聞するところを録したものが、當代の社會生活をさながら寫してあると言はるゝ。これは五百九十一年までの年代記であり、それに次ぐフレデゴワル (Frédégoire) のものは、五百八十四年から六百四十二年までの年代記であり、これ等が六、七世紀の社會状態を如實に示す無二の記録である。然るに八世紀の初め (727) 作者の不明の *Liber Historie Francorum* なる書物が現はれた。これは上記の二つの歴史を寧ろ民間傳説に従つて書いた、一種の傳奇物語であつて、フランク族の使命を指示し、クロヴィス王の功績をたゞへ、更にそれよりも舊い王者、女后等の勳功をうたひ、宛かもシャルマアニユのたゞへた「武功史詩」の一種の如きものである。——シルベリック王の後、フレデゴンドが敵を逆襲するために部下をして悉く馬の體軀に木の枝を纏はしめ、遠望すれば森の動くが如く、その馬どもの頭の鈴が高鳴つて、却つて敵味方いづれのものともわかたぬ間に不意打ちを敵の上へ加へると言ふが如き、森林が生きて動くといふ考へ方は中世紀には屢々見らるゝ事であり、シックスピアの「マクベス」劇にはそれが物凄く取り入れられてゐるのである。

六世紀の初めに生存した司教で詩人たるアウテヌス (Avitus) が、天地創造、人間の原罪、樂園の喪失、大洪水、紅海渡過などをうたつた詩は、ミルトンの「失樂園」に比すべきものと言はれ、同じくフォルテナ (Fortunat. 530—609) はメロウエ王朝唯一の詩人として、優れた挽歌、頌歌を残し、殊にカトリックの讃歌で永久うたはるゝものを残してゐる。けれどいづれもが教會の手を離れぬ、學者の文藝である。

カロロ王朝となり、特にシャルマアニユ大帝となると、帝國の建設の後は一意文教を盛んならしめんとて、八方から學者を集めた。その中の最たる者は、英吉利から呼ばれたアルキエヒン (Alcuin. 735—804) である。彼の定めた七藝 (Lib. Sept arts) なるものが、中世紀を通じての學藝の基礎となつた。即ち言語と正しき格調とを保持せしむる文法、簡潔的確な論議で結論を引き出す辯證法、豊富な語彙で雄辯を驅使せしむる修辭法、及び、數學、幾何學、音樂、天文學である。教會附屬の無数の學校、及び都邑を通じて、無料の多數の學校が建てられた。同時にまたシャルマアニユは凡ゆる學問に關する圖書及び多量の文獻を蒐集し、羅馬の繁榮を領土内にいたさうとしたのである。それ故、この時期を第一の學藝復興期と稱し、十三世紀、十字軍の東方との關係を第二のそれと見なし、十六世紀に於ける現象を第三の最も大なる學藝復興と呼ぼうとする人もあるからである。

この時代の歴史は、即ちシャルマアニユに扞從してゐた、身長極めて低い、テーブルの足にも比べらるゝ程の小男ではあるが、機智に溢れ皇帝に愛せられたエジナル (Eginard. 779—840) の書いた「シャルマアニユの傳記」に盡くされてゐる。筆者は親しく見るところを公平に寫し、當代の出來事、文教の進歩の度合ひ、宮廷の生活、王族等の關係、そしてシャルマアニユ、その人の性格にいたるまで書き分けてゐるのである。後代の聖ルイ王の傳記を書いたジョワンヴェイル、或ひはルイ十一世の年代記を書いたコンミヌ等の遠い先驅をなすものである。

この王侯の文學に對して、一方専ら教會に屬する文藝がまた前代から引き續き發達したといふ事は考へらるゝ。聖者等に對する頌歌、殉教者をいたむ歌、クリスト受難の歌などが教會詩人の手によつて作られ、殊に諸聖者等の傳記にいたつては優れたものが幾篇も書かれたのであつた。

シャルマアニュの治下にあつて既に、會堂内では、復活祭や、降誕祭などの時には、それ／＼の人物の服装をつけて對話をやり、身振り動作も伴はしめ、更に使徒傳の行事なども演出したものである。十四、五世紀に發達する宗教劇の原素と見らるゝのであるが、それに用ふる語はいまだ拉典語ばかりであつた。

それとまた他方に、ジェルマン族が侵入と共に持ち來した傳説、歌謡が有つたであらうといふ事も考へらるゝ。事實フランク人等は夜すがらでも飲み明かし、唄ひ明かし、その歌のなかで自分等の過去の英雄や、異常な出來事やを語りつき唄ひつきしてゐたので、シャルマアニュはそれ等の歌を蒐集採録せしめたのであつた。それを彼の後繼王たるルイ一世は、不信者の歌だとして細心にも燒き捨てさせてしまつた。繼かに「ヒルデブランド」(Hildebrand)の歌の一部が残つただけである。「ニベルンゲン」の歌は十二世紀になつて收録せられたものである。

併しそのフランク族の過去の歌は保存せられないにしても、彼等が過去をうたひ英雄を讀へるその風習は、後に「武功史詩」を生み出し、所謂「ロマ語の形式に盛られたるジェルマン式感興」を永久に傳へるやうになつたのである。

これ等よりも更に民衆的な、市民や農夫等の間にうたはれてゐたもの、若しくはそれ等の生活をうたひだしたものがまた存在してゐたであらう事が考へらるゝ。「機杼の唄」ともいふべき、*Chanson de Toile* の如き、婦人等が紡車をまはしつゝ唄ふ歌、或ひはその糸繰りをしてゐる女性をうたふ歌の如き、また牧歌 *Pastourelle* —— 武士と野にゐる牧女との戀の歌、おそらくその最初は侵入者と土着人との關係を示すものであつたであらう——の如き、また戀する者同士が一夜を共にしての、その翌朝のうた *"L'Aube"* (曙の歌)の如き、二人の他に最一人の見張りをする者がゐて、それが曙を告ぐる事に後にはなるのであるが、原始的に言へば、その曙を告ぐるのは自然の禽の鳴聲でなければならぬ。その曙の禽のしば、鳴き、如何なる民謡にでも用ひらるゝ疊句となつて、形式的に用ひらるゝやうになつた一つの始源であらう。その他、村人等の集まりに伴ふ行進の歌、踊りの歌の如き、次の時代になつて書き留められ、一定の職業唄ひ手がうたふやうになるにつれて、やがて宮廷的な優雅な小唄抒情詩とせられてしまつたのである。

歴史的な物語的な傳説にもせよ、また幼稚な抒情詩の始源にもせよ、更に當時の出來時にもせよ、印刷出版のなかつた時代には、それを職業的に、専門的に語りつ傳へつする者がまた自づと生れて來るものである。(九世紀、十世紀頃に既にジョグレル *Joglar*) 或ひはジョグトル (*Jogtors*) と呼ばれる一種の唄ひ手の群がゐた。宛もゴオルの舊時、バルドの群がゐたと同じことである。これ等は唄ひつ、喋べりつ、語りつ、樂器を鳴らし、即興詩をも誦し、傳説を、當時の出來事を傳へ、大道樂師でもあ

れば、館内の手でもあれば、また町より村へ、都市より都市へと歩き廻つたものである。彼等は多數の人々に教へもし、知らせもし、樂しませましたのである。そこに共通の話題を供し、共通の興味を喚起し、同時に言語の流通統一にも資し、やがて大きな歴史詩と、物語詩を協同で語り出し、作り出し、そしてそれ等が書き留めらるゝやうになつて初めて、中世紀の佛蘭西文學なるものが存在の姿を我々に示すやうになつたのである。それが十二、三世紀の封建制度の隆盛期に於いてなされたのであつて、従つて、初めて我々に残された佛蘭西文學なるものは、封建的色彩を持つ、封建的組織の中から織り出された綾であるのである。

シャルマアニユ大帝死後、紀元八百四十二年、ルイ・ル・ジェルマニクとその兄弟シャルル・ル・ショオウとの間に交はされた領土分割に關する「ストラスブウルの宣誓」(Serments de Strasbourg)によつて初めて、ロマ語が公文書として用ひられ、今日まで保存せられ、その翌年結ばれた「ヴェルダンの條約」(Traité de Verdun)によつて初めて佛蘭西の歴史は初まると言はれる。ゴオル獨立時代、ガロ・ロマンの時代、ゴオル・フランクの時代を経て、初めて美しき佛蘭西の歴史が初まると言はるゝが、その佛蘭西歴史の最初を飾るものは、即ち封建制度である。

カロロ王朝の末から即ち九世紀以來、次第に貴族の獨立領土は確立せられ、館や城が築き上げられ、紀元九百八十七年、ユギニ・カペ(Capet)が即位して新しき第三王朝、即ちカペティアン(Capetian)

(iii) 王朝が開かれると共に、佛蘭西といふ自國意識は持ち得たかも知れないが、事實王權は他の強力な諸侯と大差なく、全く群雄割據の状態を呈するにいたつたのである。

斯くなるべき趨勢はメロヴエ王朝以來既に見えてゐた事である。即ちゴオルの舊時の族長制度が封建制度に發展して來た當然の徑路である。經濟的に言へば自然經濟の状態が交換關係に發展して來た事であり、從來の狭小な地域を占めてゐた領主等が一層弱小な地主等を併合して、廣大な領土を占むるやうになり、同時にジェルマン族の風習からと、またその領土を保護する必要からとで、各領主は自分等に從屬する臣下を召集し扶養するやうになつて來た。カロロ王朝になるとその傾向は一層確然として來て、九世紀以來世襲の武士階級が出來上るやうになつたのである。即ち往時の族長或ひは領主はそれ／＼の采邑(Fief)を持ち、それ相應の武士を抱へ、侯伯の區別を立て、各自が嚴然たる一國を構ふるやうになつて來た。

それとまた一方には屢々記した如くクリスト教會が、教區、教管區、大教管區といふやうに領土の廣狹で順位を定め、司祭、司教、大司祭と順序をつけ法王治下にこれも嚴然たる組織をとるやうになつて來た。そこで其處には軍務と教務との二重の封建制度が出來上つたのである。

この二重の封建制度を、經濟的に支へて行く可き者がなければならぬ。それは勿論大多數の產業従事者等、特に農民でなければならなかつた。土地の所有權は、自身耕作せざる諸侯、僧職、武士等の手にあつて、大多數の農民等には、たゞその土地を耕耘する仕事だけが與へられてゐた。十一世紀

の或る司教が言つた如く、「神の家は三様の組織である。或る者は戦ひ、或る者は祈り、或る者は働らく」と。
そしてこの三様の組織が十五世紀の終りまで存続したのである。

第二篇 封建時代の佛蘭西文學

- 一、封建制度隆盛期の文藝
- 一、封建制度崩壊期の文藝

一、封建制度隆盛期の文藝

(十二、三世紀の文藝)

軍務、宗教二重の封建組織の構成——二重制度の交叉線上に立つ騎士階級——理想化された騎士——トルバドール及びトルヴェール——南方文藝、抒情詩の種類——北方文藝——「武功史詩」——「物語詩」——「狐物語」——「寓話詩」——抒情詩——「薔薇物語」——十字軍の發生及びその結果——第二文藝復興——歴史文學——劇文學の要素

さて前章に述べたる如き二重の封建制度が確立した。その封建時代の社會相を反映し、その當代の要求を具現するものとして、如何なる文藝が現はれて來べきであらうか。少くもこの二重の封建組織の交叉點から發せらるゝ精華がなければならぬ。その役目を演ずる何者かがあなければならぬ。それを引き受けたものが即ち當時の騎士の階級であつた。

この二重組織の一方に立つて、軍事をのみ事とし、領土の擴張併合のみを念としてゐる諸侯は、各自の領土内に於ける行政及び司法の事に關しては全然意の如く振舞ふ専制君主であつた。その専制君主等が争ひを起し、干戈にうつたへようとする場合に、それを未然に防ぎ、裁決を下し、是非を明かにする者がなかつた。王權はあれど微弱で全く統率力を缺いてゐた。その紛擾は屢々生じ、またその紛擾を惹き起さんと狙つてゐるのが封建そのものの特色であつた。但しその場合唯一の仲裁者たり得

るものは教會であつた。そして神の名に於いて、神の命令を強ひて平和に導き得る場合もあつた。*Trieste de Dieu* といふのがそれである。そして戦時となれば、一般に避難所を供給し、戦争の被害者をいたはり、戦亂の經濟的疲勞をも救済し、平時に於いては年少者等の教育を引き受け、醫藥をも給し、出來る限り奪掠混亂を防止し、災禍を未然に避けしめようとする唯一の社會的機能を備へてゐたのが教會であつた。それだけ實質的勢力を持つてゐたのである。

それ故、封建時代に於けるカトリックの會堂なるものは、一般人にとつては避難所であり、祈禱所であり、同時に悅樂を與へらるゝ場所でもあつた。其處は一種の團體氣分を味はしむる處、社交場でもあれば、また時に取引關係の結ばるゝ市場でもあつた。と同時に、此處は封建時代の音樂の源泉地、繪畫彫刻の發生地、演劇の發現地でもあつた。——この事は十五世紀以前と文藝復興期以後とに作られたクリストの十字架像の面貌の變化によつても證明せらるゝ。十五世紀以前のもの、或ひは特に十二、三世紀のものならば、クリストは悦ばしい安らかな顔をしてゐる。信仰と平和と救ひとの象徴である。文藝復興期以後のクリストの面貌には苦惱の影が色濃く漂つてゐる。それは會堂は告白と祈禱との場所である事に變りはないが、他方面、實際的な平和的社會的機能を次第に失つて、所謂神祕的な方面にのみ存在權を主張するやうになつて來た證據である。

今日もロワル河畔に特に數多く完全に保存せられてゐる中世紀の城塞、北佛蘭西及び中部地方へかけて見らるゝゴティック式の諸會堂、これ等はまさにこの封建二重制度の最も大きな社會的記念である。

殊にこのゴティック寺院の建立にいたつては、當代の人々が、わけても十三世紀に於いては、幾代も幾代もをかけて、幾多の勞力も惜しまずに、自分等のその悦びの場所、救ひの場所、集合の場所を永久的に築き上げようとした記念である。ヴィクトル・ユゴオの所謂「巨大な石造の聖書」である。ドリュイデイスムの昔は、榊の樹の森を聖所として集まり祈り、同時に生活に必要な大事を協議する場所としてゐたのであるが、中世紀に於けるこれ等ゴティックの寺院は、それ等榊の森を巨きな石造に再建したものである。森の頂きを尖塔に、林間の小徑を廻廊に、樹々の巨幹を圓柱に、林間の空地を座席に、そして巨樹の洞穴を神龕に、さらに樹間を渡る風の音を思はするオルグを据ゑつけ、樹々の木の葉に日影の閃めくさまを寫しては、巧妙なヴィトオロをさへはめこまずにはゐられなかつたのである。それと同時に南方に於いては、ロマ式の會堂が、さらにまた東方ビザンタン式の會堂が、それ〴〵の地方色を見せて打ち建てらるゝやうになつたのである。

この當時の信仰と救済と喜悅との永久化が會堂といふものに於いてなされるゝ頃になると、文藝もまたたゞ口より耳へ語りつぎ言ひつぎしてゐるのでは物足らなくなつて、初めてそれを書き留めて置く必要を感じると同時に、單に語りつうたひつするだけでなく、書くといふ事によつて文藝の表現が直接なされるゝやうになつて來たのである。嘗ては單に一部の學徒の手によつてのみ書き現はされてゐた文藝が、十二、三世紀にいたつて初めて、學徒の間のみ用ひられてゐた拉典語でない一般語、自國語を用ひて、比較的多數の人々の合作から出來上つた表現となるやうになつて來たのである。

從來は何事でも口頭でのみ役立つてゐたものが、經驗が複雑になり、單に記憶にのみは止めてゐられなくなると、其處に文書の必要が生じて來るのである。一般に對する布告、遠地との取引に關する通信、それ等がまた普通語にてなされるゝ文書を必然的に作りいだすのである。そこで十二、三世紀にいたつて初めて文藝もまたこの必要に驅られて自然に書き留めらるゝやうになつて來たのである。従つて、當代に於いて書き現はされた文藝たるものは、舊來からの傳説を集成したものと、當代の直接の要求理想の具現したものと、更に當時の社會生活實狀の描寫との混成せられてゐるものであるべきである。それが民族的傳説であるにもせよ、また一般的な民謡的な要素の反映であるにもせよ、さうあるべきである。

但し文字の使用、文書の必要といつたにもせよ、まして文藝の表現の如き、勿論當時の社會に於いては全般的である筈はない。やはり限られたる人々の手に納められてゐたのである。シャルマニアニ大帝以來、學校の建てられる事は次第に數を増して來て、各教區各教管區にはそれ〴〵學校が建てられ、その中でもラニンスの學校、シャルトルの學校の如きは有名なものであり、千二百十五年には巴里大學の組織が立ち、四學科に分ち、神學、法學、醫學、及び藝術學、この藝術學の中に所謂七藝の學問がこめられてゐたのである。言はゞ神學と羅馬學とを學ぶ場所であつたのである。そして當時の巴里のセエヌ河の左岸は、二萬人以上の各國の大學生が群集し(現在の巴里大學の學生も二萬人程度であり、その中に外國人學生は約三千五百人位ゐるのである。)、獨逸學生と巴里市民と大衝突があつたりして、非常な元氣を見せてゐたのであるが、そして後になつてこそ

自由市民が入學もし、更に貧困な學生を教養收容する方法も立つたのであるが、いづれの學校をでも、また學問をでも指導する人々は皆聖職の人であり、大學に學ぶものも、やがて僧職を志す者が多かつたのである。

従つて十二、三世紀當時に於ける一般市民や農民とは、學問も、文藝も相當縁遠いものである事が考へらるゝ。然らば當時の文藝の中で主役を演ずるものは、またその文藝の表現を引き受けてゐるものは如何なる人々であり、如何なる階級であつたであらうか。それは當代の封建二重制度の交叉點に身を置き、その二重制度を一身に具現してゐるものでなければならなかつた。それが即ち騎士階級であつた。

九世紀以來戰士はいつも馬上で戦つた、それが *Miles* で、即ち騎士 (*Chevalier*) であつた。劍をつり、投槍を持ち、長い楯で身を防いだ。その楯を *écu* といつた。十一世紀の末頃からさらに鎖子鎧を身につけた。それが膝まで達し、頸まで包んだ。兜をつけ頬當をした。そしてその重い楯を持つて従ふ者を、*houvier* といつた。十一世紀以來、この騎士が一階級を構成し、世襲となり、婚姻も騎士の家族の間でなければなされなくなつた。彼等は自分等の仕事を職業とは考へず、自分の階級の權威と心得た。従つて最早や以前の自由人であることに満足せず、*gentilshommes* と呼ばれた。即ち優れた種族のもの (*Noble*) といふ意である。

この騎士等は、神に仕へる觀念と、主君に仕へる觀念とを同時的に所有してゐた。とまた自己の配

下に屬するもの、自分の領土に生活するものを保護し、特に弱者を救護する事を本領としてゐた。即ち彼等は被支配觀念と支配觀念との結合點に身を置いてゐたのである。この奉仕と保護との兩様な働きをする騎士階級を、治者の側からも、被治者の側からも、代表的な典型的な理想的なものにつくり出したい要求が働いて、當代の文藝にはこの騎士等を實際以上に理想化して表出せんとするのである。ロオランの如く勇敢なれ、オリヴィエの如く賢明であれ、ランスロの如く清純であれ、圓卓騎士等の如く誠實であれと願つたものである。

この騎士等が交戦で滅殺して行くのを封侯君主等は補充しなければならぬ。そこで領地内の自由民の子弟等を養成し拔擢し昇進せしめ、最初は楯持たらしめ、やがて騎士階級に昇せたものである。十三世紀以來は、エキユイエもシュヴァリエも殆んど同意義を持つやうになつて來た。領地の民等も自分等の子弟を城内へ送つて立身せしむることを光榮とした。其處でジュルマン以來の風習がなほ傳へられてゐて、騎士たる可き者は世襲者でも立身者でも一定の年齢に達すると、元服の式を受けるのであつた。

第一に彼等は水を浴び身を淨め、純白な下着、眞紅の長衣、黒い短マントを身に着けた。それは清淨と血と死とを意味した。やがて二十四時間の斷食、祈禱、告白、司教よりの受戒、禮拜、説教を終つて、最後に司教の手から劍を授けられた。次いで彼等は領主等の前へ出て、問答を交はし、忠誠を誓ひ、初めて騎士たる資格を授けられたのである。

この騎士たるものがその忠誠を誓ふ條々は二十六箇條から成つてゐる。その第一條は「敬虔に神を敬ひ、仕ふること。全力を盡して信仰のために戦ふこと。そしてキリスト教を見捨てるよりは寧ろ千百の死をも辭せざること。」第二箇條は「忠實に封建君主に仕ふること。そしてその君主とその國とのために勇敢に戦ふこと。」第三箇條は「正常な係争をしてゐる寡婦、孤兒、未婚者等の如き最弱者等の權利を支持し、必要あらばそれ等のために身を提すること。但し自己の名譽を汚さず、自己の王または領主に反せざるを條件とすること。」

それ以下騎士としての道德を、振舞ひを巨細に限定し、更にその第二十箇條には「斷じて既婚女、未婚女等に對して亂暴を働かざること。更にその人々の同意なくして捕虜とせざる可きこと」が誓はれてゐるのである。スイスモンディ(Simmundie, 1773-1824)の著「佛蘭西人の歴史」(參照)はいふ、當時「唯一の公衆力となつた貴族が、武器を被壓迫者等の防禦に捧げるといふことが騎士制度の根本思想であつたやうに思はるゝ」と。被壓迫者等のなかでも、殊に女性等に對する振舞ひを騎士等をして堅く誓はしめたといふ事は、侵入掠奪が常事であつた當時に於いては、特に必要なことであつたであらう。それがやがてカトリックの宗教感と結合して、女性の保護から女性の崇拜といふ事にまで進められ、それを騎士の一つの美德の如くに歌ひ出さずには置かなかつたのである。それに舊いジェルマンの習慣は、女性の感性性を尊重し、その直感と豫感とを神聖視し、女性に一種の「聖格と神性」(Sanctum et Provirium)とを附與した

ものであると説く歴史家もあるが、これはジェルマン族に限られた習慣ではない。文化の若い時代では、何處でも女性の感性性は男性の合理性に先立ち尊重せられるものである。ゴオルの舊時にも、ドリュイドと並んで、女性の神職(Druidesses)等が在つて、時には男性のそれよりも一層尊敬せられたものである。

騎士と女性、兎に角その関係を理想化する必要が當代にはあつた。騎士元服の式に於いて、後には領主の夫人その他何人かを選んでその女性の前に膝まづき、忠誠を誓ひ、その人から劍を授けらるゝやうにもなつて來た。騎士にとつて戀愛は修練の手段であつた。ブルトン物語詩の殆んど總てはこの関係を理想化したものである。或ひは「薔薇物語」の前編の如きは戀愛を通じて騎士を鍛へ上げるための教科書の如きものである。其處で古代希臘の文藝に見る如き官能的な戀とは異つた、一種の清純な理想化された戀愛詩歌がつくりだされた。さうすることが何よりも必要であつたのである。騎士と牧女との戀をバストゥレルで描き出すが如くに淨化しなかつたならば、目をそむけずにはゐられない現象が到る處に見られたかも知れぬ。そこに宗教が働く、圓卓騎士が生れ出る。聖盃傳説が中歐の野をくまなく行きめぐるのである。

騎士等は理想化せられて當時の文藝の中へ姿を見するばかりではない。彼等そのものの階級から當代の文藝表現を代表的に引き受ける一群の連中が現はれて來た。それが兩方では Troubadour と呼ばれ、北方では Trouvère と呼ばれた吟遊詩人等の群である。

この二つの語は、語源からいへばいづれも *Trovare* から出たもので、見出す、工夫するといふ意を持つた語である。即ち面白きことを見出し、工夫し、唄ひ出すといふ意である。これ等南北の詩人の群は、その數各およそ二百人位づつを算することが出来る。そして彼等がうたつた小唄だけでも、南方詩人のものがおよそ二千六百篇、北方詩人のものが二千三百篇、寫本によつて保存せられてゐるのである。勿論南方詩人等は南方語を、北方詩人等は佛蘭西語を用ひたものである。時代は、南方トルバドールの繁盛期は、十一世紀より十二世紀に互つてであり、十三世紀の半ば以後は南方では既に封建制度が衰退の徴を見すると共に、詩人等も凋落し初めたのである。北方のトルヴェルは十一世紀後半から十二、三世紀に互つて盛んであり、十四世紀までは兎に角つゞいてゐたのである。つまり十二、三世紀が南北に互つて封建時代の隆盛期であり、従つて封建的文藝表現の最も敏活であつた時であり、——會堂建立がやはり南北に於いて盛んになされた時であり、また七たびの十字軍が軍務と教務の二重封建が一致した理想的な團體行動を見せて、陸續として中歐の原野を東方の聖地奪還に向つて動いて行つた時代であるのである。

南方詩人等の特色は主として抒情詩に於いて見られ、北方詩人等の特質は勿論歴史詩、物語詩に於いて示されてゐるのである。そして、彼等のいづれもが騎士階級の吟遊詩人等であるが、中には、最も早きトルバドールであると言はるゝボワティエ伯、ギユイヨム七世の如き領主もあれば、また南方では時代が経つと、自由市民の子弟、即ち商人等の子や公證人出身等も混じり、一種の詩歌を通じて

の各階級の集合の如き觀を呈しもした。これ等の詩人は諸侯の宴席に列して吟誦して興を添へ、馬、衣服なぞのかづけものを賜はつた。それ等の詩人の下に *Jongleurs* がゐた。といふよりは、以前から存在したこのジョングラルといふ一種の下賤な吟遊詩人等の階級の上へ、支配階級詩人の群が出現して來たと言ふべきである。

このジョングラルなるものは、大方の場合、原則的には自分等では歌をつくらず、詩人等のつくつたものを唄ひ、また古來からのものを誦し、樂器を鳴らし、専ら人々を笑はせ悦ばせ楽しましむるをこととしてゐた。そして彼等は城内へも館内へも招かれたし、また町から町へ、村から村へと大道放下師の如き業をして渡り歩いた。この二種の吟遊詩人の階級は絶えず接觸し交渉し、ジョングラルがトルバドールの階級へ昇るものもあれば、同時に兩階級に屬するものもあつた。

南方文藝

何故に南方詩人トルバドールの方が北方詩人等より早く繁榮したかといふに、おそらく南方の方に一層廣く深く羅馬の文化が浸潤してゐた爲めであるといふ事も考へられるし、また南方人の特色が北方人よりは一層うたふことを好み、特に抒情の歌が好きであつたであらうとも思はるゝ。彼等の中には王の稱號を持つたものも、領主も、騎士は勿論、後にクレマン四世として法王となつた聖職の人もある。また十人の女性のトルバドールさへ算せらるゝ。また何故にボワティエ伯、ギユイヨム七世が

最初のトゥルバドゥルであつたかといへば、この地こそは、南北二つの語、ラング・ドックとラング・ドイとの交錯する地點であり、この地には、Romance (戀の歌) Aube (曙の歌) Pastourelle (牧歌) Ronde. Danse の如き諸種の民謡が最も多く作り出され、うたはれてゐた土地であつたからであると説明せらるゝ。

つまりこれ等諸種の民謡俗謡が、トゥルバドゥル詩の詩源となつたのだと考へらるゝのである。彼等詩人は、それ等の民謡俗謡を取り上げて自分等に適するものに變更し、民間に生れた自發的な歌謡を、彼等の階級に、また彼等の宮廷に適するものとして、所謂宮廷優雅な唄 (Chanson Courtoise) にしてしまつたものと考へらるゝ。それ故、彼等の詩の中に散見してゐる田園的光景をたどつて、彼等以前の歌謡を想像して見るよりほかには、その起源を的確に突きとめることは不可能である。彼等のその優雅な戀 (Amour Courtois) の歌の中に見らるゝ花草や、春の諸鳥の歸還や、五月の悦びや、夜鶯、燕、告天子の鳴聲などはまさしく古い民謡の生るゝ背景をなしてゐたものであつたらうと言はるゝのである。

兎に角、トゥルバドゥルのうたつた歌を分類して見ると左の如きものである。

La Chanson, Le Sirventés, La Tenson, La Pastourelle, La Romance, L'Aube, La Serenata, La Danse, La Ballade, L'Estampie 等の他である。

(一) シャンソンはその取材が悉く戀である。しかもその所謂優雅な宮廷の戀をうたふ背景に舊い民謡の痕跡を最もよくとどめてゐるものである。例へば「若草と木の芽の角ぐむとき、そして諸花の果樹園に開くとき、夜鶯がその音を高く朗かにひびかせて、その唄を投ずるとき、われはそれを聞くに悦ばしく、その花を見るに愉し、われと我が身に心たらへど、わが思ふ人を思へばその心いやまさる」
(Bernard de Ventadour)

かゝる背景は殆んど總てのトゥルバドゥルのシャンソンに共通のものである。そして彼等はその思ふ人を最初はため息と共に遠く思ひ、やがてその人に近く懇求し、更に戀ひ慕ひ、つひに全き誓ひによつて戀人となり、その人への奉仕に全身をさゝぐるのである。今あげたヴァンタドゥルはその女性に對していふ「われこそはおん身の臣下、永へにおん身の奉仕へと身をさゝぐるものなれ。われこそは言辭にかけて、誓ひによりておん身の臣下なれ」と。この戀の過程に彼等は煉獄を通過した。そしてその目標を聖なるものと考へさせられた。戀がまさしく一種の *Christ* であり、宗教であつた。そしてトゥルバドゥルの諸種の歌謡の中でこのシャンソンが最も完全な代表的なものと見ることが出来る。

これに次いで諷刺詩 (Le Sirventés) である。その形状は前のシャンソンと異なることはないが、その發生期は寧ろ遅れてゐるものと見らるゝ。封建制度のそろ／＼敗類しかけた頃のものであらう。宗教上道徳上の一般的題材と政治的な現實的な主材とをうたつてゐる。シャンソンが寧ろトゥルバドゥルの理想方面を示すのに對して、このスールヴァンテは現實味を見せてゐるのである。時には或る領主に對

する個人的の皮肉、復讐の感じさへも歌つてゐるものもある。その中にはまた「十字軍の唄」(Chants de Croisade)の如く、主長を激勵して聖地回復に赴かしめようとしてゐる如きものもある。

次には討話詩(La Tenson)である。これは一種の討論體、問答體の詩である。その起源は舊い民謡にひいてゐるのではなく、寧ろ當代の幼稚な知識階級のなかに生れた好奇と遊戯との混交であらう。その對話の題材は随分奇怪なもの、卑俗なもの、また相當眞面目なものもあるのであるが、要するにいづれもが戀に關する疑義である。例へば「戀をこよなく捕へ得るものは何ぞ、心か眼か？」一人が答へる。「眼こそ。心は眼の判定にのみ従ふものなれば、眼はいつも心を運びゆくものにこそ」と。すると反對者が報ゆる、「心の内にこそ戀はこよなき身の置き場を求むれ。心は遠くをも見やれども、眼は近くをのみ見得るに過ぎざればなり」と。まあかういつた討話の連續である。この中に後代^{フランスイオウ} Precosite の淵源を、サロン文藝の萌芽を認めることが出来ると同時に、その戀の疑義が一層擴大されて、茶化したものとなつて現はれて來るのがラブレエの「バンタグリユエル物語」の中に出て來る結婚に關する疑義である。

次は牧歌(La Pastourelle)である。これは最も民謡的の起源に近い形體内容を備へてゐるものである。騎士たる詩人は旅して行くうち、家畜の番をしながら、花を摘みつゝうたつてゐる、若い優しい牧女を見かける。騎士は丁寧な挨拶をしつゝ、愛嬌を振りまきつゝ、やがて戀をば打ち明ける。この二人の對話、ことに素樸の中に機智のひらめきを見する村娘の言葉、今でも南國の野に見られるであ

らうやうな娘、南國の詩人ミストラルの作にでも浮び出さうな姿である。恐らく中世騎士と牧女との關係を、この感慫な機智ある唄に仕上げるためには、幾多の忍苦が要せられた事であらう。その中に騎士たるやはり修業が籠められてゐるのであらう。これは勿論後代の田園詩、田園劇(La Pastorale)の起源となるものである。

次の戀歌(La Romance)は、詩人の戀の冒險を討話體にうたつたもの、牧歌に似通つた形態であり、このロマンスは併し寧ろ北方の詩人トゥルヴェル等の作歌の中に非常に數多き類例が見出される。「曙の歌」(L'Aube)はむしろ「後朝の歌」ともいふべきものである。二人の戀人等が夜相逢うて、曙の光りさしそめ、朝鳥の諸聲を合圖に別れ行く舊い自然の民謡から勿論その起源を引いてゐる。それを優美なものに變更せしめ、自然の諸鳥の鳴き聲の代りに、夜すがらの城内の守衛の呼び醒ます聲としたり、または夜すがら神に祈りつゞけてゐる忠實な友の聲と代つたりしてゐる。そして各句の終りの疊句として「今こそは曙の光り射し初むるを見る」と繰り返させてゐるのである。けれどこの種の唄の最も原始的な情景は、シエクスピアの「ロメオとジュリエット」に見る花園の場面に最も巧みに劇化せられてゐるのである。この「曙の歌」に對照せしむべきものは「夕の歌」(La Sereine)である。更に舊い民謡を最も好く傳へてゐるであらうと思はるゝものは、踊唄(La Danse)小唄(La Ballade)その他のものである。

これ等の唄のいかなる種類にせよ、トゥルバドールのうたへるものは、皆抒情詩といふ事が出来る。

そしてその主材はいづれも戀である。彼等騎士等はこの戀愛を通じて、醇化せられ、修練せられたのであつた。といふよりは寧ろ彼等の殺伐な戀愛こそは何よりもまづ第一に醇化し鍛錬せられねばならなかつたのであらう。彼等は或るシャンソンの中でうたつてゐる、「誠實なる心もて己が主君に仕ふるものは、道理が己が主君をして我が身の上によりき報いをなさしむることをこそ待て。全き戀はこのおきてをこそ學ぶべけれ」と。封建道徳と戀愛とを當然結びつけてゐるのである。「戀は卑劣なものを有徳たらしめ、愚かなるものに心の働きを與へ、欲深きものに物惜しみをせしめず、狡猾なるものに忠實を、心亂れしものに叡智を、無智なるものに智慧を、心たかぶれるものにやさしさを與ふ」と。

即ち戀愛を通じて、考ふるにも、物言ふにも、身を振舞ふにも、意識し、反省し、節度を保たしめられたのであつた。そしてその愛するものが一層高きものであればあるほど、この戀愛の刻苦修練は一層の效果を示すものと考へられた。そこに封建的で同時に宗教的な修練の姿が見らるゝ。そしてこの *L'Amour Courtois* は、後に封建時代が去つて、絶對王權統一の下に、封建諸侯が王宮の貴族に變更せしめられた時、所謂 *La Galanterie* (伊達姿) となつて伸展し、佛蘭西古典劇の中に華かにをさめられるやうになつたのである。けれどトルバドール等のうたつたこれ等の戀歌を直接身に受けて、彼等と直接の交渉もし、感化も受け、彼等を推賞し、やがてその戀愛と宗教感とを修正し渾成したのは、即ち伊太利のダンテ (Dante, 1265—1321) であり、彼のベアトリスに對する愛情はこの中世紀の所謂「優雅な愛」の結晶であり、彼の作「新生」(*Vita Nuova*) はその完全なる表出であるのである。

當時、トルバドールは南部佛蘭西から、伊太利は勿論、西班牙、葡萄牙にまで進出遊歴してその感化を及ぼし、北は獨逸の初期の遊歴詩人等 (*Minnesingers*) に影響を與へ、従つて、佛蘭西北部の吟遊詩人等 (*Trouvères*) と交錯し、北部へ入り込み、殊にノルマンディに滞在して深く相互影響をしてゐたのである。これ等の北部詩人等の中で、「ランスロ」*「獅子の騎士」*「ペルスヴァル」などの作者、中世紀の最も名だたる詩人クレティアン・ド・トロワ (*Chrétien de Troyes*) の如きも、千百七十年から千百八十年の間、マリイ・ド・シャンパニの宮廷内に留まつてゐた時に、この南部詩人等と接觸しその影響を受けたといはれ、その他南部詩人等の翻譯が北方に於いて幾らもなされてゐたやうである。

北方文藝

前に説いた如く南方詩人等の歌謡は何といつても抒情詩的である。抒情詩脈である。勿論後代の抒情詩人等の詩の如きの確な意味に於ける個性の現はれた抒情詩とは區別すべきが當然であるが、さりとて叙事詩の幼稚なものであるといふには客觀性が不足してゐる。或る事件の筋を通し、終始を明かにし、進行を促し、歸結に達するといふよりは、願望をうたひ、欲求を現はし、理想にあこがれ、情熱を披瀝し、或ひは機智をひらめかし、意見を戦はせ、批評をも加へて行く、さういふ心の働きの即興的な現はれは、叙事詩の成形的な表現に向ふと觀るよりは、抒情詩の音樂的效果本質をより多く持つてゐると觀るのが當然の歸結であらう。そして言語そのものの性質相違、及び南北人の素質の相違、

更に傳習傳説などの相違から來てゐることであらうが、これ等の詩人に較べると、北方トルヴェル等の詩歌は、言語は敏活性が不足し、諧調を缺いてはゐるが、その代り一層質實で變化に富み、叙事詩、諷刺詩、教訓詩、抒情詩、劇詩などの凡ゆる種類を包括してゐるのである。けれどその基調、その特色はやはり叙事詩、物語詩であるのは言ふまでもないことである。

それ等の詩の中で最も早く現はれ、また代表的に現出したものは一種の歴史詩 (Les Chanson de geste) である。Geste とは *gesta* 即ち「行動」とか「勳功」とかを意味するのであつた。即ちシャンソン・ドゥ・ジエストは歴史詩ではあるが「勳功」或ひは「武勳」の詩である。即ち「武功史詩」ともいふべきものである。ジョン・グラル等が聞きつぎ語りつぎ、うたつて廻つてゐたであらうものを、そして騎士自身等もまたうたひつゝ我れと我が身を勵ましつゝ戦ひにも行きもし、饗宴などでは共々うたひ出したであらうものを、十一世紀の末頃から書き留めて置くやうにしたのであらう。従つて單に過去の出來事をうたひ傳ふるといふばかりではなく、その過去の事柄に現在の呼吸を吹き込み、更に幾多の事蹟を附け加へ、かくて次第に大きくなり、はつきりした形をも備へて來て、文藝形態の構成上の所謂膠着法 (Agglutination) によつて作り出され、その出來上つたものは即ち挿話展開式 (Expansion Episodique) となり、大體の筋が通つてゐて、それに幾つかの挿話が附着し展開してゐるのである。當時に於いては比較的近き過去のシャルマアニユ大帝の一事蹟は、何より目ざましきものであり、神の聖なる武人として異教徒等を征服する颯爽たる長鬚の馬上の老帝の姿、勇敢な誇りかな激し易いロオラン、

沈着聰明なオリヴィエ、この三者の描き出す畫面は勇者の典型として何人でも胸に刻まれてゐたであらう。特にロンスヴァに於けるロオランの悲壯な死と、シャルマアニユのこれに對する復讐などは必然的にうたひ出さるべき英雄的事蹟であつたのである。かくて「ロオランの歌」(Chanson de Roland) は次第に形をとるやうになつたのである。

ガストン・パリスによれば、この歌は初めブルターニユで生れ、アンジュで修正せられ、やがて僧侶の手で特に宗教的な調子が高められたものであり、最初はシャルマアニユのサラセン人の征服とそのロンスヴァまでの歸還とをうたつたものであつた。やがて、ロンスヴァに於ける反逆者の撃退が附け加へられ、最後にエックスに於けるシャルマアニユ大帝の凱旋と異教の主領ガマロンの裁斷とが加へられたものであり、それが出來上り書き留めらるゝやうになつたのが十一世紀末の事であるといふのである。かくて典型的な武功史詩の標本がつくられ、それ以後の幾多の同種類の詩をつくり出さしむる原動力となつたのである。

千百三十年以來この「ロオランの歌」は獨逸では韻文に、少し遅れて英吉利でも同じく韻文に、ノルウェでは散文に書き現はされ、更に伊太利へは早くから浸潤してゐて、十五世紀伊太利史詩の創始者といはるゝピュルチ (Petrarch) の詩となつて渾成し、西班牙に於いてはこの歌の影響が同國史詩の機轉を翻したものと言はれてゐるのである。

ひとりこの「ロオランの歌」に限らず、中世紀に於ける傳説史詩の移動浸潤は、年月こそ相當費さ

れてはるるものの、殆んどアトランティックの岸邊からユオカアズの麓にいたるまでも國境を越えて廣汎に互り、交叉してゐるのである。民族の移動、交戦の混亂、吟遊詩人等の巡歴、十字軍の結成進達などから来る當然の結果とはいへ、中世紀文藝の最も大切な伸展的特色であると同時に、其處に普遍的、凝集的、合作的、共通的特色も見らるゝのである。そしてまた一般思潮の敏活に、普遍的に傳播して行く現代から見て中世紀文學の特に興味ある點でもあるのである。

「ロオランの歌」を代表的として見る「武功史詩」は、シャルマアニュの事蹟を中心として、凡そ二十篇ほどあるのである。その一群を「王の武功詩」(La Geste du Roi)と呼ぶのである。そして神より佛蘭西にゆだねられたる使命を、シャルマアニュがその配下に助けられて果してゆく功績を現はしてゐるものと考へるのである。軍事宗教の二重組織の理想的表現を、また此處にも見ることが出来るのである。

「ギラン・ドゥ・モングラヌの武功史詩」(La Geste de Garin de Mongiane)と呼ぶるゝこれも凡そ二十餘篇で一群をなす史詩がある。その中心人物はギイヨーム・ドラランジュであり、それを繞つての様々な事蹟をうたつてゐる。けれど主としてサラセン人との戦ひをうたひ、「王の武功詩」の中に統一の祖國的な感じが現はれてゐるのに較べれば、これ等の詩には一層封建的な、地方的な、一族郎黨を率ゐる家系本位の傾向が見らるゝのである。現實性に次第に近づきつゝあるのであらう。これ等の一群の詩の中では「アリスカンの歌」(La Chanson des Aiscans)を代表的のものとする。

「ドオン・ドゥ・マイヤンスの武功詩」(La Geste de Doon de Mayence)と呼ぶるゝ第三の武功詩の一群がある。これ等は一層現實に近づき來つたもので、殆んど總てが十二世紀の末、十三世紀の初めに作り出されたもの、そして特に中心主要の人物はなく、領主相互の争ひ、或ひは權力に對して反抗するものにくみする傾向、獨立的、個人的傾向を示すやうになつて、前の二種に比すれば遙かに封建的特色を示してゐるのである。その代表的なものは「イザンバルとホルモン」(Isenbard et Gornond)及び「ジリアル・ドゥ・ルウスイオン」(Girart de Roussillon)であらう。特に後者にこそこの一群の詩の特色は現はるゝのである。

以上三種の武功の歌なるものはつまり比較的近き過去と現在とを結びつけ、軍事と宗教とを結合せしめて歌ひ出し、寧ろジェルマンの精神を具體的に表現したものともしふ事が出来るのである。但し以上のものとはまた、別種なそして時代も少し遅れて出た十字軍を主題とした武功史詩がある。第一十字軍の起源より聖地奪還までをうたつた「アンティオシユの歌」「ジェルサレム征服」の如き、また「白馬の騎士」「ゴットフロワ・ドゥ・ブワイオン」の如き、國民的とか民族的とかいふよりは寧ろ各自の姓名を輝かさんとしてゐる中世紀騎士等の姿をうたつたものもあるのである。

以上の「武功史詩」に較ぶればその取扱ふ傳説は一層舊く、遠く、半ば神仙譚の如くも思はれるけれど、その取扱ひ方に、その舊き人物を生かして行く中に、當代の現實性を一層よく吹き込んで、宛

も後代の佛蘭西古典劇作家が、古代の歴史を取材としながら、實はルイ王宮の現實生活を描かずにはゐられなかつたと同じやうに、舊い傳説を中世紀騎士の生活に——武事と宗教と優雅な清き戀との生活に描き出し、その作家の個人性をも略知らるゝやうになつて來た文藝が現はれた。それが即ち「物語詩」(Les Romans)である。

これをその取扱ふ主題の相違から凡そ三種に區別するのが普通である。その第一の、そして最も代表的と思はるゝものが即ち「ブルトン物語」(Les Romans Bretons)である。

この「ブルトン物語」の中心人物は、「武功史詩」の中心人物が嚴然たる老年のシャルマアニユであるのに對して、セルトの傳説中の不思議な力を備へた華かな、優美な、精悍なアルトゥル王(Arthur)である。その王の宮廷は禮儀に充ち、而もその宮廷内の席次自在な圓卓の周圍には不敵の勇者達が集まつてゐるのである。その王はブリテンの島國へサクソン人の侵入して來るのを防ぎ止め、烈しく戦つて數々の勝利を得はしたが、身内の者に裏切られて、激戦の後その反逆者を殺すことは出來たけれど、王自身も負傷して、不思議な小舟に乗せられて「永春の國」へ送らるゝのである。しかしいつかはこの王が歸つて來てサクソン人等を追ひ拂ふものと思はれてゐるのである。そしてその王を取り巻いてゐた「圓卓の騎士」等がまたそれ／＼失はれたる「聖盃」(Saint Graal)を探しに行くのである。その途中に於ける様々な冒険と、それにかまけて騎士等を鍛へ上げる所謂清らかな戀物語が織りまぜられてゐるのである。同じく軍事と宗教との混交から作られてゐるとはいへ、「武功史」が一層現實的

で、質實嚴正であるのに對しては、この「ブルトン物語」は遙かに夢想的で、表現は幽遠で、遠い理想に憧れ、戀を理想化して遠き人(La Princesse lointaine)を思ひ、さらにアサー王の果しなき歸還に望みをつなぐ如き、當代の騎士を修練せしむる忍苦の必然性の現はれであるとはしても、やはりそこに、セルト系の本質の傳承を見ないわけには行かぬであらう。

「ブルトン物語」詩の作者は、クレティアン・ド・トロワ(Crétien de Troyes)が第一の主要詩人である。ジョゼフ・ベディエによれば、この詩人は、拉典の詩人、「メタモルフォーズ」の作者オヴィド(Ovide)風の教養をつみ、けれど詩の主題としては、當時行はれてゐた古代物語から選ばないで、新しき題材を求め、彼以前に或る僧職の手で翻譯編纂せられてゐたセルトの歴史物語へ手を染めたのであるとのことである。そして英吉利のセルト文學の結晶と思はるゝ「マビノジオン」(Mabinogion)譚叢の中の三つの物語がこの詩人の物語詩と關係があるものにもせよ、それはこの詩人がウェルスの物語を採用したのではなくて、寧ろウェルスの人々の側でこそこの詩人の物語を採擇したものであるとのことを證してゐる。

こゝにもまた中世紀の傳説移動の姿は明かに見らるゝのであるが、クレティアン・ド・トロワに於いては、その傳説を取扱ふのに、古代詩風の特色たる驚異の表現に清新味を躍らせ、清純な戀愛に微妙な心理を漂はせ、南方詩人等の優雅な歌謡の影響をも加へて、クリスト教的驚異と、幽遠微妙な戀愛とを交へた幾多の騎士物語、中世紀封建時代としての瑞々しい若き憧れ、名譽と、愛との混成した詩

をうたひ出してゐるのである。彼自身としてはいまだ後代の文學にいふ意味の的確なサエンボリックでもなければ、ミスティクでもない、十二世紀といふ封建制度としては若々しい時代を背景として現はれた一人のロマンティックであるのである。

特に前に擧げた「武功史詩」に較べて見ると、なるほどそれ等武功史詩では、軍事と宗教感との結合は十分示されてはゐるけれど、殺伐で、暗澹で、女性等は寧ろ勇者等に曳き廻され、隷屬せしめられ、時には頭髮を掴んで曳き行かれ、丁度古代希臘では女性の美は認められながら、女性そのものは奴隸の如き扱ひを受けたとほゞ同じ封建武士の一面が描かれてゐるのに對して、これ等の騎士物語詩の中では、女性は初めて、崇められ、従はれ、仕へられ、男性に君臨もし、騎士等は彼女のためならば、如何なる冒険にも悦んで従はうとする姿を見せてゐるのである。女性にとつて初めて夜が明けたのである。封建騎士のなした宣誓は、初めて圓卓の騎士等に於いて理想的な、具體的な表出を示したのである。

クレティアン・ド・トロワがうたひ出した、聖盃を探し出す理想の騎士ペルスヴァル (Percival) にせよ、獅子を助け、戦ひに勝ち、戀を得るイヴァン (Ivan, 獅子の騎士) にせよ、様々な愛のためしを身に現するエレック (Erec) にせよ、戀のためには、不面目をも忍び、遂に求むるものを見出すランスロ (Lancelot, 車上の騎士) にせよ、戀愛を通じて示さるゝ騎士の一面の典型描出である。そしてこれ等はいづれもそれ以後の詩人等によつて模せられ、若しくは繼承せられ、幾多の物語詩となつて廣く開展してゐるのである。

悲哀の騎士トリスタンと、同名の二人の美姫イズウとの悲しき愛の物語詩「トリスタンとイズウ」(Tristan et Iseult) は同じく十二世紀の半ばから終りへかけて、二人の吟遊詩人、トオマ (Thomas) とベルウル (Beroul) とによつて、それ／＼作り出されたものである。そしてこれもまた後代の多くの詩人等に感興の源泉を提供してゐるのである。

女詩人マリイ・ドゥ・フランス (Marie de France) はノルマンディに生れ、英吉利で多くの日を送つた人である。彼女は小型のクレティアン・ド・トロワとも言ふべき人で、彼女の短詩 *liscs* と呼ばるゝ詩形であつたものは、主題は「フルトン物語」とほゞ同じものである。源泉は全く同じであるが、それを構成する技倆に於いてクレティアン・ド・トロワに比して劣つてはゐるけれど、女性らしき心理の細かさを示してゐる。またレエなる短詩形をフリトンの豎琴弾き等の歌からとつて一つの定形となし、凡そ十二三篇の物語詩をば残し、その他にも幾つかの寓話詩をとどめてゐるのである。

クレティアン・ド・トロワから初められた「圓卓騎士物語」は、或ひは騎士等のそれ／＼の傳記的形式に於いて、または幾つかの挿話冒險譚を組合せたる形に於いて、次ぎ次ぎの多くの詩人等によつて繼承せられ、開展せられてゐるのである。「聖盃物語」もまた、或ひは韻文にまた散文にもものされて彼につゞく多くの詩人等の作品を構成してゐるのである。

この「フルトン物語」の生れ出る素因をなしてゐるのは、當時の學校で教へられ、また讀まれもし

てゐたラ典の詩人等、主として、スタスの「ラ・テバイド」物語や、ヴィルジルの詩や、特にオウィドの「戀愛論」とか、古代の勇者等の「戀愛書翰詩」とか「愛する道」とか、更に「メタモルフェーズ」だとかであつたのである。「フルトン物語」は、それ等に教へられながら全く異つた方面に材料をとつたのであるが、それ等に倣ひ、またそれ等に模して、古代に取材した一群の物語詩がまた存在してゐるのである。それ等を「古代物語」と呼ばれ、「テエブ物語」「エネアス物語」「トロワ物語」及びアレクサンドル大王を取扱つた幾多の物語詩がそれに属するものである。(ボオル・メイエ著「中世紀佛蘭西文學」に於けるアレクサンドル大王」二冊参照)但しこれ等古代物語の傾向は後代學藝復興期以後に於いてこそ十分の發展をなしたのであつて、中世紀に於いては寧ろ「フルトン物語」その他をつくり出す素地と素養とを供したものと見るべきである。

この他に、「冒險物語」と呼ばるゝ數多き物語詩がある。「フロワルとブランシュフラアル」(Floire et Blanchefleur)の如き、「オオカッサンとニコレット」(Aucassin et Nicolette)の如き極めて著名なものである。題材は或ひは東方に或ひは佛蘭西に、そして事象は極めて奇怪なやうでありながら大體の主旨は平明に一貫してゐて、よどみなき説話の巧みさ、機智と情味とに富み、變化多様な場面と精神的な快心さが溢れてゐて、面白さといふ點からは最も優れてゐるものである。かういふ種類の物語は一見現實離れがしてゐるやうでありながら、實は極めて現俗的であつて、當代の人々がいかにそれに心惹かれたか、いかに悦び迎へたらうかを覗はしむるものである。如何なる時代の文藝でも、その當代に於ける興味本位、通俗味豊かな物語こそは何よりも多く當代の風習を傳へてゐるものである。「こ

れ等の物語は、十三世紀の風習を知らうとする者に、非常に貴重な指針を供するものである」と、ジゼフ・ペティエはいつてゐる。それは當然のことである。

佛蘭西中世紀文藝に於ける「武功史詩」および「フルトン物語詩」は、まさしく物語詩の雙璧である。二種の傳統、二種の理想を寓せしめて發生したる健強な双生兒の如きものである。その發達伸長は全歐羅巴に強大な波動を與へてゐる。封建騎士の理想的活躍である。伊太利 獨逸、スカンディナヴィアの諸國にいたるまで、シャルマアニュとその配下の武士の功績は謳はれ、ランスロ、イヴァンの戀はたゞへられ、やがてダンテの中に、さらにアリオストオの中にこの兩種の史詩は不朽化せられ、セルヴァンテスの物語にその後繼者の姿を見せてゐるのである。

この二種の史詩の封建貴族、騎士をうたひだしてゐるのに對照して、その起源は一層舊く、その主題は一層地上に低迷してゐて、日常多數の民衆を悦ばせ得るものであり、更にその民衆自身の抱懷をも披瀝し、不平をも述べ、當代の時勢に批評をも加へてゐる如き平民詩がまた當時出現したのである。それは「狐物語」(Roman de Renart)であり、「寓話詩」(Fabliaux)である。

「狐物語」は二十五篇からなる物語詩である。作者の知られてゐるのは二三人にすぎない。勿論動物に關するこの種の傳説は一方は舊い「伊蘇布物語」などから教へられてゐたことであらうと思はるゝが、他方には歐羅巴の中部北部に於いて特に舊くから言ひ傳へ語り繼がれてゐた物語を變更し、定形

としたのであらう。この「狐物語」と同じ話が芬蘭にも、小露西亞にも語られてゐるとの事である。「寓話詩」にいたつては、遠い昔に印度あたりの譚から傳來せられ、種々の變更を経てつくり出されたものとも言はれてゐる。が、兎に角民間傳説の移動とその定着との最も好き典型である。封建城内や館の内です所謂「武功史詩」や「宮廷物語詩」が悦ばれてゐる間に、當時の第三階級、即ち平民が次第に富を得、自由權をも擴張するやうにもなり、當時の吟遊詩人の徒にもまたそれ等の平民等と共鳴する者も出て来て、彼等を悦ばすために、この民衆的題材を選んで、その中で彼等の意氣を昂らしむるやうにしたのである。勿論それ等の物語詩の中には、單に動物等に假託して、王や大名や、反抗貴族や、騎士等を諷するばかりでなく、平民自身をも嘲り、戒しめもし、また特に女性の取扱ひ方にいたつては、前の宮廷物語詩などの女性を理想化したものとは全然異つて、邪な慾深かな、意地悪なものとして描き出し、總てを下から觀察し、皮肉を言ひ、嘲笑を浴びせて行くのである。これも當代の平民階級にとつては不平を述べる唯一の手段でしかなかつたであらうけれど、それと同時に、根柢に横はつてゐるゴオル氣質の現はれと見ないわけには行かぬのである。

「狐物語」の中では「ルナルとイザングレエン」「歎くもの欺かる」「狐黄に染まる」「狐の裁判」などが最も面白く、狐は自分より強きものを狡智もて欺き勝を制すれども、自分より弱き者にはまた欺かれる。獅子王は自分勝手に怒りつづく、大名熊は鈍重で慾深かで、騎士の狼は盲目で残忍だ。その間を狐は狡智で立ちまはり、いつも狼と争ひながら最後の裁判に於いてでも自分が勝を占めて復仇する

のである。これは封建社會そのものを暴露するばかりではない。その社會の代表表現たる「武功史詩」をも諷弄して、屢々その文句をパロディエしてゐるのである。觀察の細やかさ、描出の的確さ、狡智と如實性と、時代相を離れても確かに永く生くる價値ある物語詩である。

「寓話詩」は「狐物語」の如く隱喩でなく、直喩の皮肉である。僧侶に、騎士に、田舎者に、また當時のブルジョワに對しても皮肉である。田舎者が聖者達の言ふ事をきかないで、大神の前で辯論して遂にその訴訟に勝つて天國に入る話や、富める慾深かなブルジョワに對するきびしい皮肉の「鞍掛けを半分しまつて置く話」や、三人の盲目者をからかふ僧職の話や、「田舎醫者」の話や、さらに「桶の騎士」「ノオトル・ダムの曲藝師」などに見る一種の教訓、その滑稽さと、皮肉さと、その自然さと、全く如何なる時代の佛蘭西文學にでも現はれてゐる諸嗜好、批評好き、からかひ好き、そしてそれが社會批評ともなれば、最も優れた喜劇ともなつて集成する要素の第一に表出せられたものである。

この民間の物語詩、寓話詩は、封建時代の被支配階級の文藝表現として、前の二つの史詩、物語詩と對立し、そして、ラブレエの中に、モリエル、ラ・フォンテーヌの中に、さらに十八世紀を通じて現代にいたるまで、最近代に於いてはアナトール・フランスの中にまで最もよく現はされてゐる脈絡である。

この二つの支配階級と被支配階級との文藝表現の對立及びその推移を見せてゐるのが、抒情詩その

ものの時代的推移であり、それと「薔薇物語」と呼ぶ教訓詩の時代的變更である。

北方詩人トゥルヴェエル等の中に於ける抒情詩は、南方詩人トゥルバドール等の手に口にもされたものほど華かではない。最も舊い「機杼の歌」(Chanson de Toile)からくだつて、トゥルヴェエル等は限られたる上層階級の人々を相手としてのみうたひ、その起源から見れば民謠的だと思はるゝ幾多の種類、幾多の形式の歌謡小唄のたぐひも、皆宮廷的抒情詩とせられてしまひ、史詩物語の如き叙事詩の壮大さ眞實さとは較ぶべくもないものになつてゐる。そのいづれもが優雅な愛をうたひ出すのを旨としてゐる。「十字軍の歌」「舞踏歌」「討話の歌」「物語の歌」などの種類に區別もつけられ、シャンパニユの領主、ナヴルの王ティボオ(Thibaut)四世の如き詩人も出てゐるのであるが、この當時に於ける眞の詩人らしき抒情詩人は、さういふ宮廷詩人等の中から出たのではなくて、貧困なジョングラルの一人であるルネトプフ(Renebaut)に於いてこそ見らるゝのである。即ち平民詩人の初めての現はれである。

ルネトプフは巴里に住み、貧困を極め、馬に片脚をくじかれ、家賃を拂ふにも困じ、冬の寒さと飢ゑとのなかに生きて行かねばならず、放下師の身分では求めに應じてうたひもするが、聖王ルイの治下に於て、必ずしもルイ王を謳歌するのではない。僧職、騎士、富めるブルジョワなどの貪慾さ、彼が纒かに心慰めらるゝものは、學校へ通ふ年少者等であり、十字軍への出征を悦ぶ者と悦ばぬ者との間に立つては、彼は騎士たる本分を飽くまで鼓吹してやるけれど、教會に對しては烈しい反抗を見せてもゐるのである。つまりルネトプフに於いて初めて、彼一個の生活と當代の社會事象とを織り交へた

詩が出来たのである。人を悦ばせるためだけにたゞうたつてゐるのでない。また隱喩や、諷刺で痛快を味つてゐる餘裕のあるものでない、現實性の醜く苦しい呼吸を直接に發露せしめた詩が生れ出たのである。フランソワ・ウィロンと共に、中世紀に於ける人の眞の抒情詩人といふべきであらう。この二人はうたふための詩ではなく、書くための詩をつくりだす人々であり、封建社會の被壓迫者の中から出て來た、それこそ二つの *Pauvre Diabie* である。彼等の生活が共に奇怪に思はれたとしても、それは封建社會に於ける壓迫の下に、個人的反抗を見せたものの歪められた姿である。(「ルネトプフ」参照)

「薔薇物語」(Roman de la Rose)は十三世紀の前半にギユイヨム・ド・ロリス(Guillaume de Lorris)が最初の四千行を書いたのを、十四世紀の初めに、ジャン・ド・マン(Jean de Meung)が承けて後の一萬八千行を書き上げたものであり、その間約六十年の隔りがある。そしてその中間は丁度ルネトプフが生活してゐた時代である。この「薔薇物語」はその最初の部は中世紀騎士の愛の道を説き、後半は社會批評に初まつて人間の自然性の解放にまでも達してゐる。この物語詩の變遷そのものに於いて、十三、四世紀の社會生活推移が明かに見らるゝのである。

十三世紀の初めは宗教と軍事の二重組織が混成調和して行くために、教職は一般を教化し善導して行かねばならなかつた。宗教を悦樂と結合せしめねばならなかつた。教職自身が愛の道を説き、愛の教へを垂れ、信仰と武事とを結びつけ、エデンの園を愛の樂園とし、それに到達するには飽くまで忍苦の生活を送らせねばならなかつた。かくて優雅な愛をつくり出し、それを具象したものを理想の騎

士としたのである。アンドレ・ル・シャプラン (André le Chapelain) の「純^レけき愛の道」(De arte honeste amandi) の如き、愛に關する百科辭典やうのものは、その要求から生れ、オウイドの「愛する道」などもその要求で廣く讀まれ、屢々翻譯せられたものである。その傾向と、その空氣とを具體化して、レティアン・ドゥ・トロワの「ブルトン物語」は生れたものであり、その要求を一種の寓喩的な教訓的な物語にしたのが、ギイヨム・ドゥ・ロリスの「薔薇物語」の前半である。

煩さい、厭な、醜い、悲しいものを周壁としてゐる、愛の神の國、詩人はその或る門から「閑散」な女性に導かれて美しいその庭園のなかへ這入る。そこで要領ぶかく取りまかれてゐる美、即ち薔薇を見掛ける。それに近づき我がものとしようとするが「嫉妬」はその間へ墻壁を設けてしまふ。——全篇が寓喩^{アレゴリー}と擬人とから成つてゐる。但し教訓的であるばかりよりは、擬人的心理的に寧ろ現實相を示してゐる點に、この物語の面白味はあるのである。それに寓喩的な煩さい冷たさはなく、春の花園に愛の神へさゝぐる舞踏なぞの魅力をも十分見せて、抽象的なものたるよりは普遍的なものたるを感じしむるのである。

ジャン・ドゥ・マンのものした後編では「理性」が連りに物をいふが、戀した男はそれに耳を傾けようとはしないで、オウイドの教へを語る友人を求めてその説く所に従はうとするのである。その友人はまた人間社會とは相反する自然の状態を説き聞かせもするのである。そのうちにタルテュフ^(モリエール劇中の偽善者)の先人の如き人物が出現したりする。やがて新人物の「自然」婦人が現はれて、長々と世界の組織を

説いたりする。遂に城壁は撤せられて、戀する男はその薔薇を摘み取るにいたるのである。

前編の作者は、優雅な人、女性の崇拜者であり、高貴の婦人や封建貴族等に話し掛けてゐるのである。後編の作者は、強健な、卑俗な、からかひ好きな、女性に對し、王に對し、僧職に對し、諸侯に對して敵意を示す人であり、その話し掛けるのは特に當時のブルジョワに對してであり、また一般の民衆に對しても話し掛けてゐるのである。

この兩者の對照は相當に際立つたものである。そして後者の中に、當時の所謂優雅な愛をからかひ、婦人を蔑視し、軍事教職いづれの權威にも反抗してゐる事の見らるゝものも、當時目覺めかけて來た第三階級の姿を覗はすものであり、そして特に自然を、科學を尊重して、物識りぶりを發揮してゐるところに、既に學藝復興期の曙光をさへ示してゐるのである。

この兩編ともに時代相を示すものとして興味深きものであり、當時から既に英吉利に、伊太利に、フランドルに翻譯せられ、中世紀文學の最も顯著な記念像の一つとして永久に保存せらるゝものである。ラブレエにヴォルテールにルウソオに、「薔薇物語」のこの後編の傾向を何人でもが認めるに違ひない。

千九十五年から千二百七十年に亙る八回の十字軍なるものは、また封建時代の軍事教職二重制度の結合した最も大きな現はれとしてこの時代を際立たしむるものである。十字軍の遠き原因は「神の休

戰] (Trêve de Dieu) の積極的な發動である。封建領土相互の争ひ、相互の残酷な戦闘を防止するのに王權は全く力を缺いてゐた。そこで教會がその仲裁を引き受けて、十一世紀の初め頃から神の名に於いて休戦を命じ、その命によつて休戦條約を結ばしめたのである。この教會の軍事支配者を動かす力が積極的に働いて、諸侯をして協同の行動をとらしむるやうになつたのが十字軍の起る第一の原因である。勿論それに従ふ戰士等悉くが信仰に熱して、悦んで身を挺したわけではない。けれど、教會は、特に法王は、クリスト教に反抗して來たマホメット教に對して十分な壓迫を加へたい要求に驅られてゐたのである。この教權の動きが十字軍なる軍事行動となつたのである。

次はトルコ人のために虐待され壓迫せられた商人等、従つて東方との商業取引の中絶、この經濟的な打撃を、近代國家ならば軍艦及び國旗に於いて解決の手段をとるところを、當代は宗教戰としてその手段を講じたのである。

さらに、十一世紀の佛蘭西は人口は増したにしても國內で十分なる自給自足が出来る筈であるが、戦亂の引きつゞきで、耕作地は荒れてゐる。生活資料の不足は到る處で慇へらるゝ。其處で諸侯は東方で新しい領土を夢み、武士等は冒險と武勳とを目標とし、教職、及び信者等は一心信仰に燃え立つて聖地回復を熱望し、商人は利益を、そして百姓農奴にいたつては、それによつて自由人となるばかりでなく、廣い耕作地の占領をも夢想し、一家を擧げ、家畜まで引きつれ、陸續として東方へ出掛けたのである。少年十字軍の一隊すらも組織せられた。宗教、軍事、經濟、夢想、一切が渾成したる

百七十五年の間、八回に亙る當代の凡ゆる階級を擧げての團體行動である。

この結果はどうであつたらうか。彼等が豫期したものは一向實現せらるゝ事はなく、却つて彼等が當時、考へ及びもしなかつた政治上、社會上、知識上、經濟上、或ひは宗教そのものにすらも非常な變化を持ち來たすことになつたのである。その變化は十字軍のみが直接來たさしめた結果ではなかつたにしても、少くもそれを補助することにはなつたのである。

政治上に於ける結果は、遠征の費用を支拂ふために、封建諸侯は自分の領土をもまた或る權利をも、配下の人民等に讓與し、賣り渡さずにはゐられなくなつた。その結果十字軍は、間接に農民及び一般住民の解放を導き來つたのである。また他方に於いて、東方の敵對者等は、群をなして攻め寄する佛蘭西人等は一つに國王の命令によつて來るものと思量した。目のあたり見ても見なくても佛蘭西國王の威力なるものを頭に描き、恐れもした。その感じが出征軍自身にも波及して、個々の主領君主といふよりは、不知不識の間に國王に對する意識を呼び醒まし、尊重の念が湧き出し、出征地に於けるのみならず、佛蘭西本國にまでもその國王尊重の念は波及するやうになつて來たのである。さらに出征した農民及びブルジョワ共は、たゞに自由を買ひ得たばかりでなく、或る者は商賣によつて富み、或る者は出征の最中、武士等に伍して勇敢に戦つたが故に、歸還の後も以前の如き待遇は受けず、出征中の共同の痛苦は少からず階級間の疎隔を撤廢せしむるに役立ち、特にパレスティナへ建てられた佛蘭西の領土は、封建の制度には習つたにしても、決して本國に於ける如き嚴然たる階級的區別を立てるわ

けには行かなくなつたのであつた。

産業の方面では、從來知られてゐなかつた農作物が非常に數多く持ち來され、織物にせよ、木製機具にせよ、日常裝飾品にせよ、東方の珍らしき物は悉く輸入せられ、アラビヤ馬は何處の厩舎にも見らるゝやうになり、風車の如きも初めて歐羅巴に見らるゝやうになつて來た。商業にいたつては、一時中絶せられたものが、マルセイユを中心として敏活に動き出し、航海術を初め、自然科学、醫學の如き、殊に數學の如きはアラビヤ人等と接觸して初めて學び、數字の如きもこの時初めて中歐へ持ち來されたものである。

また宗教そのものから言へば、前に擧げた如く教會の勢力、法王權の力強さをこの場合十分に示す事は出來たけれど、それと同時に、一方異教の信者等に接觸して見れば、マホメット教徒等は、殊にアラビヤ人等は、知らずして、接せずして頭に描いてゐたやうな野蠻な残忍な人種ではなく、却つて他教徒に對しても寛容を示す、優秀な文化の持主である事が知らるゝやうになり、出征地、パレスティヤに新たに建てた國に於いては、兩教徒の間で結婚も行はれ、兩者の結合が次第に密接になつて來ると共に、佛蘭西本國に於ける教會そのものさへもが異教徒に對して寛容を説き、寛容の態度を示さずにはゐられなくなつたのである。十字軍の前後に於ける教權第一主義の權威の變遷は、非常な注目すべき現象であるのである。それと共に法王權の確立が表面示されたやうでありながら、他方に於いては教權が、やはり政治的經濟的の利害關係に倚存してゐることを物語る機縁ともなつたのである。

つまり十字軍なるものは、中世紀に於ける凡ゆる階級を盡くしての最も中世紀らしき代表的な發動であるけれども、その結果としては、政治、經濟、産業、文藝、宗教そのものにいたるまで、所謂中世紀を解脱する傾向の方へ自づと導いて行つたのである。所謂學藝復興以前の學藝復興であるといはるる點である。それではこの十字軍なる事象と十二、三世紀に於ける文藝との關係はどうであらうか。

封建社會の各階級を擧げての出征であり、文字通りの野を越え山を越え海を越えての異境への出發であり、初めての東方への進出であり、故國を離れて遠い空の下へ向ふのである。彼等は聖地奪還のために傳統的の敵アラビヤ人と戦ふのである。シャルマアニユ大帝が嘗てピレネを越えて征服したそのアラビヤ人等と戦ひに行くのである。かういふ心持が、かういふ空氣が、まづもつて彼等の中にシャルマアニユを思ひ出させた。その思ひ出が、その空氣が、具象せられて前に説いた「武功史詩」が作り出され、うたひ出されたのである。つまり「武功史詩」なるものが作り出さるゝために十字軍なるものが最も大切な直接環境となつたのである。

次にはその期間に於いて初めて東方へ意識は向けられた。古代のトロワの戰爭に關して、更にアレクサンドル大王に關しての種々の傳説が直接傳へらるゝ機縁となつて、それ等が初めて「古代物語」として佛蘭西の詩に取扱はるゝやうになつたのである。

第三には、十字軍そのものの文藝の中に於ける表出である。「武功史詩」の引き續きとして「十字軍史詩」が作り出され、物語詩の部類にも主題とせられ、さらにルネトプフの詩に於いてですら當代の

姿を見ずるものとして取扱はれてゐる事である。けれど十字軍そのものが十分なる姿に於いて佛蘭西文學と關係してゐるのは、何よりも歴史文學に於いてである。

歴史文學なるものは佛蘭西文學に於いて特殊な地位を占むるものであり、佛蘭西文學の優れた特色の一つである。最初は前に言つた如く古典語で書かれたものが多かつた。やがて「武功史詩」「物語詩」の如きものも一種の歴史と見られた。けれど十字軍そのものを精密に現はすとしては、最早や史詩の如き形式に於いては書き現はされないで、一層現實的に、一層散文的に觀察も取扱ひもしなければならぬ。この十字軍の歴史を書いた人が、初めて佛蘭西へ散文の歴史文學を定形的なものとして與へた人である。それは即ちヴィルアルドゥアン (Villehardouin, 1164—1213) である。

ヴィルアルドゥアンはシャンパーニュの生れで、クレティアン・ド・トロワと同郷人である。年代こそ少し遅れてゐるであらうけれど、彼は「フルトン物語詩」の作者の如く幽遠な愛などを説きはしない。また「武功史詩」に現はるゝ如き英雄を夢想もしない。彼は十字軍に参加して出征はするが、狂信的ではない。千百九十九年にシャンパーニュの領主ティボオ三世に従つて出征し、その人の死後は第四十字軍の首領としてコンスタスタンティノオブルの征略及び東方古典帝國の創立に参加し、晩年はトラス(今日のリア、ルウマニア地方)のメッスィノオブル城内で、「コンスタスタンティノオブル征服記」を書いてゐた。

實行家肌の人、熟練な外交家、用意周到な雄辯家、才能豊かな政治家であつた。彼は第四十字軍がまつしぐらに目的地たるジェルサレムへ向はずして、コンスタスタンティノオブルを陥れたる理由を説明し、

それが却つて聖地回復の目的を果す所以である事を明かにし、やがて二回に亙るコンスタスタンティノオブルの包撃を叙説し、精細を極むるといふよりは本筋を明かにし、想像に懇ふるよりは、理解に徹せしむるといふ行き方であつた。但し彼のその的確な實證的筆致からは、幾多の現實派文藝家の描き出す如き畫面を展開してゐるのである。出征者の眼に初めて映じたるコンスタスタンティノオブル遠望、コンスタスタンティノオブル襲撃の光景、モンフェラ侯最後の叙述の如き著名なものである。

彼に次いで歴史家はやはり彼と同郷のジョウヴィル (Joinville, 1224—1319) である。シャンパーニュの領主ティボオ四世の宮廷で人となり、當代の騎士として十字軍に参加し、聖王ルイに従つて出征し、ルイ王とは極めて親しい間柄であつた。併し最後の出征の場合は彼はルイ王に従ふ事を拒み、獨り故國に止まる事を望んだ。率直堅實な武士、情味豊かな人である。従つて幾度も繰り返さるゝ狂熱的出征軍に従ふよりは、止まつて静かな生を送りたい要求が強かつたに違ひない。彼の書いた「聖ルイの歴史」(『Histoire de Saint Louis』) は一個の人として、一個の武人としてのルイ王を描き出すと共に、その王の性格と、筆者自身の性格とを對照せしめて巧妙な畫面を展開するのである。この二人の對話の如きは簡潔の間に性格を躍動せしめてゐる。彼はキリスト教徒としてのルイ王、騎士としてのルイ王の兩方面を書き分けて、その事蹟を示さうとしてゐる。宗教と軍事との重制をこの歴史の中でも見せようとしてゐるのである。

この人々の他にロベール・ド・クラリ (Robert de Clary) アンリ・ド・ヴァランス、エンヌ (Henri de

Valenciennes)その他の歴史家、記録家が多くゐたのである。

十字軍はその結果として、文藝の一種たるこの歴史文學を佛蘭西へ與へたばかりでなく、多數民族の集合の結果は、佛蘭西語をして各民族の中へ普通語たらしむる第一の機會を與へたのであつた。その他、佛蘭西北部の文學、特に「武功史詩」の如きは、他國の十字軍參加武士をも慰藉し、獎勵することに役立つて、それが各國へ翻譯せらるゝ機會となつたのである。また東方よりしては、古代希臘の讀物を持ち來たし、從來拉典語一方であつた教會内にも希臘語の研究は始められ、アラビヤ語その他の研究もなされ、十二世紀半ばにはマホメット教の聖典「コオラン」の翻譯すら現はれ、幾多の東方學者が現はれ出した。その中では聖ルイ王宮廷で特に尊重せられたヴェンサン・ドゥ・ボオヴェ(Vincent de Beauvais)の如き人が最たるものである。

劇の要素

佛蘭西劇の原始的な要素が、最初會堂の禮拜式や、或ひは聖者等の記念日の行列なぞから出て來たものにもせよ、また大道放法師たるジョン・グラル等の物の語り方、歌のうたひ方、身振りなぞから起つて來たものにもせよ、兎に角この二様の要素が結合し發達して、一種の劇的表現となつたものである。そしてこれは前に擧げた「武功史詩」や「物語詩」なぞの如く、當代の騎士等の間に生れ、またそれ等の間にのみ持てはやされてゐたものとは異つて、最初からして、一般民衆向きの性質のもの、

一般民衆が了解し、悦び、首肯するものでなければならなかつた。要するに「史詩」「物語詩」「歌謡」の類とは異つて、この劇こそは民衆を主として、民衆の中から發生したものであるといふ事が出來るのである。

先にも言つた如く、十二、三世紀に於いては會堂は祈禱の場所であり、悦びの場所であり、集合の場所であり、取引の場所でもあつた。その中で、宗教の儀式そのものが既に一種の劇であつた。祈禱に、禮拜に、僧侶は時に神の役を演じ、神の如く物言ひ、また人格者たる神を前にして、凡ゆる人事を披瀝するのである。參衆がまたその役目の一部を演じ、大方の場合は觀衆でもあるのである。

その日常の儀式とは異つた、特別な、例へば基督降誕祭だとか、或ひは復活祭だとかの行列が次第に華かになつて來て、聖書の中の場面をさながら演ずるやうにもなり、最初は拉典語でやつてゐたものが、次第に當時の口語、俗語を交へるやうになり、教會を出て前庭で演じもするやうになつたのである。さうなれば僧職以外の一般人も混じて演出し、或ひは僧職以外の者だけで演ずるやうになつて來たのである。

それ等の中で屢々繰り返されたものが次第に書き止められ、中世紀に於ける他の文藝の種類が保存せらるゝと同じ順序で保存せられたものである。そして次第に作者の明かな作品が生れて來るやうになつたのである。かくて十二世紀の後半に、アングロ・ノルマンの方言で書かれた、樂園を追はるゝアダムとイヴとの「アダム劇」(Jeu Adam)が書き止められ、十三世紀の初めには「救世主の復活」

(Réurrection du Sauveur) が出来上つたのである。これ等が次の時代には「神祕劇」「奇蹟劇」として發達したものである。

その中で十二世紀末にジャン・ボデル (Jean Bodel) の書いた「聖ニコラ劇」(Jeu de Saint Nicolas) は特色のあるものである。これも十字軍の生んだ一つの賜物である。——クリスト教徒等が聖地奪還のためにサラセン人等と戦つてゐる。敗北して捕虜となつた教徒の一人が異教徒の首長の前へ曳き出される。彼はその首長にニコラ聖人の力を説き立てる。首長はその力を試めすために、聖ニコラの像を寶物の中へ入れて置いて、番人共を撤廢して、その聖人の力を試めさうとするのである。すると盜賊共がやつて来てその寶物を奪つてしまふのである。そこでその捕虜は無稽なことをいつたといふので殺されることとなるのである。するとその時ニコラ聖人の姿が卒然として盜賊共の前へ出現して、寶物は無事に取り戻される。そして、異教徒共がその奇蹟に駭いて改宗するのである。一方にはまた大勢が集まつて飲み騒ぐ酒場の場面も展開される。しかも戦争の場面の後へ、それが續くのである。

このジャン・ボデルは十字軍へ出征しようとしてゐる中、癩病に罹つて、悲しい告別をして引き籠つた人である。當時のトゥルヴェルの一人であつた。けれど騎士から出たのではなく市民出のトゥルヴェルであつた。この人は寓話も書けば、牧歌も書いてゐるのであるが、特にこの「聖ニコラ劇」でその特色を見せてゐるのである。そこには異教徒も、クリスト教徒も、戦士も、市民も、盜賊もある。そして酒場の騒ぎと戰場とが接續してゐる。十二、三世紀を縮圖した如きもの、總てを配列して見せ

たるもの、元氣で、好戦で、酒好きで十二、三世紀の市民を悦ばせるもの、特にその中に酒場を集める都會の下層人等の元氣が浮び上つて來るのである。

これ等の宗教劇にも既に、滑稽味、喜劇味が加味されてゐる事がほと視はれる。それは一般民衆を相手にするところから來る必然の結果である。また他方には、當時のジョン・ラル等々に時事を諷した、一種のルヴュの如き短い場面を、身振りをまかせて演出もし、語り聞かせもしたものである。

これ等の諸要素、宗教的、滑稽的、諷刺的なものが結合して、そして、喜劇の始源の如く見らるゝもので、今日に保存されてゐるのは、前に擧げた詩人ルネトプフの作「テオフィルの奇蹟」(Miracle de Théophile)——野心家の僧侶が悪魔に身を賣る、が、後で悔いて聖母のとりなしで助かるといふ劇の如き、またアダム・ドゥ・ラ・アル (Adam de la Halle) の作「*J'ai de la Feuillée*」*Jeu de Robin et de Marion*」などである。それ等の中には、宗教傳説と、舊くからの民間傳説とが混淆してゐる。また田園生活の姿も現はれれば、牧者牧女等も出て來て、うたひつ踊りつするのである。

かういふ民衆文藝は、次の時代となつて、封建制度が崩壞に向ふと共に、民衆等の意氣を示す唯一の文藝藝術的表現機關となつて發達したのである。

二、封建制度崩壞期の文藝

(十四、五世紀の文藝)

封建制度崩壊の原因——第三階級勃興と王權との結合——百年戦争と騎士階級の没落——
 —法王權の分裂及び動搖——史詩、物語詩の散文化傾向——教訓的文藝——宮廷詩人等
 の末期——フランソワ・ヴィロン——歴史文學——コンミヌの功利論——宗教劇の繁盛
 ——滑稽劇の種々相——中世紀の終焉

カペティアン王朝と共に初まり、聖ルイ（即ちルイ九世。1226—1270）に於いて、中世紀騎士の典型人物をつくりあげ、十字軍に於いて、宗教軍務の二重組織の完全な結合の姿を發揮した封建制度は、ヴァロワ王朝の初まると共に、即ち千三百二十八年以來、崩壊の姿を示すやうになつて來た。

これより先き、封建制度の初めからして、都市の住民等は、その領主等の手中に、自分等にとつての生殺與奪の權を全く握られてゐたのである。たゞ城壁内に生活してゐて、外敵の襲來に對しては、比較的安全でゐられるといふ點で、村落の住民等とは異つてゐただけである。然るにそれ等の都市住民等が、商賣により手工業により、次第に富を得て來るにつれて、それ等の財貨を領主等の意のままに無制限に取り上げらるゝことを不當と感ずるやうになり、反抗をも示し、談判をすら開始するやうになつて來た。

その結果、市民等はつひに金銀によつて或る程度の自由を買ひ取る事となつた。また領主等の側よりすれば、軍備その他の必要から、その金銀をこそ要求したのであるが故に、それを受け取ることの代償として、一定の規約をまづ市民との間に締結する事を許すこととなつた。そしてその規約に基づ

いて、年一回だけ一定の納税をすることとなり、また刑罰に關しても適當な裁判を経て初めて罰せらるゝといふことになつたのである。この規約をば、「Charte」と呼んだ。

この規約は都市によつて千差萬別であつて、簡單には説かれない。最初この規約締結の運動は佛蘭西南部の都市から起つたのであるが、それが次第に佛蘭西全國に波及し、十四世紀の末にいたつては歐羅巴全體に行き互り、いかなる國でもこの「Charte」を持たぬ都市は存在しないやうになつて來た。これ等の規約を持つてゐる都市住民が即ち「Bourgeois」と呼ばれ、都市によつては彼等は自治權が與へられてもゐた。その自治の都市が即ち「Commune」とある。

この自治の市民權を得たブルジョワは得意でもあれば、誇りでもあると同時に、彼等は相互扶助の義務を持つてゐた。リールの市を一人の市民が歩いてゐる。不意に夜盜に襲ひかゝられる。彼はたゞ一語「Bourgeois!」と叫びやゝすれば、皆が彼を助けに駆けだして來たものである。

この自治市民は騎士と同じ特權を與へられて、襲來する外敵を防ぎ、また攻撃する設備も許された。やうに、國王の市民（Bourgeois du Roi）なる特權さへも許されて、十三世紀の末には、領主を離れて直接國王の市民たらんことを宣誓さへすれば、それに成ることが出来るやうにもなつた。國王はまたそれを起用して種々の役目につかひむる事にもなつて來た。そして國王フィリップ・ル・ベル（Philippe le Bel）が十三世紀末に初めて召集し、それ以來十四、五世紀に互つて殆んど常設的のものとせられた一種の國會（Les États Généraux）には、僧職、貴族と並んでこれ等自由市民も代表者を送ることが

出来て、初めて第三階級 (Le Tiers Etat) の存在が政治的に経済的に有力なものとなつて伸展し、最初微力であつた王權の徐々に強力となつて行くのと結び付いて、中間の僧職、貴族等と對抗し、實質的には寧ろ優勢を示すやうにさへなつて來たのである。これが封建制度崩壊の第一原因である。

市民以外の村落居住者即ち農民は、市民よりも更に封建時代の最初期に於いては悲惨な状態に置かれてゐた。多くの農奴が存在して、自由農人と伍してゐた。此處にもまた市民の場合と同じ要求が提出せられた。そして次第に一定の租税を納むる自由農民の數が増して行つた。けれどその自由を買ひ取るためには多額の金が支拂はれねばならなかつた。その支拂ひを拒むものはいつまでも舊態に止まるを餘儀なくされた。ブルゴオニ、コンテ、オヴェルニュ等の地方には十八世紀にいたるまでも農奴が残存してゐたのである。

十四世紀の初頭にルイ十世は農奴廢止の令を出したけれど、これも十分に行はれはしない。さらに新都市 (Ville Neuve) 自由市 (Ville Franche) を創設して、最も悲惨な状態にゐる農奴等を糾合して、新都市を建てる計畫も行はれた。これ等の名稱の今日でも残存してゐる處がある。やがて、自由市に準じて自治村落 (Les Communautés) が許されることになつては來たが、それ等の農民等は前に擧げた國會へ代表者を送ることは絶対に許されなかつた。たゞ國王は、全國の自治市の住民からと同じく、それ等の農村からも軍隊を召集して、從來の職業的武人即ち騎士とは異つた一種の雇傭關係を結んで、多少の支拂ひをもした。その支拂ひを "Soldat" といひ、それを受くるものが即ち "Soldat" であつた。

た。また武器を供給せられるが故に *Chevalier* なる名稱も生じて來たのである。そして騎士とは異つて、新たに國王と直接な關係を持つやうになつたのである。これがまた王權伸長の上に都合よき事であり、封建制度崩壊期に愛國心が一般に生じて來たと言はるゝ現象ともなるのである。

然るにまた一方教權と軍職とが分離するやうな状態が誘致せられた。選舉によつて奉戴せらるゝ法王が、伊太利と佛蘭西との側に於いて分裂し、羅馬と、佛蘭西南部のアヴィニョンとにそれ／＼の法王が並立し、佛蘭西、西班牙、蘇格蘭はアヴィニョンの法王を、伊太利、獨逸、英吉利は羅馬の法王を支持することとなり、この大分裂 (Le Grand schisme) は三十年間も續いた。その紛擾の結果法王權に動搖を來たし、佛蘭西の司教等及び巴里大學はその教權の管理を離れて、獨立を主張し、更に佛蘭西の教會は國王及び封建諸侯の支配力からも分離することを要求するやうになつて來た。それに法王廳の出費は年々嵩むばかりで、それを徴収するのに苛酷であつて、不平は一般に生じて來た。各國の教會、管理區、教區の末にいたるまで領地の住民に對して同じく苛斂誅求を極め、それによつて教職の連中は無智、富裕、有閑な生活を送るやうになり、「修道者の如く肥え」「僧職の如く怠ける」といふ不平非難の聲は到る處に聞かるゝやうになつて來た。それと共に宗教改革の先驅者ウヰクリフ (Wyclif) 及びヒュース (Huss) の二人が、一人はオックスフォードに、一人はブラグに出て來ずにはゐられなくなつたのである。併しこの改革運動は十七世紀にいたらずしては、いまだ顯著なものとはなれなかつた。

さらに、封建諸侯そのものにいたつては、その末期没落の姿を一層明かに示してゐた。彼等は攻戰

奪掠をするのでなければ、饗宴、狩獵、武戯を催し、下領に對する徴税はさらに激しくなり、騎士等にいたつては、往年の意氣は消えて、都邑から召集せられた歩卒と戦つても勝味はうすくなり、それは重い鎧、投槍、楯といふ如き武器は既に隊伍を組むには適しないものとなつて、それ等自身が既に時代に遅れて來た事を示した。それ故徒らに身邊を飾つて、遊惰な生活にふけるか、然らずば、野盜の群に投じて、一層の掠奪をほし、にやるかより途はなかつた。

かゝる状態の中に生じた百年戦争なるものは、外寇でもあれば同時に内亂でもあつた。英國王エドワード三世は、その血族の關係から自分自身が佛蘭西王たらんことを求め、佛蘭西の貴族は分裂してそれに味方し、それを助けんとする者をも生じ、相争ひ、相戦ひ、外敵と内寇とは隨所衝突し、佛蘭西の騎士は英軍の歩卒のために屢々打ち破れ、千三百六十年には佛蘭西の西南部ロワル河よりピレネ山下にいたる一帯は英國に割譲せられ、千四百二十年にはまた北部佛蘭西は、首都パリをもこめて、英國へ引き渡さるゝ情勢となつたのである。

但しこの長期戦争の災禍は、寧ろ戰場に於いて見らるゝのではなくして、都市村落の奪略に於いてこそ見られたのである。そして耕地を捨て、逃走することの出來ぬ住民等のみこそは災害を受くる至上的のものであつた。十二、三世紀に於いては外敵を防ぎ、治下の住民を保護することを信條とし、宣誓もした騎士そのものが、この時代には何人よりも先にその掠奪者と成りかはつたのであつた。敵に對して弱き彼等は、無辜の住民に對しては虎狼よりも兇猛であつた。

パリの街路に草は伸び、外廓近く狼は出没して幼兒等を攫つて行けど、それすら追ひ拂ふものはない。自治市民の首領としてエティエンヌ・マルセル (Etienne Marcel) の如き纒かにこの都市を治めてゐたけれど、その他の大方の都市も殆んど荒廢して、いづれも自治民が秩序を保つてゐるにすぎなくなつた。

農村の荒廢は更に甚だしいものであつた。住民は森に逃げ、洞穴に身を潜ませ、辛うじて命を保つ有様であつたが、遂に千三百五十七年には、パリ近き地方に佛蘭西の歴史にも著名な大袈裟な農民一揆 *Jacqueries* が蜂起し、南方にはやはり同じく *Fitians* が發生せずにはゐられなくなつた。壓迫者、奪略者に對する農民の絶體絶命の自己防衛的團體行動である。

けれど、それ等は未だ消極的の動きである。領主、僧侶、騎士等は頼むにたらぬ、寧ろ、自分等の敵でさへもある。自分等の命を守るためには、自分等が立つて直接外敵を追ひ拂はなければ、他にそれをするものが無いといふ一般の覺悟を凝集し、具現して出たのが、ジャンヌ・ダルクである。オルレアンの城に包まれてゐる國王を救ひに英軍を撃破するために駈け付けた時の彼女は、この必死の覺悟をした無數の、恐らく全國の農氏に背後から押されてゐたのである。奇蹟の生ずるのが當然である。彼女は目的を達し、英軍を追ひのけることは出來たけれど、果して彼女の眞の敵は、英國軍であるよりは、自分等を保護すべき筈の自國の僧侶等であつた。彼女は焚殺された。審判を受くる時、彼女は言つた。「自分はたゞ一人だけである。但し神と共に」と。それが冒瀆であると僧侶等はいふのである。

仲介者たるべき自分等を差し置いて、直接神に行くのは不都合だといふのである。そこで彼等は尋問する、「では、お前は今でも神の聲を耳にするのか」と。すると、彼女は答へる、「森へやつて下さい。森の中ならいつでもその聲を聞くことが出来る」と。——その森とはおそらく榊の木のことであらう。さうすればこれは往古のドリユイディスムの信仰が彼女の中に残存してゐるのである。即ち悪魔の聲を聞くのだと考へる者が出来たのである。するとまた、神と共に一人だけでゐる。直接神の前へ身を現ずるといふところに、既に彼女の中にさへ宗教革命の叫びが、プロテスタントの呼び聲が、聞かれるのだと説くものも出来て来るのである。そのいづれもが眞であるかも知れぬ。兎に、彼女一人に於いてでさへも、當時の諸侯や僧職などに依頼出来ない、農民の必死の覺悟だけは窺ひ知ることは出来るのである。

この僧職、領主等の貪慾、搾取、無能、懶惰に對して、市民及び農民等の覺醒と自立、この二つの對立が十四世紀、十五世紀の主要なる社會相である。但しこれ等自由民等が十分の力を伸ばすには、未だ連絡もなく、統一もない。そこでその連絡統一をつけるためには、何よりもまづ王權の確立が必要とせられた。そこで十五世紀の後半にいたると、シャルル七世からルイ十一世、殊に「クリスト教國の中央に網を張つてゐる大きな蜘蛛」といはれたそのルイ十一世(千四百六十二年即位、千四百八十二年)にいたると、幾つかに分裂した王族共を次第に押へつけ、反抗する諸侯に對しては表裏兩様の流血殘忍な手段までも講じて克服することが出来るやうになつたのである。それは市民や農民等の後援なくしては全く出来なかつた

ことである。

殊にヴァロワ王家に對して、政治上經濟上、文藝の方面にいたるまでも、嚴然として對抗の姿を見せたるブルゴオニユの諸領主、その最後の主シャルル・ル・テメレエ(Charles le Téméraire)の死後は、その領土の大部分を王領に併合し、敗退したる英國よりはその大陸上の領土を奪還し、その他からも或ひは買ひ取り、或ひは併合し、更に佛蘭西國內の軍隊の組織を全く改め、世襲的職業的なそして壞廢したる騎士階級の代りに、市民や農民より募集したる新軍をもつてし、司法權の全國共通の確立とか、徵税法及び貨幣の國內統一とかいふ事からして、漸次に中央集權、絶對の王權の存立の傾向を誘致して來たのである。そして一時は確定的な存在を示すかと思はれた國會(Etats Generaux)も遂に中絶せしめられ、自治都市も、自治村落も、悉く王權に服従せしめられ、次第に爾後三世紀間の王朝文化の時代を構成しようとするのである。そして嘗てフランクの王者等が欲求してゐた羅馬式統一の姿がやがては現せられる傾向に向ひつゝあるのである。

然らばこの封建制度崩壞期の文藝は如何なる姿をとるであらうか。——少くも騎士等の時代は過ぎた。十二、三世紀に於ける如く彼等を典型人物とし、その武功をうたひ、信仰と軍事と戀愛との中に彼等を置いて、理想化する事などは全く不可能なことになつて來た。さうした種類の詩歌とは全く異つた、もう一層現實的で、もう一層散文的で、その内容からいへば、無能にして虚構なるものを諷刺

し、嘲笑し、新たに興らんとするものを悦ばせ教へ戒しめもする如き文藝、即ち後代の古典文藝期後の十八世紀文學に幾分共通性をもつた如き文藝が現はるべきであらうか。それを少しく細かに見るとしよう。

第一に武功史詩のたぐひはどうなつたであらうか。これは最早や、十四世紀になると前時代に見る如き作品は全く見られなくなつた。たゞ僅かに北部に於いて、殊にフランドルに於いて猶ほ作り出されつゝはあつた。けれどそれとても遠き以前の微かな反映の如きものである。その中では十四世紀半ばに現はれた「Baudouin de Sebourg」これが代表的のものとして見られるのであるが、これとても、以前の史詩の本格とは離れて、一種の喜劇的要素を交へた、長々と事細かに語り出し、そして寧ろ陽氣で、市民の興味に適するやうなものである。同じく十四世紀後半に出た、キュヴリエ (Cuvellier) の二作「La Bataille des Trente」及び「Le Chanson de Bertrand de Guesclin」の如きは、形體こそは舊い傳統史詩の形を見せてゐるけれど、うたはれてゐることは、全く現在の事象である。さらに、千四百十一年にフランドルでもなされた、「La Gestie des Bourguignons」の如きは、ブルゴオニ侯領と佛蘭西王國の間に介在する如實の敵意を露はに示したものである。

即ち歴史詩そのものですが、既に現實的な性質を帯ぶるやうになり、史詩の名に伴はぬ一種の新しい叙事詩と言つてもよいものとなつたのである。しかも、それすら最早や作られることはなくなつてしまつた。そして、千四百三十年頃からは舊き歴史詩を散文に書き改め、或ひは補助したりして、

一種の物語として一般に悦ばるゝやうなものとなす傾向が生じて來た。それ故、舊き史詩は、原形のまま傳へられてゐるものと、原形とこの散文物語と兩様の形に於いて傳へられてゐるものと、更に散文物語に於いてのみ残されてゐるものがあるのである。そしてこの散文に變形せられたものは、印刷術の發明後は、民間に擴がつて後代文藝の資材とも素養ともなつたのである。その散文化した物語は、「Girart de Roussillon」「Huon de Bordeaux」「Oger le Danois」などを代表的なものとしてその他に數多くあるのである。

次にあの幽遠雅美なる「ブルトン物語詩」の系統はどうなつたであらうかといふに、この所謂高雅な物語詩は十三世紀の終ると共に、殆んど全くその跡を斷つてしまつたといつてよろしい。たゞ一つ歴史家であり詩人であるフロワサアル (Froissart) の三萬行の長詩、ランスロの遠い反映とも見らるゝ「Melindor」が、十四世紀に於いて、アサー王の傳説を取扱つた最後の物語詩として現はれたのである。そして、この物語詩系もまた史詩の系統と同じく散文として作り出さるゝやうになり、千三百三十年頃、即ち百年戦争の始まらんとする時代に書かれた最長篇の散文物語「Perceforest」はアサー王の生存より更に舊い時代に起つた冒險を語るものであり、所謂挿話開展式の物語であつて、裝飾畫的色彩豊かな物語である。これは十六世紀に印刷せられ、さらに十八世紀の末、中世紀ものの復活、ゴシック藝術に關心するやうになつて來た時代にいたくもてはやされたものである。

十五世紀になると、舊い物語詩がまた散文に書き改められて一般の讀物として提供せられるやうに

なつた。即ち各方面に現はれる時代の散文化、文藝の散文化運動の現はれである。「ベルスヴァル」の如きも散文に改作せられたものの一つである。十五世紀に於いて作られたる散文物語の特色は、騎士的な心の動きと市民的な心の働きと相混じ相争うて現はれてゐることである。言ひ換へれば騎士を描き出してはそれを批評的に眺め、軽やかなれど容赦なき皮肉をあびせてゐることである。その代表的なのはアントワヌ・ドック・ラサル (Antoine de La Sale, 1388—?) の「Le Petit Jean de Saintré」である。或る領主の城内で扈從をしてゐる美しいブティジャンは、やがて騎士たるべき素養を受けてゐるのである。この少年は純な、胸も心も躍らせるやうな戀を年長な女性に感じてゐる。「フィガロの結婚」へ出て来るシエルユバンの一層純な、一層無邪氣な少年である。その女性も彼を愛さずにはゐられぬ。清雅な戀の典型である。然るにやがて彼一人の騎士となつて戦争へ出掛けて行く。その征戦の間に彼は數々の武勳を立て、歸つて来て見ると、その女性は既に一人の肥え太つた富んだ僧職の誘惑に應じて、譽れよりは金を求めてゐるのである。するとその武功の騎士ブティジャンは残酷な復讐をその二人の上に加へずにはゐられない。美しい夢はむごい現實に覺まされる。中世紀の理想はまさに崩壊せしめらるゝのである。百年戦争が示す當代の現實性の現はれの一つである。詩ではなくして全く散文である。

百年戦争の末期をさながらに物語るものとして當時の相を最もよく示してゐるのは、ジャン・ドック・ビュエイ (Jean de Bueil) の「Le Jeuneval」である。その中へ立ち現はるゝのは最早や封建の武士といは

んよりは、むしろ近代の軍人の面影に近きものでもある。また當時の巴里の一市民に假装して英國王を出し抜いて結婚の勝利を占むる佛蘭西王の物語「Le Roman de Jean de Paris」は作者不明なれど、これもシャルル八世王の結婚を暗示したものであり、千四百六十八年に武勳を立てて死んだ Jean de Lains の物語も最早や舊時の物語詩とは全く違つたものとなつてゐるのである。この物語と、ボッカチオの「十日物語」に倣つたでもあらうといはるゝ「百物語」(Les Cent Nouvelles)と「結婚の數々の悦び」(Les Quinze Joyes de Mariage)とをアントワヌ・ドック・ラサルの作とする事には問題が残つてゐるやうである。

詩人アラエン・シャルティエ (Alain Chartier, 1385—1439?) が百年戦争の惨狀を現はした「四人論争」(Le Quadrilogie inventif) は物語ではないが、夢に浮んで來る假想人物の諷刺的對話である。當時佛蘭西全體の惱んだ深い苦しみを如實に示すものであり、佛蘭西そのもの、及び貴族、僧侶、民衆のそれぞれの言葉としてそれゝの立場を明かにし、特に犠牲者となつた民衆が前二者に對する非難怨嗟の聲は、大地の底から起る深刻な響きである。この詩人は十五世紀に於ける最も重要な詩人として當代の稱讃を受けた人である。彼の中にも既にセネカを學び、その散文の中に現はるゝ雄辯は、羅馬人の反響が見られ「佛蘭西雄辯の父」と呼ばるゝ名に相應はしい人である。

ヴワロワ王朝以來、貴族僧侶等の崩壞に向ふと共に、極めて徐々ではあれど、王權の伸長するに伴つ

て、市民等がそれと直接結合せんとする現象の現はれたことは前に説いた通りであるが、十四世紀後半以來、國王ジャン二世、シャルル五世等はそれ等市民に政治の自由と共に理智的教養を興ふる事を忘れなかつた。書籍を蒐集し、學者等を尊重し、國民自身がやはり學者でもあつた。それと法王廳が分裂して、アヴィニョンに法王宮の在つた頃は、佛蘭西國內の富裕なる市民はこの地に集まり、諸他國人とも交はり、特に羅馬の學問文藝には接する機會が多かつた。それ等の中から市民出身の、少くも市民に心寄する學者詩人等が輩出した。そしてティト・リウツや、セネカや、アリストオトやを翻譯し、スイセロン、ウィルジル、テランスや、さらにポッカチオ等は愛讀せられ、既に學藝復興の曙光が見え始めた觀を呈した。

その中で、シャルル五世の知遇を受けた學者、アリストオトの翻譯者であるニコル・オレスム(Nicolas Oresme)の「貨幣論」(Traité des Monnaies)の如きは、經濟論の最初の現はれであり、公衆財産の尊重と、同時に王權の抑制を示すことを目的として、一方に興隆しつつある民衆を立つると共に、他方には王權を限定し、その兩者の結合で國家の觀念を定めようとしたのである。彼の目標は「國家へ奉仕する者としての王」(Le Roi serviteur de l'Etat)を示さうとするのであつた。封建制度崩壊期に於ける必然的指導意識であつたのである。重々しい、そして呼吸の太い、雄辯的表現と、學術語と口語との入り混つてゐる文章と、それ等總てが當代の代表的表現となつてゐるのである。

オノレ・ボネ (Honoré Bont, 1340?—1415?)の「ジャン・ド・パンの出現」(l'Apparition de Jean de

Menns)の如きは「薔薇物語」後編の作者を呼び醒して、當代の政治を語らしめ、そのとるべき形體を教へんとしたものである。その他當時の教會とは全く離れた學者ジェルソン(Gerson)にせよ、拉典の教養の最も深いジャン・ドゥ・モンルイ(Jean de Meung)にせよ、オレスムにせよ、オノレ・ボネにせよ、いづれも民衆の味方であり、同時に愛國者であり、アラン・シャルティエの如き佛蘭西に初めて愛國の詩をうたつた人であるといはるゝ人にせよ、總てが畢竟崩れ行く封建貴族僧侶等の手から佛蘭西を救ひ出し、新たな生氣を見せ初めた民衆の手でそれを再建し、その統率者としての王權の確立を計らうとしたのである。

抒情詩

中世紀に於ける抒情詩の時代は、一般的にいへば十三世紀と共に過ぎ去つたのである。騎士であり同時に詩人であつたトゥルバドール、トゥルヴェエルの群は騎士階級そのものが没落の傾向をとるやうになると共に、彼等は詩人たる社會的使命をも投げ捨て、しまつたのである。そして小領主等は次第に領土を併合せられ、王家か大諸侯等かでなければ詩人の群を優遇することも出来なくなり、それも攻防戦役にのみ目を送るやうになると共に、吟遊詩人等の影はうすくなり、百年戦争の當初に於いてすら既にジョングラルの徒は姿を消してしまつたとさへ言はれてゐる。従つて抒情詩は十二、三世紀に於ける如き一種の合作、即興的な感動から生れ出て來る如き空氣は全く缺如してしまつて、作るとす

れば或る個々人が相當の反省意識を持つて作する事になり、うたふよりは書き現はすといふやうにならずにはゐられなくなつて來たのである。そして諸侯等の手を脱れた、若しくはその手から捨てられた抒情詩は、佛蘭西北部の大都市の中へ、即ち市民等の中へ隠れ家を求め、發生地を求めて行つたのである。それも百年戦争の間は、折角芽を伸ばした自治都市すら奪掠にさらされ、辛うじて戦争後になつてから、フランソワ・ヴィロンの如き詩人を生み出す素地となつたのである。大史詩が、物語詩が散文化されて民衆の中へ散入して行つた如く、また劇がまつたく市民等の手の中で、演出せらるるやうになつたと同じく、抒情詩もまた同じ徑路を辿らざるにはゐられなかつたのである。

けれど前世紀よりの遠き反映として、また當代の一部の呼吸として、前代よりの引續きの宮廷詩人の五六の人は是非擧げねばならぬ。その人々の中にすら時代の動きが如何に現はれてゐるかを見る必要もあるのである。ギ・イヨオム・ドゥ・マシヨオ (Guillaume de Machaut) にはやはり「薔薇物語」の影響を見ずにはゐられぬ。けれど彼は形容の整つた修辭家たる以上には出でぬ。但し彼はバラドの詩人としては第一と稱せらるゝ人である。ユスタシュ・デシャン (Eustache Deschamps) は當代の最も材能豊かな詩人の一人である。彼は千以上のバラドと二百に近いロンドオとを書いてゐる。而もそのバラドは變化多様で、或ひは愛國的であり、道德的であり、哲學的であり、不平を懇へ、皮肉を言ひ、時には街學的であり、そして根柢は現俗的であり、低迷的である。それだけ百年戦争の恐ろしさに脅かされてゐた當時の市民の心持は最も好く現はされてゐる。

歴史家であり、物語作家であり、そして詩人でもあるジャン・フロワサアル (Jean Froissart, 1337? - 1410?) は、そのバラドやロンドオに於いてはマシヨオの徒であるが、「青春の叢林」「戀の小悲」(「戀の時計臺」「戀の天國」などでは、少青年時の純らけき思ひ出が闇夜の中の閃光の如く浮んでゐる。女流詩人、クリスティヌ・ドゥ・ピザン (Christine de Pisan, 1363-1429) は、伊太利に生れ、父につれられて巴里へ來てシャルル五世に仕へてゐた。十五歳で結婚し、廿五歳で寡婦となり、好き母として子供等のために働かねばならなかつた。デシャンを師と仰いでゐたけれど、寧ろマシヨオの感化をより多く享けてゐるのである。單純な、眞摯な、悲調を帯んだいかにも女詩人らしき姿を見せてゐるのである。佛蘭西を熱愛し「薔薇物語」の後編の影響で、婦人を輕視し蔑視する當代の風潮に反抗し、ジャンヌ・ダルクが立つた時は、愛國の感じと女性權威との二様の意味で非常な感激を覚え、この女性を眞先きに詩にうたひ出したのも彼女である。

アラエン・シャルティエ (Alain Chartier, 1385-1434?) は、前にも擧げたが、十五世紀當代を通じて、最も人氣のあつた詩人である。大詩人ではないにせよ、何人よりも最もよく十五世紀の封建崩壞期を如實に示してゐるがためである。彼は最初マシヨオの徒として戀の對話詩から出發し、「四女性の書」(Le Livre des Quatre Dames) では各自騎士を愛人として持つ四人の女性が現はれて互ひに嘆くのである。その騎士等は戰場に出て一人は討死し、一人は捕虜となり、一人は行方不明となり、最後の一人は明かに遁走したのである。いづれが最も悲しまるべきであらうか。いづれも理想の騎士ではない。

十三世紀の物語詩に現はるゝ騎士と較べては何といふ相違であらう。全く終末期の騎士そのものの姿である。これ等の騎士を、前に擧げた彼の散文對話作「四人論争」の中で最も力強い、太い聲を出してゐる農民と對照比較して見れば、十五世紀そのものが現前するやうである。ところがシャルティエは、百年戦争の最大の危機、即ち千四百二十四年に、一人の戀する男がその愛人の心を撓め得ないで絶望のあまり死んで行くといふ「情知らぬ美女」(Belle Dame Sans merci)を書いてゐる。時も時、シャルル七世の宮廷は人が出拂ひつゝして、憂雲のみの漂つてゐる中で、悠長な伊達な詩人の作ではあるといつて文藝史家は驚いてゐるが、おそらく戀にすら絶望して死ぬ當時の騎士の弱さの極致を示したものではなからうか。百年戦争を背景としてゐるだけに、この「情知らぬ美女」は一種の象徴の如くならず思はるゝ。然るにその詩の効果は、更に驚く可きものがあつた。文藝化せられたる十五世紀そのものかも知れぬ。當代の人々がひどく愛したばかりでなく、他國へも持てはやされて彼の代表作の如くにも思はれてゐる。シャルティエの最後の作と思はるゝはやはりジャンヌ・ダルクの出現をうたつた拉語の詩である。

シャルル・ドルレアン (Charles d'Orléans, 1391—1465)、マシオからシャルル・ドルレアンに至つて遂に宮廷詩人の終極に到達したのである。この人はアザンクワルの戦ひで負傷し捕虜とせられ、廿五年間を英國で幽閉せられ、その間故國の愛人を思ふ詩をつくり、「獄中記」(Le Livre de la Prison)はその詩集であり、マシオ、フロワサールの詩風を思はせる、一種の愛の自叙傳である。やがて故國へ

歸れば、プロワのさゝやかながら平穩清雅な城内の領主として、Poete d'Alouanの名手と言はるゝほどに機智に富んだ、女性を揶揄する點に於いてのみは「薔薇物語」の後編を一層自在に、一層多様にした如き詩をつくつた人である。

要するにこれ等の詩人の大方は、詩形からいへば Ballade とか、Rondeau とか、Debat とか、氣の利いたものによつて、末技に細心鑲刻する人々の群である。終末期をいつも示す傾向の文藝である。以上擧げた最後の宮廷詩人等に先立つて、十四世紀に類集せられた「バラド百篇集」(Livre des Cent Ballades)は、その傾向を代表的に示してゐるものである。

然るに、これ等とは全く異つた環境、全く別種な空氣の中から出て來る詩人等がある。彼等の振舞ひは不羈で、奔放で常規を逸してゐると思はるゝかも知れぬ。ブルゴオニエの詩人ジャン・ルニエ (Jean Regnier) も、リオンのガラニン (Garin) も、寧ろ獄中で詩を書いたものである。フランソワ・ヴィロン (François Villon, 1431—1465)に於つては廿五歳で一度ならず獄に投ぜられ、殺人罪で死刑にせられんともし、赦されてさらにまた盜罪で獄に投ぜられもするのである。城内宮廷で詩を書く人々と、獄中或ひは放浪の途次で作詩する人々との對照である。

ヴィロンの生涯は、いかに彼が學校教育を受けた市民の一人であるとはいへ、やはり十五世紀の壓迫や奪略やを蒙つた階級に屬する者の一人である。彼が犯したやうな罪惡は、彼の周圍には、彼の時代には、特に百年戦争の末期には、公然と行はれてゐた。殺戮と奪掠とがいくらでも大袈裟に行はれて

ゐて、しかも罰せらるゝ事はなかつたのである。その上、その奪略と殺戮とを受くるものは彼の屬する階級であつた。「八方で潰滅せしめられた民衆は、出来るだけ逃げて、人が自分等を掠奪するのが當然のことだと思はずにはゐられなかつた」(ガストン・パリス)のである。ヴィロンは死刑を宣告せられて、まさに絞殺臺へ掛けられようとしてゐる。モンフォオコンで他の者等と共に刑せられようとしてゐる。その光景が彼の眼に浮ぶ。その残骸が風雨に曝され、やがて四散して行くさまを「絞殺者等のバラド」の中で彼は描き出すのである。

「雨は我々を洗ひ、白くさらし

日は乾かし、黒くませ

やがて群鴉は我々の眼をめぐり

口鬚を抜き、眉毛を奪ふ」

けれど、これは決して所謂曳かれ者の小唄ではない。動かしがたき現實に直面して、からかひもせず、嘆きもせず、おそらく微笑する顔を涙に濕ほして、大きな悲痛な平等に身をまかせてゐるのである。そして彼の後に生きる同胞 (Ses Frères Humains) に自分の爲したことに對して寛恕を求めてゐるのである。

十五世紀に於ける民衆、ヴィロンの生活そのものがまさにそれを示してゐる。「泉のほとりに居ながら渴して死ぬ」(Je meurs de soif auprès de la fontaine) のがそれである。けれど、生きてゐる限りは、

彼もその肉體に於ける苦闘 (Une si rude guerre à son corps) 即ち飢ゑを征服しなければならぬ。彼は怠け者であつた。けれど、當時の巴里の學校友達に彼以上に怠け者でなかつたとは言へぬ。彼は僧職に向けらるゝ筈であつた。けれど自分が尊重しない當時の僧職に身を入れる氣にはなれぬ、寧ろ彼はその僧職の一人を殺すことさへしてしまつた。彼は放浪して歩いた。けれど、彼より少し以前ならば大群の放浪遁走はたゞ一命を安全にする方法であつたのだ。兎に角彼は飢餓を征服せねばならなかつた。そこでまた放浪の途中で攫^{かつか}ひをやつて捕へられ、マン・シュル・ロワルの獄へ投ぜられたのであつた。けれど幸ひに、ルイ十一世の赦免が彼をその刑罰から脱れしめた。

「善良な王」(L'oy le Bon) とヴィロンが呼ぶそのルイ十一世は、貴族諸侯には辛辣であつたけれど、民衆に對してはヴィロンのいはゆる善良であつた。十五世紀に於ける王權の伸長が民衆と結合することを、何よりも求めてゐた當代のその一般現象が、ルイ王をして、ヴィロンを救ひ出すといふ特殊事項となつて具象したのであつた。特に、印刷術をはじめ佛蘭西へ輸入せしめたルイ十一世にあつては、はじめて民衆のなかから生れた詩人ヴィロンの命は、大切なものであつたであらう。

ヴィロンにいたつて初めて、「薔薇物語」やギユイヨム・ドゥ・マシヨオの感化を離れて、「閑散」や「欸待」や「虚飾」などといふ抽象觀念の擬人ではなく、理想化した夢幻の戀ではなく、氣の利いたからかひや、修辭の選擇ではなく、身に徹した經驗、飢餓生死の境、戀をするなら街路の一角、食を求むるなら盗みさへせねばならぬ中から生れた詩が出来上つたのである。それ故、ヴィロンに於いて初めて

的確な意味での抒情詩が生れたとさへいへるのである。しかもその個人的経験は當時に於いて一般的本質を持ち、彼の属する階層の一般現象が彼を通じて文藝化したのである。従つて彼の詩には深刻さと明るさが共存する。神祕と現實とが同時的發現をする。彼が放浪の途中シャル・ドルレアンに一時救はれたとしても、この二人は全く異つた地層に立つてゐるのである。夢幻と修辭とに沈溺してゐる詩人と、現實に迫られ、口語で詩をかく詩人との對照である。中世紀最後の詩人と近代最初の詩人との對立である。ヴィロンは十五世紀の巴里の市民が喋つてゐる言葉で詩をかく、彼にはそれ以外の詞の用法は知らなかつたのである。

彼を捉へた大きな悲痛な平等の一つは、何人でもが如何なる時代に於いても想ふであらうとは異つて、當時に於いて一層切實如實であつたに違ひない「死」である。「過ぎし日の女性」(Dames au temps passés)といふバラッドがある。死は絶對で平等である。總てがそれに従はねばならぬ。美も徳もその中へ消えて行く。羅馬の美女フロラも今や何處、百合花の如く白く、スイレエヌの如き聲してうたへる女后も何處、ベルトも、ピアトリスも、アリスも何處ぞ。いかに華やかに、いかに輝しくも。

“Mais où sont les neiges d'antan?”

(さはれ、去歲の雪いつこにありや)

この死は絞殺者の姿となつて彼の前へ現はれ、更に死の彼方の不安にさへも彼を導く、彼は母に代つて聖母に祈る。

「わたくしは舊い貧しい女です、何も知りません、文字一つ讀めません。

わたくしは檀那寺で、

豎琴と琵琶との描いてある樂園を見ます、

そして罰を受けた者が煮られてゐる地獄も見ます、

わたくしは恐ろしくもあり、悦ばしくもあります……

この信仰でわたくしは生きもし、死にもいたしませう」

絞殺者の姿の中だけでも、我々は後代の詩人ポオドレルを聯想する。聖母への祈りの中だけでも、我々はやはりヴェルレヌの聲を聞くやうに思ふ。實際この二人の象徴詩人はヴィロンを愛好した。現實即神祕の同じ境涯を現はしてゐるがためである。

要するに十五世紀は民衆の中に生れたるヴィロン一人を眞の詩人として出す事によつて終り、彼の前後には殆んど夢想か、修辭かの韻文作者がゐるに過ぎなかつたと言へるであらう。ヴィロンの後に彼の模倣者として現はれた人々は、いづれも表面的な當時の市民の生活を見するだけであつた。ギユイヨオム・コキヤル (Guillaume Coquillard) アンリ・ポオド (Henri Baude) ヌールジュ・シャストラエン (Georges Castellan) ジャン・マリネ (Jean Malinéd) そして「王子等の眼鏡」(L'anneau des Princes) を書いた人であるジャン・メシノ (Jean Mehinot) 及びギユイヨオム・クルタン (Guillaume Cretin) 更にクレマン・パロ

オの父ジャン・マロオ (Jean Marot) 等の人々であつた。

歴史文學

前代に於いてヴイルアルドゥアン、ジョワンヴイルを出した歴史文學では、十四、五世紀の散文時代に於いては、詩人としては弱小な人々が寧ろ歴史を書けば優れた人々であつた。そしてまたヴィロン以後の世紀末の詩人等は當時の年代記を詩でうたはうとしてゐたのであつた。但し、いまだ當代の人々では嚴正な意味で歴史家とは呼ばれないかも知れぬ、けれど的確な解剖的な觀察と、同時に畫趣的に描き出して來る手腕とに於いては最も興味多き年代記の作者等ではある。それと同時に、この十四、五世紀に於いて、封建制度がいかに傾きつゝあるか、百年戦争がいかなる光景を展開するか、またいかに王權が封建領主に代つて伸びんと努力したか、及びそれが強勢になるにつれて、いかにそれが封建領主等を壓迫し離間し、克服せんと試みたか、またそれがいかに民衆との關係に於いて現はれてゐるかを忠實に語つてゐるのである。十四世紀に於いてはジャン・ル・ベル (Jean le Bel, 1290?—1370?) の「年代記」及びジャン・フロワサル (Jean Froissart, 1337?—1410?) の同じく「年代記」がその代表である。詩人フロワサルの事は前に擧げた。彼は詩人であり歴史家であるといふ點から、彼が旅行する到る處の領主等から款待せられ、英國へも行き、百年戦争を記述する人としては最も適した人であつた。百年戦争の起源を説き、その戦争に關する無數の出來事、反抗、反逆、殺戮、掠奪、包圍、交

戦、それ等を綾を織り出す如く描き出してゐる。個々人及び集團の特徴を描破し、事件の因果關係を示しはするが、いまだその經濟的、社會的原因までは説明してゐない。けれど彼の示すこの歴史的な大畫面は後代のロマンティックの人々を悦ばせるものである。少くも彼の歴史の中には未だ封建的の騎士的熱情の籠つてゐる事だけは認めらるゝ。

十五世紀に於いて、シャルル七世、ルイ十一世の治下にブルゴオニ公領が王家に對して政治的、經濟的、文藝的にも一敵國をなしてゐたと先に言及して置いた。そのブルゴオニの最後の領主、ルイ十一世の正面の敵、シャルル・ル・テメレエ (Charles le Téméraire) の治下で文藝は特に榮えたのであるが、その大方は歴史家「年代記」「回想録」の筆者等であつた。その第一はジョルジュ・シャストラエン (Georges Clunet ain, 1410?—1475) である。詩人としては前に名前だけ擧げて置いたけれど、その「年代記」(1420—1474) は、ルイ十一世を反對の正面から觀察してゐる點に興味深きものがある。これも詩人ではあるがその「年代記」に重きを置かるゝジャン・マリネ (Jean Malinet, 1435—1507) 及びオリヴィエ・ド・ラルシエ (Olivier de la Marche, 1425?—1502) の「回想録」などがあつた。

然るに最初このブルゴオニ公に庇護せられてゐながら、巧みにルイ十一世王の下へ走つてその好遇を受けた一人の政治家、史家がゐた。それがフィリップ・ド・コンミヌ (Philippe de Commines 1446?—1511?) である。

«Où est le profit, I est l'honneur.» (利益の有る處、名譽あり) これはコンミヌが屢々好んで繰り

返す文句である。そしてこれを彼のマキアベリスム(マキアベリイはMachiavelliと人呼ぶのであるが、彼は必ずしも目的のために手段を選ばぬと言ふのではない。寧ろ結果に重きを置く政治を彼の當代としては選んだのである。百年戦争の殺戮掠奪に較ぶれば、その暴戾よりはまだ權謀術數の方が幾分でも立ちまさつてゐると考ふるのである。ルイ十一世は、たとへ大蜘蛛の巢を張るやうな陰險さはあつても、彼は人の言ふ事には克く耳を傾けるのである。彼を盛り立て、その王權を伸張せしめ、君主が人民を目度とし、民衆に依存し、人民はまた君主を愛好するやうになすべきである。さうすることによつて、佛蘭西の繁榮と、秩序と、正義とを確保せねばならぬと、コンミヌは考へるのである。

封建制度の崩壊、王權と民衆との結合、それが究極でないまでも、其處に利益がある。従つて其處に名譽がある。そして十八世紀の思想家等が英國のデモクラシーに範をとる事を求めた如く、彼は英國の政治に優越を認めてゐる。英國に於いては王朝の交代は何處よりも烈しくあつても、民衆に對して殺戮掠奪などはしない、その事は認めずにはゐられぬ。

コンミヌはそれを冷嘲と打算して、それに到達することを求めるのである。彼に由つて中世紀は幕を引きおろし、近代の國家觀念が初めて打ち建てられたのが見られる。けれど、そこに不思議な事には、彼自身がこの利益効果を認むる心の動きをば、フレイケン神意と呼ぶことである。其處に一脈の中世紀的信仰の消えざる閃きを見ずにはゐられぬ。そして最初、必要であり、有效であつた王權といふ觀念が、強勢となるにつれて、絶對的なもの、神聖なものといふ觀念と複合せずにはゐられない萌芽さへも見

せてゐるのである。

彼の「回想録」(Mémoires)はルイ十一世の治政に關する記録が大部分であり、他はシャルル八世とその伊太利との戦争を記してゐるのである。その中で彼はルイ十一世と、シャルル・ル・テメレエルとの性格を對立せしめて容赦なく描破してゐるのである。シャルル・ル・テメレエルは野心の權化であり、ルイ十一世は猜疑深く、狡猾で、けれど巧妙で伶俐である。その融通のきくところはコンミヌが推賞せざるにゐられぬ點である。ルイ十一世自身が近代人である(ルイ十一世及びコンミヌを主題とした、カヅミルド。ラヴィニエの史劇「ルイ十一世」は興味多い作品である)。

この「回想録」でコンミヌはいかにも深く當代の時相を洞察し、人物の性格及びその地位にも觀察の徹してゐることを示してゐる。そしてこの個性を立てるといふ點に於いて、丁度、ヴィロンが詩に於いて初めて抒情詩を打ち立てたと同じ意味で、彼は既に中世紀を去つて、近代の初頭に立つ人といふ事が出来るのである。

ヴィルアルドゥアンはつましやかで、ジョワンヴィルは素樸で、フロワサルは華かである。コンミヌはその觀察の細やかさに於いては、ヴィルアルドゥアンに近い。そしてジョワンヴィルはルイ九世を終始觀察し、コンミヌはルイ十一世を綿密に眼をとめて見てゐるのであるが、その觀察の結論に於いては非常な相違がある。そこに十三世紀と十五世紀、中世紀の中葉の世界と、中世紀終末の時相との確然たる對照が示されるのである。

十四世紀、百年戦争の間にも演ぜられてゐたと思はるゝものは、「ノオトル・ダムの奇蹟」(Miracle de Notre-Dame)と總括するゝ一群の宗教劇である。その主題は様々である。兒を溺れしめた罪で燒殺されようとする母の腕へその兒が蘇へる話だの、夫の病を治するために殺された兒が、母の腕へ生きかへる話だの、舊時からの傳説もあれば、冒險譚もあれば、また市民生活の中の幾つかの出來事らしいものもある。その苦しげな、惱ましげな出來事の中へ、せつばつまつたやうな場合には、必ず聖母が姿を現はして、その救済の奇蹟を示すのである。其處にその當時の混亂、壞敗の状態に於ける唯一の救ひ主として聖母を崇め求めた姿も見らるゝのであるし、またその聖母の出現たるや、天使を従へて、當時の流行唄、 Rondオなどを口々にうたひながら出て來るので、それがまた一般の觀衆を陽氣にし、無上に悦ばしたものである。この陽氣な笑ひ好き、神聖なものをも茶化して見たい氣質は、やはりゴオロワズリの現はれであつて、いかに百年戦争の慘禍でも消すことの出來ぬ佛蘭西人の本質であらう。

その中に「悪魔ロベエル」(Robert le Diable)といふのがある。悪魔にまで祈つて生れた兒なるが故に、遂に母をも殺さうとするのが、改心して羅馬へ行き、奇蹟によつて異教徒等を滅ぼし、王子とせらるゝと言ふのである。これは特に優れてゐるといふのではないが、千八百七十九年に巴里で再演せられて、人々に多く知られてゐるのである。(「フレイドゥ・ジュルサイエ著 佛蘭西劇、劇文學史」参照)

これ等の奇蹟劇を演じたものは、「巴里の宗教劇團」(La Confrérie de Paris)である。かうした宗教劇團は、以前存在してゐたジョン・グラルの役目を果たすために、それにとつて代つて、諸所の都市に發生したものである。それ等は全然自由市民と及びそれ以外の民衆とから構成せられたものである。そしてそれ等は奇蹟劇や、後で説くミステル劇、即ちクリスト受難劇や、クリスト一代記やを演じて見せたものである。巴里に於けるその宗教劇團は千三百八十年に既に出來上つて居り、千四百二年には、シャルル六世の命令で、巴里のトリニテ會堂にその常設の場所を占めることになつたのである。兎に角これが常設劇場とはいはれぬまでも、その最初の基礎を置いたものである。

奇蹟劇なるものは、上述の如く、人事の混沌たる中へ、危急な場合に、突如として神の奇蹟が仲介的に現はるゝ事を示したものであるが、ミステルなるものは、クリストの受難とか、復活とか、降生とかを、やがてはクリスト一代記を全的に頗る大袈裟に演出したものである。但し *Mystère* なる字は、寧ろ拉典語の *Mysterium* 即ちしぐさ、若しくは演出の意味であつて、それが宗教劇に限り用ひらるゝやうになつたのは十五世紀の後半からとの事である。(「ジョセフ・ペティエ著 佛蘭西文學史」参照)

兎に角このミステルなるものは、十五世紀から十六世紀の半ばにいたるまで、盛んに演ぜられたものである。市民や職工等の一團の人々が僧職の指圖の下に、最初はクリストの一代を、やがて聖者等の傳記や、聖書中の場面やを演じてゐたものである。が、次第に卑俗な現實的な所謂冒瀆な事象ま

でも大袈裟に演ずるやうになつて、つひに禁止を命ぜらるゝまでになつたのであるが、全く十二、三世紀に於ける「武功史詩」が、封建諸侯騎士等を表出して、當時の代表文藝たる観があつたのに對して、これは全く市民の手によつてのみ表出せられたる國民文藝であり、當時の民衆の感情、思想、言語そのものをさながらに傳へてゐるのである。街頭へ動き出したる會堂、民衆の手に歸したる宗教、彼等は聖母が自分等の近くに現はれるものと言ひ、クリストをば自分の手で動かすのだといふところに異常な熱意と感奮とを現はしたものである。そして、また前時代には「武功史詩」がジョンゲラル等にうたはるゝのを、民衆はたゞ耳を假してゐたであらうと同じく、これ等ミステルの演出の場合には、上層階級の人々はたゞ多少の好意的參加はしたでもあらうし、出來たでもあらうが、それ以外は全く見物人たるより以上に出づる事は出來なかつたのである。

この宗教劇で演出されたものを分類すれば、(1)舊約聖書による事蹟を取扱ふもの。(2)新約聖書によるもの、その中ではクリストの生涯に、殊に受難を主としたもの、及び使徒行傳など。(3)聖者等の劇、その中にはオルレアンの包圍を演じ、ジャンヌ・ダルクの勝利を現はす如きものさへもあるのである。(4)古代劇、*Mystère de la Destruction de Troie* のやうなトロワ敗滅を現はしたものとさへある。但しこの最後のものは演ぜられたのではなく、たゞ古代傳説を劇の形式に書き現はしたに過ぎないといふことである。

その中で主たるはクリスト受難、復活、降誕、使徒行傳、舊約の事蹟などである。それには幾百といふ演出者が群をなして現はれ、クリストの受難の如きにはいかにも如實に演ぜられて、その中には當代人の殺伐性も窺はれたものである。が、特に聖母懐胎 (*l'Immaculée Conception de Marie*) といふ事は、十五世紀にいたつて初めて一般に信ぜられたドグムであり、殺伐な中にも聖母に對する尊崇は一般民衆の中に特に深いものであつた。それが「ノオトル・ダムの奇蹟」にも窺はれるし、またミステルにも現はれてゐるのである。それに加へて最初の如實味は、美術史家等の克く説明する如く、文藝復興の曙光の閃きとして、聖母像に見らるゝ、官能的な、コケットな風姿である。それが宗教劇中に現はれて、その聖母が生きて動くのであるが故に、民衆は寧ろ熱狂するのであつた。

會堂や、僧職等に對しては、一般民衆は最早や尊敬も信頼も拂はなくなつた事は前にも擧げた通りである。會堂の彌撒みさに列しても途中で立つ者があつたり、司教の説教なぞにも耳を傾ける者は少く、會堂へ行つてもたゞ聖母の像に跪き、聖者等の像の前で身を屈するだけであつた。そして群をなして聖地巡禮に出掛け、遠路も危険も物ともせず、ジェルサレムまで行き得なければ、佛蘭西國中の由縁ゆかりの地を求め歩いた。この巡禮者達こそは戦ひをしない民衆十字軍であつた。そして最早や仲介者たる僧職などは全く頼みにしないで、自分等が直接に聖地を探り、聖母を求め、クリストを追ひ掛けたのであつた。そしてその熱情が一團となつて發揮されたものが、即ち十五世紀の宗教劇であり、信仰と悦樂との結合である。民衆の中へ行く事を求め、民衆の中からこの信仰と悦樂との共存する強健なる文藝を發露せしめんとしたトルストイの具體的な目標は即ちこの十五世紀の宗教劇である。

これ等の宗教劇中最も有名なものは、アルヌウル・グレバン (Arnoul Greban) の「受難劇」(Mystère de la Passion) である。御告げから復活にいたるまでの事蹟を取扱つたもので、三萬五千聯の長韻文劇で、登場人物は二百八十人、四日間引き續いて初めて演出が終るのである。その他舊約劇の五萬聯、使徒行傳の六萬聯といふ風に、その間には抒情的な部分と、對話の部分とを交へて、一作の演出期間は引き續き五日でも六日でも十日でもかゝつてやつたものである。

この宗教劇の演出は全く古代希臘のオリムピア祭にも較ぶべきものである。その演出の前日は、出場者等の行列が町中をねり歩く。猶太人、サラセン人、羅馬人、司祭等、使徒等が多數の悪魔を従へて、樂隊の音につれて或ひは徒歩で、或ひは馬上で、或ひは戦車に乗つて賑かに巡回し、やがて會堂へ集まつて大彌撒ミサを受けるのであつた。

演出場所は勿論戶外廣場で、一萬五千乃至二萬人を入れる階段座席を設備するのである。全市民が其處に群集し、好い席を占むるためには、早曉から押し掛けもするのである。町全體はその演出に集注し、夢中になり、それがため盜賊防禦の特別な用心がなされねばならなかつた。

このミステルの演出さるゝのは、各都市の守神、聖者等の縁日とか、または疫病流行を防ぐためとか、時には他所の人々を惹きつける金儲けのためにもやる場合もあつた。嘗て演じられたもの、または全く新たに作り出したものをやる場合もあつた。

場面は總て一日間に演ぜらるゝ全部が最初から展開せられてゐて、例へば一方に天國があれば、他

端に地獄があり、天國では神が鎮座し、地獄から悪魔がうよ／＼びよ／＼と出て来て様々な滑稽を演じて人々を笑はせたりした。この天國と地獄の中間に次第々々に人事が行はれて行くのである。その場面の異つた背景を *Mansion* と呼ぶのである。時には廣い田野や、山や湖水や、河をも見せて、その河では船が動き、天使は空へ昇つたり降つたりもするし、殉道者等は巧みな人型でその最後を見せたりするのであつた。

演出者は市民、職工、學生、僧職等が一團となつて、僧職等はたゞ、クリストや聖母やだけを演じ、クリストは傳統の長い上衣コップをつけ、聖母は修道女の服装をし、その他は或ひは華かに、或ひは質素に、史實にはかまはずに、その時その時の適宜な服装をして、これ等も最初から舞臺面へ全部が出てゐて、自分等の演ずる順番の來るのを、舞臺の兩側へ腰をおろして待つてゐるのである。觀衆の熱狂と演出者の熱狂が一緒になつて、時にはサタンに扮した役者が焼き殺されさうになつたり、クリストが十字架の上で危く突き殺されかゝり、ユダが我れと我が綱で實際咽喉を締めかねない勢ひであつた。

これが都市から都市へ、如何なる小さな教區にいたるまでも、それ／＼の守護神のためのミステルを持つやうになつて、佛蘭西全部へ行き互つた。全く當時の民衆文藝及び藝術の表現となつたのである。これはシャルル七世、ルイ十一世、シャルル八世、ルイ十二世、フランソワ一世の治下にいたるまでも持續したのであるが、遂に千五百四十二年にいたると、舊新兩教徒の方面からは信仰上の冒瀆として、古代文藝の學徒からは低劣なものとして排せられ、遂に禁止せらるゝ運命になつたものであ

る。

かくて文藝は、政治が絶対王權の統一の下に置かるゝやうになると共に、再び民衆の手を離れて、學徒等の手に歸し、やがてまた一たび宮廷内へをさめらるゝやうに立ちいたつたのである。

喜劇要素

宗教劇とはその主題こそ異つてゐるけれど、やはり民衆向きのものであり、或ひは譬喩で教へ、或ひは笑はせ、時事の諷刺をも籠めた喜劇類がまた一方には存在してゐたのである。これは前代のアドン・ドゥ・ラ・アルの作なぞの一面の系統を引いてゐるものである。十五世紀のこの種の喜劇をば三種類に區別して見るのが普通であり、都合好き分類である。

(1)道話劇(Moralité)。この中には「薔薇物語」の引續きとも見らるゝものがある。善玉悪玉の人物が登場して、様々な教訓を示す。子供を甘やかす親を戒めたり、天國へ行くものと、地獄へ落ちるものとの區別を見せたりする。——「しつかり者とうつかり者」(Bien Avisé, Mal-Avisé)が一緒に道中し、やがて別々にそれ／＼の道を通つて天國と地獄とへ行くのである。その導き手がそれ／＼幾人もあるのだが、それが皆「理性」だとか「信仰」だとか「叛逆」だとか「痴愚」だとかいふ寓喩的人物である。それがこの劇には五十七人も出て来るのである。この道話劇は千四百九十六年に、聖マルティンの宗教劇の演出の後で、添へ物のやうに演ぜられたのである。その他「盲目とびつこ」「御馳走のむ

くい」「不孝者」「放蕩兒」「甥を殺す皇帝」などになると一層具體的で、一層面白いものである。

この種の諷刺劇は十六世紀に入ると宗教改革運動に利用せられたりして、アンリ四世から宗教上の諷刺は禁ぜらるゝやうになり、それ以後は個人的惡徳を剔抉するだけに止まるやうになつた。

(2)おどけ劇(Sottie)。これは道話劇の一種である。人間の惡徳を演じて見するために、黄や緑の着物を着た、耳の長い帽子を冠つた役者共が様々な滑稽を演ずるのである。その役者を「おどけ」(Sot)と呼んだのである。これが大衆向きで、大向う受けのしたもので、シェクスピア劇などによく出て来る Clown と同じ型である。このおどけ劇は宗教劇や、道話劇の間で中幕式に演じもすれば、或ひは劇作中へ挿入することもあり、時には眞面目なくさの中でおどけを演ずることもあり、それが悦ばれもしたものである。これがまた利用せられて、千五百十二年には、ピエル・グラエンゴワル(Pierre Gringoire)がその「おどけ者等の王子」(Le Jeu du Prince des Sots)の中で、ルイ十二世をおどけ者等の王子、教會そのものをおどけた母として、法王ジユル二世をからかつたりしたのであつた。

(3)笑劇(Farce)。これもまた宗教劇の合間に、或ひは初めに、若しくはしくさの中へ挿話的に入れられて出演せられたりしたもので、極めて短い逸話とか、市民やその他の民衆の夫婦生活などを點出した、十三世紀の寓話を劇化した如きものである。術學者、見榮坊、偽善家をからかひ、特に法律家、僧職代言人などは屢々材料にとられてゐるのである。

この笑劇の古典といはれ、この種の作中の代表的なものとされてゐるのは、やはり代言人を材とし

た「ピエール・バトラン先生」(Maître Pierre Paté)である。瞞まして買物をする代言人、その瞞まされた商人が羊飼を泥棒として訴へる。その訴へられた羊飼がその代言人に辯護を頼む。代言人先生羊飼に妙案を授ける。それがため訴訟は畢竟うやむやになるが、代言人は自分の授けた妙案が當り過ぎて却つて一文の御禮も貰へなくなるといふのである。仕組のはつきりした、筋の通つたもので、それぞれの人物の性格も明かで、全體の進行が快く、喜劇の上乗なものである。この作者はまだ的確に知られてはゐないのである。その他女に皮肉を浴びせたもの、女房連の頑固を示す「Cullin」亭主を尻に敷く女房の失敗「Cuvier」女房等の薄つへらを見せる「Coricette」などいづれも面白いものである。

笑劇の他に、僧侶の説教を思ひ切つて茶化して、それを真似て、パロディエするものに、「愉快な説教」(Sermon Joyeux)といふ如きものもあり、また獨白で、一人で短かな笑話を語りつ演じつするものもある。その中には「Franc Archer de Bagiolet」が傑作とせられてゐるのである。

これ等の道話劇、おどけ劇、笑劇その他のものは或ひは取交せて演ぜられ、或ひは獨立して演出されたものである。要するにそれ等を通じて、佛蘭西の民衆の中にゴオル人の昔から傳はる快活で、批評的で、からかひ好きで、お喋り好きで、即ち表現的な本質が現はされたものであることは見逃がすことの出来ぬ點である。これは種々な時代相、環境の相違に従つて變化せられはするが、決して失はれぬものである。

封建諸侯、騎士等を代表人物として、「武功史詩」を作り出したことに始まり、「物語詩」の中に幽遠な理想の追求を見せ、女性を讚美し信仰に燃え、宮廷詩人等の歌謠に悦びを求めた中世紀前期の文藝と、詩は散文に展開し、宮廷より巷間へ、騎士等より市民へ移され、會堂は街頭へ動き出し、民衆は信仰と悦樂との結合の中に宗教劇を演出し、滑稽劇を演出したる中世紀後半の文藝との對照は、正しく封建制度の隆興と崩壊との姿そのものを示すものである。そしてこの中世紀文學を通じて浸潤したクリスト教的驚異は、やがて来る異教的古代的驚異と結合する事によつて、一層複雑な佛蘭西文藝を織り出さうとしてゐるのである。ヘブライスムの洗禮素養を十分に享け入れたこの中世紀は、暗黒時代どころではない、特に十三世紀及び十五世紀の文藝は、治者被治者の文藝表現を對照的に示してゐる點だけでも、最も興味深き文藝であるのである。

經濟力の缺如は、封建貴族等自體の無力を誘致し、科學の進歩、従つて武器の變遷は外部的に封建制度を無用ならしめ、民衆の蹶起と王權の結合とは益々封建諸侯等を閉塞せしめずにはゐられなくした。けれど彼等は絶滅したのではない。王權の下で宮廷貴族に造りかへられて、なほ上層階級者として、その後三世紀間は遊惰な生活をつゞけ得られたのである。

火藥及び火器の發明は、從來の城塞を無用なるものたらしめ、重い桶、長い投槍などは全くの裝飾に過ぎなくして、印刷術の發明は思想の統一に重要な役目を演じ、新大陸の發見は國內の紛擾なぞ

を顧慮してゐられなくならしめ、そして古代文藝學術の發見復興はまた目をそばだたしむる驚異でもあつたのである。かくて中世紀は終りを告げ、十六世紀と共に近代の初頭に足を入るゝ事になるのである。

因に、中世紀とは、普通、上代と近代との中間の時代といふ意味である。歴史的には紀元三百九十五年、羅馬が蠻族の手に陥し入れられた時から、千四百五十三年、コンスタンティノブルがトルコ人の手に歸したまでをいふのである。即ち上代古典文化が隆盛であつた時代と、十五世紀半ば以後その文化が復活して來るまでの間を指すのである。この期間に、歐羅巴では諸民族の移動が行はれ、クリスト教の教化が行き互つたので、一種のコスモポリットの時代である。概念的に言へば、上代文化は全から部分に及ぼす演繹的、哲學的の本質を示してゐるのであり、近代文化は部分から全に及ぼす歸納的、科學的なものであり、中世紀は、根本概念を唯一絕對の神に對する宗教の信仰に置き、思索はその根源には向けられないで、部分を部分として取扱ふ繁瑣哲學の時代である。但しこの期間に上代文化が潛入し、近代文化が萌芽を見せてゐる興味深い時代である。近年にいたつて中世紀文化の研究は様々な方面で盛んになりつゝあることは事實である。

第三篇 近代佛蘭西文學

- 一、十六世紀——文藝復興期の文藝
- 二、十七世紀——近代古典期の文藝
- 三、十八世紀——大革命前期の文藝
- 四、十九世紀——大革命後、浪漫派、現實自然派の文藝

一、十六世紀の文藝

王權興隆期の文藝——海外發展の相——冒險譚——近代科學の發明——上代文藝の復興
 ——宗教革命——ロンサアル——ラブレエ——カルヴァン——十六世紀の結論としてのモンテニユ

中世紀に於いては、佛蘭西といふ一國はほゞ民族的には構成せられてゐたけれども、未だ近代國家の形體は備へてゐなかつた。十六世紀にいたつて初めて、王權の伸長に伴つて、近代の國家形體は徐々に強固になりつゝあつたのである。これは歐羅巴の他の諸國に於いても同様の進展を示した現象である。即ち中世紀に於ける國內の封建制度が、王國といふ統一形體を備へて來ると同時に、歐羅巴全體が一種の大袈裟な封建制度の如き姿をとつて、近代の各國家は互ひにその力の均衡を目標に競争を開始し初めたのである。國家的であると同時に國際的である關係生活が初められたのである。

この國際競争の第一の現はれは、海上に於ける各國勢力の争ひである。新大陸アメリカへの探險とその占有との伸長、アフリカを廻つての東方への航路の延長とは、歐羅巴各國をして争つて注意を海上に轉せしめ、大西洋上には公許の海賊團が各國相互の奪略を争ひ、海軍の進展はそこから端を發し、各國は競つて、植民地の獲得に、商業の繁盛に専念するにいたつたのである。國旗と商船との結合した近代商業主義の發端をなすものである。當時英國と西班牙との競争は最も激しく、不滅艦隊の敗滅

は英國をして覇を海上に稱せしむるにいたつたのである。英國に於けるエリザベス女王朝期の文藝、西班牙に於けるセルヴァンテスの文藝は、この兩國の形勢を背景としてならでは考へられぬものである。

佛蘭西では、フランソワ一世 (François 1^{er} 1494—1547 (在位) 1515—1547) が、初めて新大陸への進出を企て、それから續いてカナダの領有、及び東方への進展が着々なされたのであつた。この海外への進出は、必然的に商業の盛賑を來らしめ、それと共に往時隆盛であつた地中海の諸港は衰亡に向ひ、大西洋に面するポルドオ、ディエップ、ダンケルクの諸港は繁盛に導かれ、新たにル・アヴルの港は開かれ、資本は海港へ向けて集注せしめらるゝ傾向を誘致し、アメリカへの輸出、アメリカ及び東方よりの輸出は、一般人の生活資料をも變化せしむるに到つたのである。

佛蘭西人が今では一日でもそれなしでは過ごされぬ必要な飲料カフエの如き、煙草の如き、また甘蔗の如き、綿の如き、藍の如き日常生活資料も、この時以來の産物であり、貴金屬類にいたつては、永く既に歐羅巴では發見せられなかつたものが、ペルウの金、メキシコの銀の如きが續々舊大陸へ持ち込まれ、やがてルウヴル王宮や、テユイルリイ宮殿を飾り立てる資に供せられ、王權の伸長に伴つて、その必要な莊嚴を示す裝飾に豊富に使用せらるゝにいたつたのである。物質的な文字通りの黄金時代である。

この海上に於ける冒險、海外の探險、資本集注の傾向が文藝へ反映する時、そこには廣くせられた

る視野に於いて、異風の生活を觀察し、また驚異に對する幼稚な想像を逞しうして、自由な放奔な冒險譚をつくり出し、やがては新奇な天地、ユトピアの考へをも具現せしめずには置かなかつたのである。また舊大陸に於いては、十五世紀から十六世紀へかけての佛蘭西は、連續して伊太利と戰爭を開始した。シャルル八世、ルイ十二世、フランソワ一世、いづれもアルプスを越えて伊太利へ侵入した。その結果は中世紀に於ける十字軍の如く、異つた國土に於ける文化に接觸する事によつて、戰爭には勝利者であつた彼等も、伊太利に於いて既に開花してゐた上代文藝復興の隆盛に眩惑せられて、伊太利に於ける凡ゆる美はしきものは、佛蘭西へ移植せしめねばならぬと考ふるに到つたのである。上代希臘羅馬の文藝の研究及び復興、所謂 Humanistes の活動、及び更に當代に於ける伊太利の文藝、ペトラルカ (Petrarca) タッソ (Tasso) アリオストオ (Ariosto) 等の文藝、更に溯つてはボッカチオ (Boccaccio) の如き、佛蘭西人の所謂「第三古典」と呼ばるゝ伊太利文藝も續々佛蘭西へ持ち込まれ、更に伊太利の各地に發現したる當代の繪畫彫刻、ロマ、フィレンツェ、ヴェネチアに於けるそれらの流脈にいたつても、いたくもアルプス越えの侵入者等の駭目の對象とならざるにはあなかつた。

フランソワ一世は伊太利より大才、レオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci) を連れ歸り、ロワル河畔の宮殿に住ましめ、更に巴里へは千五百三十年に、當代の學者ギユイヨム・ビュデ (Guillaume Budé, 1467—1540) をして王立大學 (Collège Royal) を創立せしめ、主として伯來、希臘、羅馬の言語を教へしめた。それ故これを「三國語學校」(Collège des Trois Langues) とも呼んだ。けれど此處で

は上代語、上代文藝を研究せしむるばかりではなく、中世紀の諸費では禁ぜられてゐた哲學の自由討究、近代の物理學その他の自然科学の研究も課せられて、全く自由な國民教養の機關としたのであつた。近代の科學は千五百四十三年にコペルニクス (Copernicus) の地動説、太陽中心説が初めて唱導せられ、やがては、曆の改正までも見るに到つたのである。更に植物學の研究、人體の解剖、血液の順行なども初めて研究せらるゝに到つたのも當代の事である。フランソワ一世の創設したこの國民自由教養の機關は、今日までもその傳統を繼承してゐるのである。それは即ちコレージュ・ドゥ・フランス (Collège de France) である。

印刷術の發明は一般に修養を普及せしむるに與かつて力あつた事は言ふまでもない。十六世紀當代の出版印刷に關係してゐた人々は、いづれも彼等自身が學者であつた。その中の代表的なものはエステアンヌ・ベッテリ (Robert Estienne, 1503—1559. Henri Estienne, 1528—1598) である。彼等は上代の文獻を翻刻し流布せしむるばかりでなく、語學者であり、上代語と佛蘭西語との關係を明かにし、近代語を豊富にし、整理する學徒の仕事をも果してゐるのである。フランソワ一世は當時國內に於いて印刷せらるゝ如何なる書物をも必ずその一本を王立圖書館へ納入せしむる事とした。この文藝復興期に於ける印刷物の統一及び蒐集が即ち、今日に於ける國立圖書館、世界に於ける史料最も豊富なものの一つなる巴里の國立圖書館 (La Bibliothèque Nationale) の基礎を開いたのであつた。

フランソワ一世の軍事上に於ける王權伸長の姿は、千五百三十九年の「ヴィエール・コットレの條令」

(L'Ordonnance de Villers-Cotterets) となつて第一に整頓し、事實に於いて封建制度は崩壊し盡して、國民的常備軍が建設せらるゝに到つたのである。そして封建武士等は争うてこの國民軍に編成せらるゝ事を求め、所謂 Gens d'arme—Gendarmes となつて發展し、そして地方封建貴族等は國王によつて賓客として遇せられ、次第々々に宮廷貴族に化せらるゝ事を我から求むるやうに馴致せられて來たのである。

それ故、中世紀以來の傳統として、一方に嚴存してゐたこの武的封建制度が崩され行くと共に、他方に唇齒輔車の關係で二重の封建の一方を形づくつてゐた宗教上の封建組織、即ち教會制度がぐらつき出して來たのも當然の事と言はねばならぬ。偶像崇拜に凝化し、強權によつて課せられた形式化した信仰に對する破壊運動、自然科學の研究、自由討究の精神、及び印刷術の發達は帝に上代學藝の書籍を播布するに役立つばかりでなく、從來は禁ぜられてゐた聖書の翻刻、宗教書籍の刊行が盛になされて、そこに新らしき眞實な信仰の立て直しを要求するにいたつた現象と、他方には、寺領に供せられてゐる廣大な土地を奪還することによつて、自分等の所有地を擴大せんとする貴族等の實質的な利害關係も加はつて、此處に宗教改革 (La Réforme) なる運動と、世紀後半に於ける騒亂とが發生するに到つたのである。

封建組織の崩壊、王權の統一伸長、海外進出の流動、資本集注の傾向、近代科學の發明、上代文藝の復興、それ等が凡そ十六世紀なる時代を構成する社會的環境の重要な諸條件である。それ等を反映

して、當代の文藝は人間本性の尊重、自然科學への要望、冒險の興味、上代學藝に教へられたる法則論、詩論などの成立に對する努力、言語上の諸問題、宗教改革との關係を啓示しつゝ、さらにそれ等全體の活躍に對する自己及び社會的反省批判への到達が、現象として示さるゝに到つたのである。それ故十六世紀の文藝は、一方に中世紀より傳承せしめられたる宗教的文藝、殊に劇文學の要素と、多少の抒情歌的要素とを保存しつゝ、他方に於いては、概要して知識階級の文藝、即ち博識と翻譯と註解と、それを時代的放棄な擴大な表現形式に盛り上げんとする努力とが示されてゐるのである。これを内容的に言へば、上代の官能的文藝の近代化であり、自然科學への渴仰であり、横溢する生活力の整調であり、そして自己及び社會的批判の出發を構成するものである。

上代文藝を究明し吸收する努力の現はれとしては、ギユイヨオム・ビュデの如き博識家、エステイエヌ・ヌ父子の如き、ブリュタルクの「英雄傳」(Vies des hommes illustres) の翻譯者にして最も優良な學者アムィエ (Amyot, 1513—1593) の如き、また當代の新知識の探究としては、アンブロワズ・パレ (Ambroise Paré) の如き、またベルナル・パリスィ (Bernard Palissy) の如き人々を代表者として見るのであるが、凡そそれ等の新舊知識の獲得者等に取り圍まれ、文字通り群星の中へ君臨する女王の如き姿を示してゐるのが即ちフランソワ一世の姉、ナヴァルの女王、マルグリット (Marguerite de Navarre, 1492—1549) である。

彼女自身が當代の尖端を行く女性である。凡ゆる國語に通じ、博識であり、新知識を求めてやまず、詩を作り、物語を書き、詩は寧ろ中世紀傳統の「薔薇物語」の如き抽象擬人化的のものではあるが、物語の「Heptameron」（七日物語）は、伊太利のボッカチオの「十日物語」に倣つたものであるが、いづれも戀愛を主題とした、細やかな觀察と、綿密な描寫と、相當卑俗な材料を取り扱つて、いかにも巧みに面白く書きつらねてあるのである。いはゞ「今昔物語」といつた趣きのあるもので、後代に到つて發達したヌウヴェル（Nouvelle）の始源を拓いたものである。そのうへ、彼女の宮廷は一種の新思想家等の庇護處の觀を呈し、當代の人文主義者等（Humanistes）も、また宗教改革者等、その最たるジャン・カルヴァンの如きも、また詩人クレマン・マロオの如きも、その他多數の學者詩人思想家等が彼女の許に保護を求めに來り集つてゐたのである。新時代を啓開するための母性の典型の如き觀を呈してゐるのである。

彼女の宮殿に仕へてゐた人に、十六世紀の最初の偉大な詩人クレマン・マロオ（Clement Marot, 1495—1524）がある。彼の父も同じく詩人、ジャン・マロオである。彼は最初この父の教育を受け、二十三歳でマルグリットの宮殿へ入り、やがてフランソワ一世にも仕へた。彼の後半世は數奇の運命に弄せられ、伊太利に囚はれ、病苦を煩ひ、リオンに止まり、ルウテル派に屬するものとして追はれ、ジュネヴへ行き、遂にトリノで世を終つたのである。

彼は當代の人々と同じく、古代羅馬の詩人、ウィルジルや、オウィドの翻譯、更に聖書の詩篇の翻譯

をもしてゐた。けれど彼は同時に中世紀の「薔薇物語」や、ウィロンの詩なども愛讀してゐた。復興せられたる古代文藝と中世紀傳統とを併せて、共に味ひ體得した詩人である。

「キュピドオの殿堂」「地獄」「青春時の詩」「王への短詩」その他多くの贈詩がある。このエピトルが特に彼の優れた作といへる。

「わが愚かしき青春の頃は

こゝかしこ飛び交ふ燕にも似つ、

齡はわれを導きて

恐れもなく、懸念もなく、心のまゝに赴かせぬ。」

と自分でうたつてゐる如く、輕やかな心の持主であり、宮廷生活は彼を一層歡樂へと近づかせた。彼は一方に歡樂主義者であると同時に、他方では自由と理性とに耳傾むくる新教徒でもあつた。復興初期の人々の代表と言ふことが出来る。

彼の生活が殆ど衝動的になされた如く、彼の詩も易すく書かれてゐる。決して苦心の勞作ではない。若き時代の人々の多くが然る如く、彼も非常な努力を費やさずして、微笑をもつて詩を作り上げる。素樸な點、柔かな細やかさ、それに一味の皮肉を交へて、しかも常に自然性を失はずにゐる。彼はまた動物を描き出して、巧みな繪圖を展開する。中世紀の「狐物語」を思はするものである。彼の感知性は深いと云ふよりは細やかで、柔かい。やはり彼にはシャルル・ドルレアンの宮廷詩人の面

影が傳はつてゐるのである。

Et quand je sens son cœur si chaste et haut, われ彼女の心のいと高く淨らけきを覺ゆれば
Je l'aime tant que je n'ose l'aimer. 愛せんとも敢へてし得ざるがほどにこそ愛するなれ
併し彼には時とすると、信仰に鼓吹せられ、或は義憤に驅られて、その聲の太く強く、恐怖さへも
惹き起さしむる場合もあるのである。

マロオよりロンサルに到る間に、「リヨン派」(Ecole Lyonnaise)と呼ぶべき一群の人々がある。リ
ヨンは羅馬人侵入以來の舊き都である。伊太利との交通要路として、ロオヌ河の船行基點として、商
業に榮え、富みをいたし、繁華な都市ではあるが、またロオヌ河とソオヌ河の合流地に立つてゐて最
も霧深き、自然現象の不思議な地點でもある。歴史と自然と信仰と豊富な物質とが織り出す生活現象
の詩的表現は、十六世紀に於いては、所謂「リヨン派」詩人の群となつて現はれ、その中には女詩人
も多く混つてゐるのである。その中の一人モオリス・セエウ(Maurice Scève)の如きは、宮廷詩人の面
影などは全くなく、復興期の博識と、勞作した形状と、そして内的熱意を重苦しくも示してゐるので
ある。女詩人ルイズ・ラベ(Louise Labe)の如きは、燃ゆる熱情を十四行詩に託し、希臘の女詩人サッ
ファを偲ばしむる面影を傳ふ。リヨンの女性性は概して熱情を信仰に包み、賢けれど表面を平靜に、
十九世紀の神祕理想派の畫家シャヴァンヌが描く女性にその面貌を傳へてゐる。畫家シャヴァンヌと詩人
シュレイ・ブリュドナムとは十九世紀に於けるリヨンの藝術表現を代表してゐるのである。

詩人マロオの弟子の一人、トオマ・スイビレ(Thomas Sibillet)は「詩論」(Art Poétique, 1548)を著し
て、マロオを推稱し、更に上代詩を模範として、詩人の理想を高むることを説いた。これに對して
ロンサルを主長とする七人の結社、バイフ(Baif)ド・ベリヤ(Du Bellay)ベルロオ(Belleau)ポンテ
ス・ドック・ティアル(Pontus de Thyard)シニデル(Jodelle)ドオラ(Daurat)等が作つた「昂詩社」(La
Pléiade)は「佛蘭西語の擁護及び發揚」(Défense et Illustration de la Langue française, 1549)を出して
これに對抗した。筆者は、ド・ベレエである。マロオ派の人々との間に抗争が示された。その主張す
るところは、第一に佛蘭西語をして偏へに拉典語にのみ従はしめず、國語の本來の語法を尊重し、そ
れによつて大切な作品は書かるべきであるとするのである。次には、併し從來の國語は貧弱であつて、
當代の表現には十分でないが故に、希臘語、拉典語から假りた語を採用する事は勿論、自國の古語を
復活せしめ、専門語を定め、發生語を作り、新熟字を考へ、語法文法上の慣用を豊富ならしめんとす
るのである。言語の發生期に於いて當然なさるべき事を合理化せんとする働きである。やがて彼等は
原生語と外來語との複綜した新時代語を用ひて、文藝表現をなすに當つての詩作上の法則、豊かな押
韻法、言語の音楽美に綿密な注意を向けた。そして上代に於けるイリアドや、エネイドの如き大詩篇
をも作り出さうと試み、大叙事詩、賦(Ode)哀歌(Épigramme)などの作詩の種類をも彼等は初めて佛蘭西
に於いて試み出したのである。

この派の主領、そして十六世紀の最大の詩人、ピエル・ドック・ロンサル(Pierre de Ronsard, 1524—1585)

は相當門地の高い生れであり、最初はオルレアン侯に仕へ、マドレエヌ・ドゥ・フランスのスコットランドのステュアート家へ嫁するのに従つて行き、ついでそれ等の宮廷生活を辭して、専心希臘語、拉典語の研究に没頭すること七年間、「昂」派の人々共々互ひに勵まし合ひ、やがて大詩人としてその名聲高く、アンリ二世、フランソワ二世に愛せられ、シャルル九世やマリイ・ステュアートなどの親しき友であり、光榮と幸福との間に、遂には「昂」の同人等にも遅れて生を終つたのである。

彼は全く優れた詩的才能と、非常な熱意ある勉強と博識と、歡樂追求欲とを共に備へた佛蘭西に於ける文藝復興期の典型的人物である。従つて彼の詩歌は全くの本來の感興によつて自然に溢るゝ如く歌ひ出したものであると同時に、強き意志から努力的に作られたものでもある。また彼の歡樂追求はひとり宮廷生活の安易を求むるばかりでなく、當代の人々として感知し得べき限度に於いて天然をも、自然の力をも愛せしめたものである。

彼の數多き作品は、(1)長篇叙事詩、集合連作詩、時事慷慨詩類の大詩形と、(2)戀歌、贈詩、哀歌、讚歌、十四行詩などの小詩形とに分けて見るべきである。その長篇大詩形の第一としてOdeの連作(Gardier 版、ロンサール全集、第三卷)がある。これは彼以前の修辭家等の空なる繁錯な工風を避けて、一意に古代のパンダルや、オラスの手法に習つたものである。併しそのパンダル風のオオドも、古代にあつては合唱隊が徐々にうたひつ、續けつ行つたものを、彼は一氣に一人で書き連らね、美神の誕生からして、當時の佛蘭西に於ける文藝までも連關せしめて來るのである。何もかもを古代から直ちに十六世紀の佛蘭

西へ引きつゞけ、引き直さうとする一例である。その最も好い例證は、彼の長篇史詩「フランシヤド」(Franciade)である。

これは上代のイリアドやエネイドの如き大叙事詩を自國へ與へんとする企である。その主題は、トロワ戦争の後、トロワの勇者エクトルの子フランキヌスが新らしき國を求めて、神々に導かれつゝ、ゴオルの國へ來て、佛蘭西王國を打ち立てるといふのである。その詩の發展が全くウィルヅルや、オメエルの後を追つたものであり、發想感興の缺乏したものであり、學者のこじつけた作品であり、不評を受けて途中でやめてしまつた。

次に「慷慨詩」とも呼ぶべき、詩人が當代の時事を眺めやり慨嘆してうたひだした現實詩がある。「Discours」がそれである。「佛蘭西の民衆への諫言」とか、「或る大臣への返答」とか、當時カトリック教徒とプロテスタン教徒との争ひのために、烈しく切りさいなまれた佛蘭西の姿を痛ましくも眺めやつては、

「佛蘭西の面影こそは悲しくぞ思はるゝ、
死にとらはれし哀れなる女性の如くにも。」
とうたひ出し、クリスト教は愛の教である。然るに新舊教徒互ひに流血の争闘をなすは何といふ痛ましさを、

「クリストは不和闘争の神にはあらず、

クリストは慈悲と、愛と、調和とにこそ。」

とうたふ。若しこれ等の詩中から信仰とか、神への呼びかけとかを除けば、漢詩に屢々見掛ける國事を論ずる長篇詩である。當代の事相が窺はるゝ現實詩である。

ロンサールの小詩形詩は、戀愛詩 (Les Amours) (ガルニエ版全集第一卷及び第二卷) また、詩歌篇 (Les Poésies) (全集第一卷) の如き、詩人の素質が自由に現はれて、一層親しみ易く、素樸で、率直な戀、或ひは幼くはあれど親しみをもつ自然の光景が、いかにも漢代の古詩でも讀むやうな一種のなつかしさを覺えしむる。

「おん身年老いて、夕べ、燭の下に、

爐の傍に、絲をつむぎつ、繰りつゝ坐はる時、

おん身をば麗はしと讚へし予が詩を誦して、言ひもせん、

ロンサール、我が美しかりし時、我をあがめしと。

かゝる時、おん身の使ひ女は、その語をば耳にはすれど、

すでに仕事に疲れはてゝ、半ばまどろみつゝ、

不滅の讚辭もて、おん身の名をことほぎし、

予が名を聞けど、目醒めんともせざるべし。

予は地下に、骨なき幻となり、

天人花の蔭に、休息をぞとらなん、

おん身は老婦として爐邊にかゞみ、

予が戀を、そしておん身が擁めざる誇りをば悔いもせん。

しかず、生きよ、予を信ずれば、明日をば待つな、

今日よりぞ生の薔薇をば摘みとれよかし。

(レエヌへ贈る短詩)

彼はまた自然の光景を愛しうたふ。勿論後代のロマンティック詩人等がうたふものに較ぶれば、素樸でもあれば、また神話的でもある。

「聽け、柚人よ、しばしその胸をとゞめよ！

おん身が切り倒すのは樹々にはあらず。

滴々としてしぼり出さるゝ血潮を見ずや

堅き樹皮の下に棲息するナンフ等の？」

併し彼のなかに既に後代の詩人等が感ずる如き、人間も自然も一如の生活が呼吸してゐるのを感知せしめらるゝ場合が屢々ある。彼がその點でも近代の最初頭の詩人であるといふ感じがせられずには

みられぬ。

「昂」派の他の人々、ジョアキン・ド・ペレエ (Joaquin du Bellay, 1525—1560) の如きは、「佛蘭西語の擁護と發揚」の筆者で、學者でもあり、詩人でもあり、羅馬の廢墟をうたひ出し、祖國をたゞへ、またバイフ (Barf, 1531—1580) の如きは、後のラ・フォンテヌを思はする詩人であり、その他の人々もいづれはロンサールを繞つて當代の詩的表現を輝かしむると共に、佛蘭西語をして正しき、また豊富なものたらしめ、多くの新らしき詩形を提供し、古代を近代へ親しく持ち來たし、文藝の表現を確實な存在になさしめたる功績は何としても顯著なものと言はねばならぬ。

C

佛蘭西の文藝復興期を全的に代表する如く思はるゝ人、そして西班牙のセルヴァンテスの如く、また英國のシ・クスピアの如く、それ／＼の當代の典型人物といふべきはラブレエ (Rabelais, 1490—1553) である。彼は最初僧職としての教養を受け、後にモンペリエに於いて醫學を修養し、リヨンに於いて醫者として働き、そして同地に於いてこそ、初めは匿名で「パンタグルエル」(Pantagruel, 1533) 物語の最初を出版せしめ、やがて、「ガルガントエア」(Gargantua, 1535) を著はした。但作品の主題の順序としては、「ガルガントエア」が「パンタグルエル」の先行となるのである。やがて「パンタグルエル」物語の續篇を發行し、生活上の種々なる變化を経て、第四篇までは彼の生前に、第五篇は彼の死後、その残した覺書きに準じて何人が作り上げたものである。

ラブレエのこの二つの大篇物語の中には、人文主義的近代人の凡ゆる機能、感ずること、諒解すること、空想すること、動くこと、凡ゆる肉體的精神的の働きが十分に開發されてゐる。また近代科學の發見に對する驚異も、その科學の普遍性に對する無限の向上欲も盛られてゐる。さらに中世紀に於ける武功史詩、騎士物語等に對しては、有智的ブルジョワジイが初めて持ち得た散文物語の廣大な形式として、その中には自由奔放な、途方もなき元氣さへ溢れしめてゐるのである。更にまた中世紀後半より生じた王權とブルジョワジイとの結合傳統が、十六世紀の當代に於いては、知識といふ働きを通じて發揮せられんとする形勢を明かに示してゐるのである。そしてそれ等全體を通じてゴオル人以來の特色、快活で、からかひ好きで、肉慾的である事が一般の地色となつて貫いてゐるのである。そしてこの物語よりして後代に發展する大篇物語 (Le Grand roman) の形式も定められ、ユゴオに、バルザックに進展して行つた事も考へて置かねばならぬ。

ガルガントエアは巨人グラングズィエとガルガメメルとの子である。彼は生れる時、他の子供等と同じく Mies, Mies と聲を擧げて泣いてゐるかと思ふと、不意に、à boire, à boire, と叫び出した。即ち「飲みたい、飲みたい」と言ひ出した。——やがて種々な不思議を演じて大きくなり、或る教師の許で教育を受くることとなつた。この教師は賢くも肉體的練習と精神的教養とを適當に與へて、その弟子を導いた。——やがてガルガントエアは巴里へ來た。その時、父親は敵王の軍隊に襲はれて危いので、彼は信教者ジャンの助をかりて、偏に防禦のためのみの戰爭を起して敵軍を打ち破つ

た。父親はその謝禮にとてテレエムの修道場を建てて與へた。その修道場の唯一の法則は「欲することをなせ」(Fay ce que voudra)といふのである。

中世紀のスコラ派の教育は否定的である。人間の本性を抑制することに努めた。併し人間には凡ゆる官能を開展せしむる、自然の教育がなされねばならぬ。「何故なれば自然は善である。自然は美と調和とを生む、不自然は極端と不調和とを生みいだす。」人間の凡ゆる機能を開発することは、この自然の大調和を體得することである。新たに目醒めたる知識欲を十分に伸ばさしめよ、但しこれのみに偏するは調和を缺く。即ち「科學にして良心なくば靈の破産のみ。」智と情とを共に發達せしめよ、それが「欲するところをなせ」といふことである。

ガルガンテアの子、パンタグルエルはその生ひ立ちが父に比して普通である。が、父の冒險の精神は十分持つてゐる。父の主義の許に教育を受け、やがて巴里の大學へ送らる。其處でパニユルジュなる友人を見つけて親交を結ぶ。この人物は奇才縦横、フウストに對するメフィストフェレスの如き人物である。その中年頃となつてパニユルジュは、一體結婚はすべきものかどうかといふ問題を起して、パンタグルエルと色々様々な人々に訊ね廻る。巫女に尋ね、詩人に聴き、神學者を訪問し、醫師に、哲學者にたゞすが十分の解答が得られぬ。最後に道化のトリブウレなる者の意見に従つて、「神聖櫃」(La Dive Bouteille)の神話を聴きに出掛けるのである。この聖櫃は印度の北方カトワの國に在る。其處へ向けての長い航海、海上の冒險に出掛ける。その途中で様々な島巡りをやる。正

義の人々の住ふシカマウの島、新教徒の集ふバプフィクの島、カレエム・プルナンと呼ぶカトリック教徒の島、ガステルといふ歡樂追求者の島々、當代の時相を示す譬喩的な島々を巡つて行く間には、彼等の知識でも如何ともする事の出来ぬ悲哀すら味はせられ、嵐に逢つたり、危險を冒したりしてやがて目的地へ到着すると、彼等は「光明婦人」に導かれて、聖櫃の殿堂へ近づく。その殿堂には、Bachus (Bacchus)といふ一人の教職が守つてゐる。その殿堂の周圍には泉水があり、神聖櫃はその中へ楕圓の半身を没してゐる。教職者はその周圍をうたひつゝ三廻して水中へ身を投ずると、水は湧き上り、驟雨の如き響を立て、神聖櫃は「Tinc」即ち「飲め」といふ神託を發したのである。その神託で二人は満足して歸國の途につくのである。

父親が生るゝ時は、「飲まう、飲まう」と叫んだのに對し、子は「飲め」といふ神託を受けて満足するのである。何を飲むべきか、自然の力である。自然に従つて生きよ、健康と悅樂と平和とは自然から來る。

人間の凡ゆる機能を開放せよ、それが「パンタグルエル主義」(Pantagruelisme)である、「ラブレエの自然主義」とも呼ばれるものである。これは人間の過誤に陥れる當代の社會組織を一度自然へ立ち還らしめて、其處から出直さうとした十八世紀のルウソフ哲學の先驅をなすものであり、佛蘭西の十七世紀の絶對王權確立の前と後とに於いて、この人間の自然性尊重の思想が湧出せられ、一方はこの思想をもつて豊富な生活を要求すると同時に、理智性の統一をもつて、絶對權への結合を導き、他はそ

の絶対権の無能有害を認めて、自然性に準じて、社會組織を立て直さうとするに役立てたのであつた。

十五世紀に於いて繁盛した民衆的宗教劇は、十六世紀文藝復興期に入ると共に、種々な迫害を受けた。即ち舊新兩教徒からはいづれも冒瀆として排せられ、知識階級からは卑俗なものとして難せられ、遂に千五百四十八年の巴里の國政議會に於いて禁令が發せらるゝ事となつた。これに代つて當代文藝復興期の劇的表現を引受けたものは言ふ迄もなく、上代文藝に熱中してゐた有智階級の人々、特にラ・ブレアードの連中である。ドュ・ベレエ、ロンサフル等はソフ・クルや、ウリビイドや、アリストファヌの翻譯及び上演を企て、特にこの上代劇を手本とした作品の生るゝを熱心に求めたのである。その要求に應じて第一に出たのが當時未だ二十歳の青年劇作家、ジョデル(Jodelle, 1532—1573)である。彼の作「クレオパトル」(“Cléopâtre” — 1552)は佛蘭西古典悲劇の第一歩を形づくるものとして歴史的價値を示すものである。やがて同作家の「犠牲者ディドン」(“Didon se sacrifiant”)が来る。ロベール・ガルニエ(Robert Garnier, 1535—1601)は喜悲劇「ブラダマント」(“Brahmanie”)「猶太の女達」(“Les Juives”)その他の作を示して、コルネイユへ曙光を投じてゐる。モンクレチアン(Montchretien, 1775? — 1621)は「スコットランドの女王」(“L'Écossoise”)に於いて、ことに悲愴美を示してゐる。劇術に關する議論もすでに種々なされ、スカリジエ(Scaliger, 1484—1558)ジャン・ドゥ・ラ・タイユ(Jean de la Taille, 1540—1611)の如き人々は三一致の法則についてさへ論じて出してゐるのである。

十六世紀の喜劇もいまだその萌芽期に屬するものであつた。特に喜劇は一般に時代相が相當に成熟して、それを正確に批判し得る時期に到らねば完成の姿は見せぬものである。十六世紀當代は一方に中世紀より笑劇を繼承し、持續してゐると同時に、他方に於いては上代の喜劇、アリストファヌ、プロトテランソの翻譯及び模倣と、更に伊太利の近代喜劇及び喜劇役者等の演出に教へらるゝ事多く、ジョデルの「ウジエヌ」(“Eugénie”)の如き、レミイ・ペルロオの「ラルコンニ」(“La Reconne”)の如き、或ひは過去を嘲り、或ひは現在のブルジョワ生活を如實に描き出してはゐても、やはり中世紀以來の笑劇の範圍を多く脱せず、たゞ一人、ラルイウエ(Larivey, 1540—1611)のみが、當代の代表喜劇作者として、後に来るモリエールのために道を招いてゐるのである。彼の代表作は「レ・ゼスプリ」(“Les Espiris”)である。けれど、この作とても伊太利劇、殊に上代劇の影響を顯著に示してゐた、いまだその主題及び行進をさへも消化し切れざる姿である。

ラブレエの人の好ささうな、精力のはち切れさうな、晴々しい顔をしてゐるのに對して、細い、氣むづかしさうな半面を見せて、唇のうすい、神経の鋭い、いつも顫へてゐる美しい手をしてゐるジャン・カルヴェン(Jean Calvin, 1509—1564)の面影を描いて見ると、その峻嚴熱烈な議論と共に、一個の革命家を思はずにはゐられない。彼はまた「自由」よりは「眞實」を求めてやまぬ知識探求家として十六世紀の代表者の一人である。

彼は最初巴里大學に學び、復興期の人文主義者の一人として上代文學を研究し、次第にその嚴正な研究態度を宗教に向け、カトリック教會制度の虚偽に墮する事多きを憎み、遂に千五百三十五年巴里で最初のカトリック攻撃講演をなし、追はれて、ナツアルの女王の許に寄遇し、ジュネウへ行き、遂にその地を宗教改革の中心地としたのであつた。

彼の「クリスト教の制度」(“L'Institution de La Religion Chrétienne”)は最初拉典語で書き、後に佛蘭西に譯したものである。

創造者としての神について、贖ひ主としてのクリストについて、やがてクリストの恩恵について、最後に、神が我々をクリストへ導く手段について論じたものである。即ちクリストといふ人格に信仰を結びつけて、教會制度の如き幾多の人爲の強權的仲介者の中に立てずして、萬人をして直ちにクリストの前へ、そしてクリストを通じて、神の前へ身を現せしめんとするのである。人文主義者等が隠れた上代美を探究照出するが如く、カルヴェンは、從來一般には知られなかつた豫言者モオゼを、また聖ボオロを聖書の中から初めて浮び上らしめ、殊にクリストを、更に神そのものを、萬人に現前せしめたのである。

人文主義者、自由主義者は神と自然とは同一と見做す。自然即神は總てを造つた。本能も官能もその創造である。その自然性に従つて生きよ、その中に自づからなる調和がある。自然は究極に於いて善であるとする。カルヴェンは、自然の生活をそのままに委かせてはならぬ。自然に光と法則とを與ふる

ものが即ち人間の理想である、究極すればそれは神であると見るのである。ラブレエは人間生活へ自然を取り入れた、若しくは人間生活を自然へ解放した。カルヴェンは究極理法をもつて自然を、現實を律せんとする。一つは解放の悦びに酔ひ、他は拘束なき生活の不秩序亂雜を惡むのである。一つは自然的本能に従つての自由を求め、他はその本能を解脱し、その本能を抑制しての自由を求むるのである。カルヴェンはカトリックに對しては、その教義を解剖し、形式的な難業苦業の不合理を攻め、信仰によつてのみ神へ導かれ、是認せらるゝを説くのである。自由主義者に對しては、人間は究極は弱くして悪い、自然性は拘束しなくてはいけぬ、神によつてこの法則をそれに加へんことを説くのである。

彼の「クリスト教の制度」は簡潔的確な語句を用ひ、殆ど數學的なほどに明晰を極めたものである。彼によつて擧げられた宗教改革の聲は、迫害と應援との騒がしき響を呼び起し、やがては新舊兩教徒の流血の久しい鬭争にまで伸展したのであるが、宗教文學がやはり舊新兩教徒の間から相當發生せしめらるゝに到つたのである。コフエトオ (Cofféreau, 1574—1623) サエン・フランソワ・ド・サル (Saint François-de-Sales, 1567—1622) の如きカトリック教徒の文藝、またヴェクレン・ド・ラ・フルエスネ (Vauguelin de la Fresnaye, 1536—1603) の「佛蘭西詩論」(“Art Poétique français”) の如き、プロテスタント派の方では、新教徒であつて同時にロンサールの弟子で、天地創造を主題とした「一週間」(“La Semaine”)を代表作とする詩人ド・バルタ (Du Bartas, 1544—1590) の如き、また宗教戰爭には身を

もつて参加し、サニ・バルテルミイ(千五百七十二年八月二十三日の夜に始つて、數日間)に互つて連續した、新教徒大集團の大虐殺、大流血の虐殺をも危く脱れたアグリッパ・ド・オニ(Agrippa d'Aubigné, 1550—1630)の如き、彼の長篇詩「悲愴詩」(「Les Tragiques」—1616)は、そのまことに、この宗教革命と、それに伴隨した當時の悲愴な光景を、信仰情熱と詩的表現とに於いて如實にうたひ出したもの、十六世紀末の時相を示すユニクな文藝作品である。彼は第一に新教徒の光榮をうたひ、カトリック教徒に嘲罵を加へ、佛蘭西全體の不幸な姿を描き出し、時相に對して皮肉を浴びせ、新教徒の受難の物語を叙し、やがて内亂の光景を、更に天よりの刑罰の豫言と、復讐と最後の審判とをうたつてゐるのである。その熱情の力、想像力の豊かさ、當代の人々を震憾せしめたばかりでなく、後代の人々を奮起せしむる力を持つてゐるのである。これぞ當時の佛蘭西に生れたる現實詩といふ事が出来るのである。

これは宗教文藝ではないが、當時の政治の狀態を諷刺した散文の作品に「メニペの諷刺」(「La Satyre Menippée」)なるものがある。これは上代希臘の哲人メニペの諷刺に事よせて、一群の人々が冊子として刊行したものであり、當時の政治家の行動、集合の姿を皮肉に取扱つた一種の政治文學である。雄辯の力を示し、宗教上の内亂に飽いて平和を求むる欲求を暗々裡に現はしてゐる。これは少くも現實的批判が文藝的表現をなしたものととして見る場合、次第に時勢の轉換を暗示する作品として、歴史的に見て、前の長篇「悲愴詩」と對照して、共々興味深きものである。

ラブレエの自然性の解放、カルヴェンの宗教の解放について、最後に自己批判、個人性の普遍化といふ點で、文藝復興期に結論を與へ、古典主義文藝への端緒を拓いた人として、ミシェル・ド・モンテエ(Michel de Montaigne, 1533—1592)を挙げねばならぬ。

彼はポルドオの門地高き豊かな家に生れ、十分なる教養を受け、拉典語は母國語の如く究め、眠るにも醒むるにも音楽を伴つたといふ如き生活の中に人と成り、父についてポルドオの議員となり、一度は市長ともなり、後は多少の旅行と、晩年は専ら讀書と著書とに意を注いでゐた人である。彼に於いてルネサンスは大成し、彼に於いて近代批評は初めて目を醒ましたのである。彼の著作は有名な「Essais」(評論)である。この書物は當時既に廣く讀まれ、國外にまで廣まつて、シクスピアもまたこれは愛讀したといはる。これは一種の告白録とも見られ、同時に當代に對する批評でもあり、また更に人生の内觀哲學でもある。モンテエニに於いてこそ初めて、Moralisteなる語が最も適切に當てらるゝ。即ち人生批評家ともいふべき語である。

第一に彼はこの書物で自分自身の生活を解剖し分析し、點畫的精密さをもつてそれを描き出す。「世人は我を我が書物に於いて認め、我に於いて我が書物を認む」と言つてゐる如く、自己を凡ゆる状態に於いて的確に突きとめ、それを精細に現はさうとする。Essaiといふ語の第一義は、このためし、試み、確かむるといふ事である。自分の一切の生活、讀書、智力を解剖して見る。次に彼は人間そのものの解剖を初める。一個人のなかで人は人間全體を認知するといふのが彼の考へである。「各個人は人間の

生活條件の全形式を持つてゐる。」それ故、彼は自己解剖に初つて人間性そのものの解剖に到達せんとする。然るに人間が生存する社會に於いて、法則も習慣も時と場所によつて變化せざるはない。感能が我々を欺き、理性が我々を誤らしむ。「人間の命にも、事物の生命にも、何等常住の存在はない。我々も我々の判断も、總ての生物も不斷に流轉しつゝ行く」のである。人間はこの變化流轉の事象の中で、果して何を知り、何を確かめ得るであらうか、抑も「我は何を知つてゐるか」(「On a bien-tout」)。これは一般的に人々が反省して見る可き事でもあり、また當時の文藝復興期に際し、上代の文藝近代の科學、凡ゆるものが提出せられ、意識を通過しはしたが、果して人は何を的確に悉知してゐるのか、その全體的批評でもあり、一種の悲觀說でもある。これをモンテエニユの懷疑說と人は呼ぶのである。そこで我々の意識を解剖して見ると、少くも二つの確かなものがある。それは苦と樂との意識である。その最も單純なる苦樂の要素を發見するために凡ゆる條件を取り去つて見る。情慾、野心、貪慾、社會上の様々な生活様式、當代に於ける宗教的政治的争闘の如きもの、また祖國愛とか、妻子への愛情とかをも認めはするが捉はれぬ事とする。「人は覺悟はすべきではあるが、身を投じてはならぬ。」一切に束縛せられない状態に意識を置いて見る。けれどその場合に儼として迫つて來る一つの痛苦がある。それは「死」である。死は確かに何人に通じても共通の苦である。けれど彼は「ソクラテスや、セネカや、リュクレシウスの死を思ひやれば、無頓着でないまでも、死から壓倒せらるゝ事から脱れることは出來る。更に死を思へば生が尊くもなる。それ故生の敵は死ではなく、死は寧ろ生を悦ばしき

ものにする。痛苦が悅樂に轉ずる。然らば痛苦は死以外何であるか、それは愚かさである。心惱みである。愚さは事物を亂雜にする。無智の錯雜が人を捉へて苦しましむる。亂雜は常に悪い、善きことは常は簡明である。悪人は常に錯雜した心理を持つ。純眞單一であれ、單純なる生活、自然の母が我々に與へた機能とその攝制、選擇に従つて度を越えず、身を投げ出さざる生活をして行く、悦びはその中に生る。これをモンテエニユの「實行的快樂主義」と人は呼んで、前に言つた「懷疑說」と對照せしむるのである。

彼はボルドオ近き館の内で、平靜な默思の生活はして居れど、人としては社會の中に住むべきを説く。但し彼の生活の根本の信條は「平和」である。彼が眺めやる地平線上にうづまく宗教内亂の騒ぎを耳にするにつけ、「平和」をこそ希ふ。彼は根本にはデモクラシーを求めはするが、當代に生れた一佛蘭西人としては王權に忠實ならんを期してゐる。何故なれば當時の法則なるものは正義をば示さずとも、少くも風習をば現はしてゐる。團體生活をする以上は風習は尊重せねばならぬ。「平和」は初めてそれによつて得らるゝのである。彼は宗教の信仰は稀薄である。然し自國の宗教は飽くまで尊重する。宗教革命をば寧ろ欲しない。いかなる場合とて、神の名に於いて人は人を殺す權利はない。さりとして平和の間になさるゝ改革にて、人が幸福になり得るならば、もとより許容すべきである。普遍的の寛恕こそ當代に於いて何よりも求むべきである。そこで彼は「友情」を説く第一人者となるのである。友人こそは自由の選擇によつて得られたるもの、最も尊重すべきものたるを説くのである。

次いでモンテエニユの教育論が生ずる。知識欲をば際限なく外へ向くる事ばかりせず、何よりもまづ自己認識に初まり、やがて自己の周囲から、當代の社會、人生を判断するやうに導くことである。個人意識の普及化といふか、個人我を脱してその先なる普遍我に到達せしめようとするのである。そこで子供に教師を選ぶとしては、物識りであるよりは、圓滿な頭腦の持主であれ。徒らに知識ばかりを振り廻さず、世界といふ大きな鏡の中で自分等の姿を照し出して見る人でなければならぬ。自由で單純で明瞭で愛に充ちて、自然性に従ひ自然を害せず、併し自然を適度に選擇して行くやうに育て上げねばならぬ。このモンテエニユの教育論はラブレエの教育論に對しても、また當代一般の風習に對してもの純正な批評となるのである。

ルネエサンス期の奔放な勢ひ、燃ゆるやうな知識欲が徐々に鎮靜して來て、自己批判に初まつて、普遍我に及ぼす理智的認識、更に社會事象に對する的確な批評の働きの、それ等が一度びモンテエニユなる人物に凝集せられて、次の佛蘭西古典文藝完成期へ浸透して行く姿を示してゐるのが即ち、*Essais*なる述作であるのである。まさしく復興期の結論を形づくり、次代の發端を劃するものであるといふ事が出来る。

マロオに初まりロンサル及びその一群に伸展した詩的表現の中に中世紀傳承と上代文藝の交錯の姿がうかゞはれ、ナヴァルの女王マルグリットの「七日物語」に近代小説の始源を見せ、ラブレエにこそ十六世紀全體の完全な代表者の姿を浮ばせ、更にその散文物語の作品で、後代の長篇物語の原型を示し、劇は悲劇喜劇共にいまだ萌芽期の状態を脱せず、そして世紀後半に於けるカルヴェンの宗教改革とそれにつゞく宗教文藝及び、モンテエニユの評論批評こそは全くこの世紀の新たなる所産であり、そしてそれ等全體の文藝表現を包括して政治形態は、漸次に集注的絕對權の確立に導かれて、そこに十七世紀といふ、王權の保護の許にブルジョワジイ隆盛に開花せしめたる古典文藝の完成の姿を見する時代が展開せられんとするに到るのである。

七、十七世紀の文藝

王權繁榮期の文藝——絕對權とブルジョワジイ——古典文藝——ルイ十四世の治世——理智の統制と古典美——アンリ四世期の文藝——ルイ十三世期の文藝——ルイ十四世期の文藝——その代表者等。

十七世紀はアンリ四世、ルイ十三世、ルイ十四世引きつゞいてブルボン王朝最隆盛の時代である。但しアンリ四世（在位 1589—1610）の時代は詳しくは兩世紀間の中間時期として見るべきである。けれど「メニペの諷刺」に示さるゝ如く、當時内亂のために都市も田園も荒廢せられてゐたものを、彼の治下で統一し興起せしめ、農村へ、都市の工業へ力を注ぎ、巴里をば中世紀以來初めて王家へ回復せられたる首都となし、ルウブル宮の庭へは桑を植ゑつけ、リヨンの市には製絲場を初めて創設せしめ、養蠶と製絲とを奨励し、政治的には、いまだ十分とは言へないが、地方貴族をば次第に馴致し、

絶対権をも確立せしめんとし、文學的には一時西班牙文學の影響は受けはしたものの、マレルブ、バルザック、アルデイの如き人々が輩出して、世紀初頭を飾つてゐるのである。ルイ十三世（在位 1601—1643）の時代は、猶ほ引き續き地方貴族の反抗も時には現はれ、新教徒が國際的に對抗する勢ひをも示したけれど、宰相ルイシユリウ（Richelieu, 1585—1642）の壓倒力は遂に總てを絶対権の下に屈服せしめ、専制主義（Despotisme）は法則的にも確立せしめらるゝに到つたのである。彼はその専制統一の施設をアカデミーの創始によつて學問上にも現はさんとしたのである。デカルトの哲學、コルネイユの劇、ニコラ・プウサエン（Nicolas Poussin, 1594—1665）の繪畫、パスカルの思想の如きこの時代の所産であり、アカデミーの公設的なものに對して生じたる私設の幾多のサロンはまた當代の文學を作り出す搖籃地となつたのである。

ルイ十四世（在位 1643—1715）の少年時は宰相マザラン（Mazarin, 1602—1661）の獨宰權に左右せられてゐたのであるが、そしてその期間に封建貴族の最後の騷亂ラ・フランド（La Fronde）の亂があつたのであるが、それ以後は全的絶対権を一身に具現して、在住七十一年間、政治、財政、軍事、宗教、文藝藝術の中心に身を置いて、太陽王（Le Roi Soleil）として君臨したのである。而して彼の治政と共に中世紀以來各王家が渴望したでもあらう絶対統一權はその頂上に達し、彼の死と共に、その王權は徐々に下降衰勢に向ひ、遂に彼の死後七十八年にして、ルイ十五世より十六世に到つてその王權は根柢より轉滅せしめられたのである。即ち十七世紀はこの王權繁盛の時期であり、十八世紀はその下降衰亡の時代である。

ルイ十四世は、「國家は即ち自分である」（“L'Etat, C'est Moi”）と信じた。佛蘭西は自分の領土であり、その土地と人民との上に絶対権を持つた。國家の財政は王の財政となつた。軍事政治は勿論宗教までも彼の信仰が一般を支配した。プロテスタンは一隅に窮束せしめられジャンセニスムは禁ぜられた。既に創設せられた佛蘭西翰林院の他に、文藝、科學、音樂、繪畫、建築各種のアカデミーは創置せられ、當代の力と美と技巧とを集めたヴェルサイユの宮殿が出来ると共に、此處は當時の畫家音樂家詩人劇作家等の集合中心地、表現綜合の殿堂となつた。そしてルイ王はその總てに互つて支配者たるの職能を發揮する事を何よりの悦びとした。又その職能を盡くすとしては、最も適した人でもあつた。それではその時代の文藝表現に身を委せたのは如何なる種類、如何なる階級の人々であつたであらうか。當代に於いて少數の王族を除いて、僧侶階級の人々は凡そ十三萬人、封建貴族は凡そ十四萬人、これ等が特權階級である。そして所謂第三階級（Les Tiers Etats）に屬するものは凡そ二千五百萬人であつた。そしてこの第三階級の上層を占めてゐたのが即ちブルジョワジイである。このブルジョワジイは、(1)自由職業として判官、辯護士、醫者、教師、(2)實業事務家として公證人、土地管理人、各種の書記、(3)財政官吏、收稅吏の類、(4)金融、商業、産業に關する主要なる地位に立つもの、即ち知識階級的職業の一切、財政及び商産業に關する主要地位一切を占めてゐたのである。そしてこのブルジョワからして金權によつて新たに貴族の階級に成上る者も生じた。

貴族僧侶等の特權階級に對して、智力金力に由つて對抗して行くブルジョワジイの階級、それに王權は實質的には依存し、王はこの階級を庇護することによつて特權者共を押へようとしたのである。これは中世紀以來の傳統である。そしてこの實質的な有力な階級が當代の文藝表現を他の凡ゆる智的表現と同じく有力に開展せしめた時、貴族僧侶等からは反抗壓迫が加へられたのも當然の順序であり、またルイ王がその文藝美術を出來る限り擁護發達せしむるに意を注いだといふ事も歴史的必然であるのである。

このブルジョワジイの下に大多數の農民がゐた。更にその下には土地と共に所有權の移動する農奴(Serf)がゐた。これは王朝末期、十八世紀の末にでも凡そ十八萬人は殘存した。彼等は姓を持たず、ジャン、ピエル、ポオルなどと呼び捨てられ、戦ひに出ても賞せられず、死んでもものの數には入れられなかつた。この農奴をもこめての大多數の農民は、しかし十七世紀の文藝には殆ど姿を見せてゐない。取材としてさへも扱はるゝ事は殆どなかつた。

絶對王權の伸展の姿、それと當時の實質的支持者たるブルジョワジイとの連衡の間から生れ出て、麗典雅に開發したのが即ち十七世紀の古曲文藝と呼ばれるものである。それ故この文藝の特色は、盛り上げる勢ひとそれを抑制する力との均衡ある調和の姿、理智を通じての普遍性の表出、歴史的には上代のヘレニスム(Hellenisme)の美と、中世紀傳來のヘブライスム(Hébraïsme)の情緒とが、十六世紀といふ上代文藝復興の一世紀間の涵養交錯の期間を經過して、渾然たる融合の姿を見することとなり、

當代の政治軍事の組織が上代羅馬の專制形態を模することを事としたと同じく、文藝は材を上代に取りながら、實は當代の情熱慣習をその中に吹き入れて、二重の複線美を發揮してゐるのである。ヴェルサイユ宮殿の後庭に古代の神話が具象せられ、ルイ十四世が羅馬の皇帝の服裝で得意な姿を見せてゐると同じく、ラヌイヌの悲劇は主題を上代に置いて、實はルイ王宮内の生活を具現してゐるのである。

この隆盛期の代表者は、當代の文學理論及び批判の權威者、ボワロオ(Boileau, 1636—1711)であり、當代社會及び人生批評家として喜劇にその才能を發揮したキリエール(Molière, 1622—1673)であり、自然詩人にしゝやはり當代の時相を諷してゐるラ・フォンテーヌ(La Fontaine, 1621—1695)であり、純美の悲劇詩人ラヌイヌ(Racine, 1639—1699)であり、宗教と歴史に於ける熱意の雄辯家ボスュエ(Bossuet, 1627—1704)などである。ルイ十四世の末期に到ると、既に「新舊の争ひ」などが現はれて、時勢の推移が徐々に窺はれ、その時期を代表してはシャルル・ペロオの如きフェヌロンの如き、またラ・ブルユエルの如き一種の時代批評家、また有名な「回想録」の筆者サエン・スイモンの如き人々が出づるやうになるのである。

前世紀のラ・プレリアドの一派は、詩の理想をかゝげ、詩の種類を豊富にし、韻律に多様の變化を加へ、語彙を豊かにした。けれどそれと同時に、古語、死語、異邦語が亂雑多様に取り入れられて、韻律もまた多種ではあれど正確を缺き、不自然を免れなかつた。これに對しては、十七世紀といふ一般

的統制時代が来ると共に、その方面に一大整理がなされねばならなかつた。詩歌に於けるこの混沌へ秩序を興へ、平明共通を姿とした正確さを整へしむる役目をまづもつて演ずるために出現した人、それがマレルブ (Mallherbe, 1533—1628) である。「遂にマレルブ現はれたり」(“Enfin Mallherbe vint” — Poésie) といはれるのである。

詩人マレルブは皮肉なほどにまで平明である。第一に彼は語彙を整理し、古語死語を禁じ、造語構成語を廢し、意義不明な曖昧な語を徹せしめ、明確な文調語法を何よりも尊び、規矩選擇を嚴重にし、言語の質實性を尙び、不用、卑俗な譬喩を破り捨て、純正な興趣を喚起することを目標とした。次に詩の韻律を極めて嚴正豊富にし、母音の重複を避けしめ、意義の踏襲重複を禁じ、句切りを正し、押韻を豊かならしめた。彼の作詩は個人的な私的な情緒をうたつたものは極めて少く、いつも共通な興味ある題目を選び「死」とか「平和」とかいふ如き萬人に遍き主題をうたふ。例へば、

「春、薔薇の咲き出づる如く、
平和のなかに悦樂は生る。
平和は市々を裝飾し、
耕地に豊かなる收穫を興へ、
やがて、嚴しき法則もて、
至上の權を支持し、

王者の頭上に

王冠をして固くすまはしむ。」

(千六百年、攝政期の至福なる成功を祝ふと、マリイ・ドゥ・メディスニスへ獻ずる賦)
平明で力強く 普遍的である。それ故時には雄辯となり、また雄渾な氣風を喚發する。この非個人的な客觀的な詩風は、佛蘭西人の明確 秩序、共通を尙ぶ傾向の最も好き現はれであり、この意味で、マレルブもまた純眞な佛蘭西の詩人、古典時代の代表者の一人であるといふ事が出来る。かういふ非個人的客觀的な詩風は、佛蘭西の詩歌の系統に於いて、純抒情詩——個人的情緒の自在な解放の詩歌と、交互に錯綜して 時代々々の表現相を構成して、明瞭な分布圖を織り出してゐるのである。(マレルブの「詩歌」(Odes, Stances, Chanson, Sonnet) 及びアンソワート版 “Grands Ecrivains de l’Ecole” のマレルブ評傳参照のこと。)

マレルブの直系としては、メエナル (Maynard, 1582—1646) と、ラカン (Racan, 1589—1670) とを挙げねばならぬ。

然るにこのマレルブ一派に對抗して、前代のロンサル一派を繼承し、十六世紀的な自由奔放を飽くまで主張する人々がある。マテュラン・レニエ (Mathurin Régnier, 1573—1613) を主領とし、テオフィル・ド・ヴィオ (Théophile de Viau, 1590—1626) サント・アン・トボン (Saint-Amant, 1594—1661) 等の人々である。マテュラン・レニエはラブレエ系の人である。人間社會へ身を従はしめようとするは、徒に苦惱の生

活を送る事である。我々の自然性に従つて人は誤ること稀れであると彼は主張するのである。即ち拘束統制を彼は寧ろ退けるのである。従つて彼から見ればマレルブ一派は窘束を強ひるものの如く考へらるゝ。それとは反對に自在無碍こそは藝術の妙諦であると観するのである。それ故、彼は人間が自然性を占めて、強ひて社交生活を作り出し、その中に凡ゆる悪を讓成し、無用なる痛苦を感じてゐる偽善を指摘せずにはゐられなくなるのである。レニエはこの意味で社會批評家の素質をば十分に備へてゐる。特に僞信者を描き出す點は、まさにモリエルの前驅をなすものである。その性格は前代のラブレエを思はしめ、その思想は後代のルウソオを聯想せしめ、その觀察的的確はまさにモリエルの途を拓いてゐるのである。

「この高名なるレニエこそは、モリエル以前に、人間の性格風習を最も好く知つてゐた佛蘭西の詩人であることは萬人一致して認むる」と、ボワロオは言つてゐる。

まさにその通りである。このレニエの傑作は「諷刺詩」(Satires, 1608, 1609, 1612)である。そしてこのマレルブ、レニエ二大詩人の相反する傾向を共に併せて、しかも一層大きく渾然たる統制に具現し、詩に、文學理論に、批評に歐羅巴文の中心權威の如く君臨したのが即ち後のボワロオその人である。ルイ十四世の統制を文藝へ反映した相である。

佛蘭西の散文は、十六世紀に於いては、ラブレエ、アミヨ、モンテエニ等の大才が輩出して、自由な

表現をなしたのであるが、十七世紀に入ると共に、この散文の方面には統制的傾向が現はれて、正規の傳統を作らんとする動きが生じて來た。その動きを第一に示したものはバルザック (Balzac, 1804—1850) である。彼の作品は書翰篇、對話篇、論議篇から成立つてゐる。十七世紀に於いては書翰は、一片の私信ではなく、それが公開的な一般的性質を帯びてゐるのである。書翰が一種の議論或ひは意見の公開の要具となつてゐるのである。受取つた方はそれをサロンに於いて公開し、人々はそれについて種々意見を述べ、書く方も當然公開せらるべきものとして最初からその考へで書いたものである。されば、バルザックが、書翰で或る人の死を弔ふとすると、その弔慰は直ちに死に對する冥想に變り、論議に轉ずる。一つの特殊事象が、直ちに一般的性質を帯ぶるやうになるのである。彼の議論篇の代表作の一つ、「君主論」(Le Prince) は、ルイ十三世に對する頌辭ではあるが、同時に、一般的な政治論であり、更に「ソクラト・クレティアン」(Socrate Chretien) では、クリスト教の思想を論じ、いつも共通普遍を眼目とした。そしてこれと一般的に公開的に、或る一定の人々の間で高聲に讀まるゝものと最初から思つてゐるが故に、そこに一種の雄辯の要素が加入せらるゝ。明晰でなければならぬ、反覆は避けねばならぬ、と同時に、相當に具體的なポルトレが描き出さるゝ必要もある。バルザックの人物描寫に至つては、大コルネイユすら賞讃してやまなかつたものである。

書翰文學 (Littérature Epistolaire) について、ついでに附加して置く事にする。バルザックに次いでヴォワテュル (Voiture, 1598—1648) が、更にセヴニエ夫人 (Madame de Sévigné, 1626—1696) が十七

世紀の類多き書翰文學者等の代表の如き觀を呈してゐる。特にセヴィニエ夫人が二十五年間、主としてその娘に書き送つた千五百通もの手紙には、教訓も、當代の歴史の場合も、文藝批評も、自然の風光も描かれてゐる。表現は自然で的確で、變化自在で、まさしく書翰文學の古典的代表である。政治家、宗教家、文藝の士、その他の多くの女流さらに國王までも皆な優れた書翰文學者である所以は、一つは、前にも言つたサロンに於けるその書翰の公開が必然的に導いた現象であるけれど、最一つは千六百一十七年に初めてポストの組織が立てられ、大都市には郵便局が設けられ、日を定めて郵送がなされ、至急便普通の區別もあり、巴里から南方プロヴァンスへは五日間、プロヴァンスからブルターニュへは十日間といふやうな日限であつた。この組織が新たに人々に書翰の往復の興味を興へたものである。殊にセヴィニエ夫人の如き、娘が南方プロヴァンスの總督の妻となつて行つてゐる場合の如きは、最も好都合であつたに違ひない。この書翰文學は次の十八世紀になると、論争の世紀であるだけに、寧ろ層盛んであつたとも言へる。ヴォルテールとフレデリック大王との往復の書翰などが顯著な一例である。十九世紀になると書翰は全く私信となつて、文獻としては大切でも、文藝の一種類とは見られなくなつた。

この書翰文學が、十七世紀では、パスカルの宗教論議「レ・プロヴェンシアル」(Les Provinciales)の表現形式となつて存続し、十八世紀ではモンテスキューの「ベルシャ人の手紙」(Les Lettres Persanes)となり、さらにルウヴオの「新らしきエロイズ」(La Nouvelle Héloïse)の表現形式にも用ひられてゐるのである。

バルザックに初まる佛蘭西の十七世紀の散文は、哲學者デカルト(Descartes, 1595—1650)によつて一層明瞭的確な表現を持ち、正視の傳統を打ち立てるに到つたのである。近代哲學の始祖といはるゝデカルトは、その正確な、素直な、明晰な、力強い文調で、佛蘭西の散文を到着すべき大切な點へ導いた人である。彼は從來の哲學者等が、アリストオトを唯一の權威と頼み、そのみ纏ひつくのを嘲り、先づもつて自己に立ち返つて考ふべきを説き、宗教の範圍と科學の範圍とを截然と區別し、思考存在の本質を理性(La Raison)となし、この理性によつて思考すること、それが人間の存在を示すと説く、「我思考す、故に我は存在す」(J. Pense, donc je suis)。この理性こそは唯一我々に確實な眞理を啓示するのである。但し書物の確實性を究むるには、

(1)斯くかくと明確に知るまでは、何事をも眞實としては受取らぬこと。(2)如何なる障壁でも難點でも、それを要する限りまた爲し得らるゝ限り微細に分解すること。(3)最も單純な、最も知り易い事物から始めて、思考を順序に排列すること。(4)何物をも落さず、何物をも省かなかつたと確知せらるゝやうな全列挙及び一般的調査をすること。

この嚴格な方法によつて、數學的な確實性を究むることが出来る。彼の「方法論」(Discours de la Méthode)は、この分析、解剖、排列、綜合の働きによつて、人々に思考の内容及び形式に互つて、その明瞭と確實とをいかに把握し、いかに表現すべきかを教へたものである。十七世紀の秩序と論理

との要求、解剖分析と共に直ちに綜合統一して行く力、これがデカルトによつて最も好く代表せられ、具現せられ、教へられもしたのである。デカルトの思考力とその散文の表現形式とはまさに構成的、正確的、理智的な佛蘭西散文の特質を十分の意味で發揮してゐるのである。

十七世紀の初頭から幾多のサロン (Salon) なるものが、當代の貴族等によつて開かれた。これが當代の文藝を發育せしむる大切な搖籃地となつたのである。初めアンリイ四世の宮廷に於いて、各州の人士が語り合ふ言語が雜多で、風習も殺伐であり、封建の遺風が存続してゐたのを、矯正し馴致せんとする必要から、一種の社交機關として造られたのがサロンなるものである。其處では新時代の好尚を高め、善き言語動作をつくり出すを目標とし、儀禮の修得場であり、機智を戦はす會合ともなり、やがて當代事相の批評がなされ、人物月旦、所謂ポルトレが描き出され、知名の士の書簡が朗讀せられ、次第に當代の文藝が第一にそれ等の集合の中から醸成せられて來るやうになつた。詩作は何處よりも眞先にこの會合で朗讀せられ、劇作は上演せらるゝ前に此處で聴き手を見出した。つまりこれ等のサロンなるものは、當代社會の上部構層の端的な集合であり、直接に文藝を凝化し、具體化せしむ可き一團の大氣を形造つてゐたのである。然かもそれ等のサロンの主人物は、當代の才氣煥發の女性等であつて、中世紀に於いて城内で騎士等の尊崇の對象に當てられ偶像化せられてゐたものが、このサロンの中では初めて女性としての情熱も機智も縦横に發揮して、殺伐な封建遺族を平和な宮廷の貴顯紳士

に馴致する役目を演ずるやうになつたのである。

それ等のサロンの主なるものは、ランブウイエ侯爵夫人とその娘等とが中心となつたランブウイエ館 (L'Hôtel de Rambouillet) であり、女流作家スキュデリイ (M^{lle} Scudéry) のサロンであり、その他幾多のサロンが或ひは貴族的、或ひは一層ブルジョワ的な性質をもつて開かれてゐたのである。ランブウイエ館の如きは千六百年から五十年間も引き續き存続せられたもので、ルシュリュウの如き政治家も、また僧官も時には將軍等も、更にマレルブ、バルザック、ヴォワテールの如き文藝家も、コルネイユの如きも皆な此處へ集つて作品を朗讀し批評し合つたのである。

併しそれ等のサロンは最初は上乘な共通な言語動作を作り出し、當代の適當な表現を作りいだすに初まつたのが、争つて新奇を求め、機智を闘はさんとするはいたると、一種の氣取つた生活様式がその中から生じて來るのである。それをラ・プレシオズイテ (La Préciosité) といふのである。その社交婦人等をプレシオズと呼ぶのである。文藝上の表現に於いても、持つて廻つた長たらしい譬喩的文句の *Periphrases* と呼ぶもの、先人や或ひは何人かの言語をもちつて使ふ *Parodie* といふもの、それ等はこのサロン文藝の特色となるのである。これ等を總括してグロテスク物と言ふことが出来る。グロテスクといふ表現は、つまり表現すべき要求は多々あれど、いまだ適當な確な表現相を發見し得ないで、力餘つて形の整はざる場合の表現を言ふのである。表現欲が弱つて、表現形式を整理し得ざる場合はデカダンとなる。グロテスクは反對の場合である。これ等十七世紀前半のサロンから直接生れたグロ

テスク文藝は、輕妙奇智に富んだ詩歌と、シャプラン (Chapelain, 1598—1674) が當代のその代表詩人であり、外國の影響と中世紀傳習との物語、その中ではスキュデリイ (Georges de Scudéry, 1601—1663, Madeleine de Scudéry, 1607—1701) 兄妹の幾多の物語がその代表であり、更に當代の時相を示すスカロン (Scarron, 1610—1660) の「滑稽物語」(Le Roman Comique) の如きは好箇の所産である。

これ等のサロンの生活、及びその社交婦人等は、モリエルのためには幾多の社會批評劇の材料として採用せられ、彼の喜劇の中で好箇の資料として生かされてゐるのである。そしてそのサロン物の氣取つた物言ひ、(Précieux) 卑俗横溢な表現はボワロオ (Boileau) によつて攻撃せられ、是正せしめられ、やがて純正な佛蘭西古典の表現に誘致せらるゝやうになつたのである。この幾多のサロンはルイ十四世の治下では、ルイ王宮内が一大綜合サロンの如き形を呈して、總ての文藝藝術はそこを源泉地となす如き觀を見せたのであるが、併しサロンなるものは滅絶したのではなく、十八世紀に入ればまた特殊な繁盛をなし、革命以後に到つても別種な種々の文藝の會合と變形して持續して來てゐるのである。

それ等のサロンとはまた別種な、詩人シャプラン等が集合してゐた會合を、次第に公的な組織にして、ルシユリュウの統率の下に、最初は二十七人或ひは三十四人の會員を最後に四十人の不滅の會員に構成して、學者、文藝家、政治家、雄辯家凡ゆる方面の堪能の士を集めて、出來上つたのが佛蘭西翰林院 (L'Académie Française) である。言語の統一純化、文藝作品の審査を目的としたもので、これは今日までも持續してゐる。そしてルイ十四世の治下には、その本源のアカデミーの他は、音樂、繪畫、彫刻、建築、總ての方面のアカデミーが創設せられて、文藝藝術の研究及び表現の組織立つた會合が整然として形づくられたのであつた。

但し上述したサロンが直接作り出した文藝の種類は、主として物語 (Le Roman) と叙事詩 (Epique) であつたといふ事が出来る。この二種類はいづれも當代の正規の文藝の表現相とは考へられぬが、上層階級に愛好せられた種類ではあつたのである。有名な「劇の應用論」(Pratique du Théâtre) の著者、アベ・ユリヤック (Abbé d'Aubignac, 1604—1676) は、當時の物語を三様に區別してゐる。(1) 歴史物語、(2) 想像物語、(3) 風習、及び人物描寫物語である。世紀初頭に現はれたオノレ・ドゥルフェ (Honoré d'Urfé, 1563—1625) のアストル (Astrée, 1610—1624) の物語は牧歌式のもので、アンリ四世宮廷の戀愛生活が田園的色彩で現はされてゐるもの、ボワロオとてもこの作をば推賞してゐる。次はカナリイ群島を出發點とした種々の冒険と戀愛譚とでやはり當時のサロンの人々を悦ばしたゴンベルヴィユ (Gomberville, 1600—1674) の「ポレクサンドル」(Polixandre) である。ドゥ・ラ・カルブルナド (De la Calprenade, 1610—1663) の三つの作、「カサンドル」(Cassandre)、「クレオパトル」(Céopatre)、「フィラモン」(Pharamond) の如きは、後代の、デュマ・ペエルを思はする如き作品である。併し、この傾向の一代の代表者は、女流のマドレ・ヌ・ドゥ・スキュデリイである。彼女の九十餘年の生涯は、殆ど十七世紀そのものを具現する如く、才氣煥發、批評辯舌の鋭さ、比類なき才媛である。土耳其に取材した「イ、

「ブライム」(Brahim)、波斯の歴史からの「ル・グラン・シリウス」(Le Grand Cyrus)、羅馬史からの「クレリ」(Clélie)の三篇は歴史物語の傑作である。

以上の歴史物語に對して一種の世話物風の物語がある。これは勿論サロンの中から生れたもので、その最初の作品はシャルル・ソレル (Charles Sorel, 1599—1674)の「フランスイオン」(Francion)であり、やがてスカロンの「滑稽物語」(Roman Comique)である。スカロンはモリエールに先立ちモリエールを準備した人、彼の妻は彼の死後ルイ十四世の寵妃となつたメントノン夫人 (Mme de Maintenon)である。この物語は二人の戀人が一人の戀敵から脱れ喜劇役者の群に投じ、田舎廻りをやりやがて完全に敵の追究を脱して結婚する徑路を語つてゐるのである。滑稽突梯、誇張的表現に充ちてゐる。次はフェルティエール (Furtere, 1620—1688)の「ブルジョア物語」(Roman Bourgeois, 1666)である。フェルティエールは、ラ・フォンテヌや、ボワロオや、ラスィヌの友人であり、この物語は表現の調子は低いが當代の生活相を見せてゐる點は最も現實味を持つてゐて、ラスィヌの喜劇「訴訟狂等」には大切な資料を供してゐるのである。かうした世話物の中で、單純な正規な古典文藝の散文物語。しかも心理解剖の精緻な働きを見せて、「アストレ」以上の歴史物が五卷或ひは十卷との長篇であるのに對して、極めて簡潔で整正の姿を見せてゐるのが、ラ・ファイエット夫人 (Mme de la Fayette, 1634—1693)の「クレヴ公爵夫人」(La Princesse de Clèves, 1678)である。夫人は最初ランブイエ館へ集つた一人であり、後には自分でサロンを持ち、セヴィエ夫人や、ラ・フォンテヌ等が其處へ集つたのであるが、夫人の親友

は「格言」(Maxime)の著者、ラ・ロシュフコオ (La Rochefoucauld, 1613—1680)である。この友人の簡結明快な文調が夫人の作品に影響のない筈はない。この作は時代をアンリ二世にしてゐるが、ルイ十四世の王宮内の情事の心理描寫を明晰透徹した、古典文藝完成期の散文に於いて示したものであり、從來の物語が新形式の小説 (Nouvelle) に轉ぜんとする契點を示すものとも見られ、また飽くまで客觀的描寫ではありながら、その中に作者その人の心理過程が盛られてゐるとすれば、後代の告白小説の始源とも見られ、兎に角十七世紀の散文物語の白眉とすべきものである。

叙事詩については、當時の詩學に貢獻したペエル・ボスス (Père Le Bossu)が「叙事詩篇」(Traité du Poème Epique)で言つてゐる叙事詩とは「或る重大な行動が、眞實らしき、興味豊かな、驚異に充ちた手法で、韻律を備へて語らるゝものである」と。この眞實らしき (Vraisemblance)、興味豊かなこと (Diversissement)、これは共に十七世紀文學が一般的に求めた特色であり、驚異 (Merveille)といふ事は叙事詩には何よりも大切な要素としてゐる。然るにこの驚異には二様ある。(1)は上代神話的即ち異教的驚異であり、(2)はクリスト教的驚異である。この二様の驚異の交錯の間から十七世紀の叙事詩は生れてゐる。その主なるものは、ジョルジュ・スキュデリイのゴウトの王アラリックの羅馬征服を歌つたもの、二種の驚異の混淆した「アラリック」(Alaric)であり、次はペエル・ルモワヌ (Père Lemoyne, 1602—1671)の「聖ルイ」(Saint Louis)である。第三はサン・ソラン (Saint Sorlin, 1596—1676)の「クロヴィス」(Clovis)である。最後にシャプランの「ラ・プセル」(La Pucelle)を擧げる。シャ

ランの權威はボワロオ以前一代を壓倒してゐたものである。「ラ・ビセル」は勿論聖ジャンヌ・ダルクの一生をうたつたクリスト教的驚異の表現である。

ボワロオは寧ろクリスト教的驚異の文藝的表現をば好まなかつた。彼はラスイヌと同じく嚴格なジャンセニストであり、彼は神の力を惡魔その他の異教的魅力と對抗せしめて詩作に使用するを欲せず、文藝には専ら上代美の啓示を求めたのである。その點からして後の有名な「舊新の争ひ」も生ずるのであるが、事實としては十七世紀のクリスト教的驚異の叙事詩は文藝的價値の高きものを示すに到らず、この兩様の驚異もまた劇作中に添入して、情熱の解放と共に渾然たる成形を整ふるにいたつたのである。

十七世紀の文藝がその廣大な集大成の姿をとつたのは、散文物語ではなく、また叙事詩でもなく、綜合藝術たる職能を十分發揮すべき劇文學であることは、政治上經濟上の組織が統制の姿に導かるゝことが一層明かになるにつれて、顯著なものとなつて來るのである。それを第一の統制の姿、古典悲劇の最初の綜合形式に於いて示したものはピエル・コルネイユ (Pierre Corneille, 1606—1684) である。彼以前に於ける十七世紀の劇作は、文藝復興期の引き續きと、また伊太利劇、西班牙劇をも取入れ、歴史も傳説も物語も材料とし、悲劇も喜劇も田園劇も、様々な種類を交へて、その文調も洗煉せられず、劇作の方則、アリストオトの「詩論」に基づく「三一致の方則」(Règles des trois Unités)の如きも前

世紀から屢々論じ出されてはゐても、いまだ十分に守られず、サロンに集合した人々の試作は多くあれど、これもいまだ正規の廣大な表現相を持つにいたらず、その中ではアレクサンドル・アルディ (Alexandre Hardy, 1569—1632) の如き、テオフィル (Théophile, 1590—1626) の如き、ラカン (Racine, 1589—1677) の如き作家が出で、やがてメイレ (Mairet, 1604—1686) はその作「ソフニスプ」(Sophisme, 1634) に於いて見ると正規合法の作風を示すにいたつたのである。

コルネイユの「ル・スィド」(Le Cid, 1635) は佛蘭西の古典悲劇に明確な出發の第一線を劃したものである。これより以後約二百年の間、ヴィクトル・ユゴの浪漫劇の宣言の現はるゝまで、佛蘭西古典劇の大系はその形體を確立したといふべきである。それだけ當時の彼の競争者、反對者、替同者等がこの作の中に置いて相争ひ、アカデミーの審判を求むる事ともなつたのであるが、それはつまり當代の文藝的時代表現を確立するための努力であつたのである。コルネイユはそれから喜劇八篇、悲劇二十幾篇を書き、晩年は若き天才ラスイヌの名聲に壓せられて郷土ルウアンの市に引籠つたのであるが、彼の全作を貫いてゐるものは、強き意志の行使である。彼の作中人物はその強き意志をもつて己が置かれてゐる環境と一致せしむる。寧ろその環境を支配するためにその強力意志に行使せらるゝのである。環境を支配するための強力意志の行使表現と言つてもよろしい。これは主としてルイ十三世の治下に於ける強權確立の文藝的反映である。

デカルトはいふ「自分は、我々自身を尊重する正當な理由を我々に與ふる唯一のものを、我々のう

ちに見出す。それは即ち我々の自由意志 (Libre-Arbitre) の行使と、我々がその意志に對して持つ支配力とである」と。

コルネイユの作中人物は皆なこの自由意志の行使者である。その信ずる處に従つて動ぜず、意志を行使することその事が即ち悲劇相を構成する。

「ル・スイド」のロドクイグでも、シメヌでも、またオラスでも、ボリウクトでも、ニコメッドでも、コルネイユにあつては、この強力意志行使の場合では、殆ど男女兩性の區別が判然しないほどである。それだけ異常時の緊張したる意志を示してゐるのである。難局を重ねて更に意力は一層増して行く。我から進んでその難關を求め、作り出しさへするのである。

それ故、コルネイユ劇では、この異常事をば何人にも諒解が出来、納得の行くためには、嘗て現存した歴史的事實を取材して來る必然の要求が生ずる。そこでコルネイユが好んで選んだものは羅馬の歴史である。彼自身も史實に確かなることを誇りにしてゐた。これは歴代の佛蘭西王が羅馬的統制を要望してゐた欲求とも一致する點である。羅馬の歴史及びクリスト教の信仰、それに強力意志の行使を加ふる事によつて、コルネイユ劇は構成せらるゝ。

彼はこの劇作の他に、「劇詩論」「悲劇論」「三一致方則論」に於いて劇作に關する理論を打ち立ててゐるのである。併し彼自身が望んでゐる如き理論の具現は寧ろ後輩ラスィヌの悲劇に於いてこそ完全に示されてゐるのであつて、ラスィヌは論せず、議せずして自づと完璧の姿を備へてゐるのである。そ

こに時代の相違を認めずにはゐられぬ。コルネイユに前後しては、西班牙劇の影響を多く持つロトルウ (Rotrou, 1609—1650) 當代は兄よりも好評であつたトオマ・コルネイト (Thomas Corneille, 1625—1709) 及び樂人リュイと共に佛蘭西へオペラを創始して、全国的に愛好せられたキノオ (Quinault, 1635—1688) 等を擧げねばならぬ。

前世紀末の宗教の争ひは、カトリック教徒とプロテスタン派との間に行はれたばかりでなく、同じカトリックの中でも一層頑強な武的な教權擁護派ジュジュイトと、寧ろカルヴェンの精神に近くはあれど一層根本的に懐疑的な、厳格な原罪論者、神の聖寵を唯一の頼みとするジャンセニストとの間にもなされた。ジュジュイトが官憲を頼みとするが故に、ジャンセニストの勢力が強まれば、これに對する迫害は一層加へられた。佛蘭西に於けるジャンセニストの中心地は、シュウルウズの谿間、ボオル・ロワイヤルであつた。此の地は哲人パスカルが默想の場所ともなり、終焉の地ともなり、同時に天才悲劇詩人ラスィヌの出發搖籃の地ともなつたのである。

パスカル (Pascal, 1623—1662) は最初科學に、特に數學に秀で、その天才を發揮し、後、父の負傷、自己の危険、姉の感化などよりして、終にボオル・ロワイヤルへ籠り、「田舎人への手紙」(Provinciales) を書き、「冥想録」(Pensées) を書きつゞけてゐる間に病苦の一生を終つたのである。彼は極めて嚴正な科學的精神を持つてゐると共に、また極めて微妙な感知性を備へてゐた。それ故テカルトの如く整然たる哲學をば立てず、寧ろデカルトをば、「神殿へまでの鋪石は敷けど、その神殿へは參じ得

ざる人」として觀じ、科學と詩とを通じて直ちに神に面接した人である。彼の「田舎人への手紙」は十八通の書翰から成り、神の聖寵を論じて、ジュゼイトとジャンセニストの態度を明かにし、やがてジュゼイトの教義に駁論を加へ、最後に自己の神學上の態度を明かにしてゐるのである。

彼の「冥想録」は、晩年完成せんと努力した「クリスト教の辯明」(Apologie de la Religion Chrétienne)が書き上げられず、断片的な記録となつてゐたものが、發見せられて編録せられたものである。

彼は言ふ「宗教は決して理性に反するものでないことを示めさねばならぬ」と。人間は偉大と卑小との不思議な混成である。「人間は自然の中にあつて何であるか。無限に對しては虚無であり、虚無に對しては全であり、無と全との間の一境界である。」しかもこの人間は自然に對して思考するといふ優越を持つ。「人間は自然の最もか弱き一莖の蘆である。しかも物を考ふる蘆である。」この不思議な人間、それを十分究明すること、それは哲學では不可能である。唯一解答を與へ得るもの、それはクリスト教である。若し人間が罪を犯さずば無智の状態に止まらん、けれど罪にのみ沈湮するならば、眞實も祥福も解し得られまい。宗教は理性に反するに非ず、その理性に解答を與ふるものである。この信仰に達するにはたゞ心情だけでは足らぬ。信ぜんと欲しなければならぬ。

パスカルの十七世紀に於ける地位は、モンテニエの前世紀に於ける如し、けれどモンテニエは人間の弱さを指示して、それを眺めてゐる如く、パスカルはその弱き人間と共に嘆き、全意を盡くして神に求む。彼は科學に徹して宗教に入り、その純眞の詩情は明快素直に人の心情に迫らずには置かぬ。

科學と藝術の單純性を最も好く示してゐる古典の代表者である。

ルイ十四世の渾然たる統制期は、文藝、美術、音樂の凡ゆる方面に互つて、敏活豐潤なそして統一あるしかも残るところなき表現を組織立てた時代である。哲學に科學に宗教にその統一組織は、政治時制にそれが及んだと同じくなされたものであり、大衆の歸信禮拜を招致し、熱意に充ちた説教者の雄辯は、信仰と博學とを交へて、大衆の上に叫ばれたのである。十七世紀に於いては抒情的要素は、この説教者の雄辯の中で渙發し消散せられてゐるものと見らるゝのである。その代表者はボスエ(H. Bossuet, 1627—1704)である。彼の説教集、追弔説教集、及びその著「世界史論」(Discours sur l'Histoire universelle)、「新教分離變遷史」(Histoire des Variations des Eglises protestantes)とは、彼の熱意と雄辯とを示すものである。簡捷、崇嚴、明快、雄渾な文調はやはり十七世紀を代表するもの。彼と共にブワメルウ(Bouillon, 1632—1714)、マスカロン(Masaron, 1634—1703)、フロンニエ(Flecher, 1632—1701)及びマシーユン(Masillon, 1663—1742)の如き説教雄辯家が輩出したのである。同じ雄辯でも政治的な雄辯は革命期にいたらねば現はれては來ないのである。

人間力の最も旺盛な十七世紀に於いて、天然の魅力を最も多く身に感じた人はラ・フォンテヌ(La Fontaine, 1621—1695)である。森林をさまよひ、草に臥て小川の流れの音を耳にするのを樂む。但しこの自然詩人もやはり十七世紀人である。彼の身に感ずる天然の魅力は、動物をして人間の如く感知

し、人間の如く判断し、物を言ふことを思はしむる。即ち人間力で征服制御する天然でなければこの自然詩人にも感動は與へぬ。原始自然などはいまだ古典時代には開かれて居らぬ。彼の十二部から成る寓話 (Fables) は天然の原野森林を背景とし、舞臺としてゐるが、その中への登場人物は、獅子は國王らしく、牝牛は魯鈍な女性の如く、狐はずるく、猫は陰翳で、それ〴〵の本性を示しながら同時に、當代十七世紀の各階級、各種類の人間を代表表現してゐるのである。それが寓話であるだけにモリエール劇よりは、その選擇が一層自由である。獅子は王、虎や熊は貴族、狐は廷臣、驢馬は田舎者であり、幾多の人生喜劇の微細畫である。併し彼の寓話は多くが喜劇ではなく、多くは悲劇であり、また牧歌劇でもあり、時には思想詩でもある。しかも彼が友人モリエールの喜劇の上演を見て感じた語に「今や一步たりとも自然を離れてはならぬ」といふのがあるが、實際彼の文藝は一方に十分にレアリストであると同時に、他方は飽くまでデコラティブでもある。そしてモリエールがその劇作中へ彼以前の凡ゆる喜劇の要素を集成せしめた如く、ラ・フォンテヌは、上代希臘のエゾプ、バブリュスや、羅馬クフェドルや、また中世の寓話、さらに前世紀のアロオの詩及びラブレエの物語なぞからも材を取つてそれを生じてゐるのである。しかも彼は「エルキュールの腕もてなほ惡を撃つことは出来ぬ故に、寧ろそれを滑稽化せんと試みる」のである。彼もまた十七世紀の社會批評家的詩人である。「寓話」のほか、彼の有名な「小説集」(Les Contes) と幾多の詩と、三篇の喜劇とがある。

當代の批評の權威、古典文學理論の組織者、佛蘭西のみならず歐羅巴全體に亘つての中心を形成し

てゐるボワロオ (Boileau, 1636—1711) は、巴里人であり、巴里人の鋭い批評眼は先天的にも備へてゐる。彼はモリエール、ラスヌ、ラ・フォンテヌ等と同じくブルジョワ階級の代表者であり、當時權威を振つた貴族等に對しては儼然として對抗してゐるのである。彼の諷刺詩 (Satires)、贈詩 (Epigrammes)、詩論 (Art Poétique)、その他は、消極的には當代流行の俗詩人等及び、貴族の娛樂に供せらるゝ如きプレスノウの表現、卑俗道化誇張の文藝には然して攻撃と皮肉とを浴びせ、積極的には眞實の詩歌劇作の理想及び法則を明示してゐるのである。文藝の凡ゆる種類に亘つての理法を定め、特に悲劇は三一致の方則を守り、可能性と史實とを尊重すべく、喜劇は自然性と眞實性とを特質とすべきを唱導するのである。總てに亘つて共通基礎となるべきは理性であることを主張する。理性は上智 (Le bon sens) となり上智は正直さ (L'honnêteté) を導き、機智 (Esprit) はその適當な表現となつて輝く。上智は總てに極端を避けしめ、適度を求めしめ、眞實を追求せしむる。この眞實こそは初めて美なるものである。

“Rien n'est beau que le vrai ; le vrai seul est aimable.”

眞ならずば美ならず、眞のみぞ美まほしけれ。

されば藝術の目的は眞を發見せんがために、理性に由り、自然を觀察するにある。「それ故、自然こそは人々の純一なる研究目標であれ。」理性、眞實、自然、この三つはボワロオの詩論を一貫する精神であり、十七世紀文藝の精神である。但し眞實と自然とを求むるは何も古典文藝に限らない。ユゴオも「クロンウェル」の序の中で「自然と眞實とを探せ」といふ。しかしさうするには、自己自身であれ、

最早や先人等に求むるなといふ。然るに、ボワロオは眞實なるものは一つに永久である。上代の人々が我々を動かすのは、即ち彼等が自然即ち人間の本性を十分に究めてゐるからである。彼の示す模範に倚る事が即ち最も危険ななき眞實探究の途であると考ふるのである。

それ故ボワロオは上代の示した文藝理法を一層的に當代化して初めて裁斷批評の標準を確立し、純正簡結な表現、共通普通の擴大な興趣、極端を避け、特殊除外を避け、卑俗淺少を惡み、寧ろ道義をこそ文藝の内容として主張するのである。彼自身の諷刺詩にせよ、詩論にせよ、如何にも明晰で、その純白な素地へ畫趣的な描寫を浮ばせ、巴里人に特有な流るゝ如き機智の閃き、鋭い快い皮肉を漂はせてゐるのである。彼の律した法則は破れても、彼の示す、理性及び上智の働き、その明快な批評的精神は常に滅せざる光りを放つてゐるのである。

ボワロオの示す理法を具現して、古典文藝の盛時を代表する劇詩人は、モリエル (Molière, 1622—1673) とラスネ (Racine, 1639—1699) とである。

モリエルも巴里人である。彼にも批評的精神は生來のものである。八年間の田舎廻りの間に遠慮なき觀察と批評とをする習慣を持ち得たでもあらう。羅馬のルクレスや、自國のラブレエや、更にデカルトに反對した唯物學者ガサンディ (Gassendi, 1592—1655) の影響は、彼をして相當自在な人間性に從はしめんとする傾向を誘致したであらう。それだけ不自然なるものは彼には滑稽にも醜惡にも見えただであらう。極端なものはまた彼の上智がゆるさない。不自然と虚偽と極端とは彼の烈しい皮肉と嘲

笑との對象とならずにはゐられぬ。それを具體的に描き出し、突きつける。「若し人が人間を描かんとならば、實物描寫でなければならぬ」と彼は言ふ。具體的なればこそ効果がある。それだけ描破せられた連中の嚴しい攻撃が彼の一身へ八方から迫害となつて加へられて來るのである。併し彼の劇中へ生かす人物は、或る個々人ではなく、八方から觀察した特質を集めて、人間の共通性の典型を生かして來ることである。そこにモリエル喜劇の生命がある。

彼の描き出した當代の典型人物は、

- (1) 下僕とか小間使とか、田舎生れの下女の類、これが素朴で眞率で、時には滑稽で無作法でゐながら、不思議な自然性を發揮して上層階級へ、その動作言語で正面からの批評を浴せてゐる。劇中では第二位的人物でありながら、劇を生かすのは彼等である。
- (2) 様々な職業地位にゐるブルジョワである。暇人、商人、醫者、司法吏、物議りぶつた女達など、烈しい批評の對象とせらる。

(3) 貴族等、宮廷貴族、地方貴族、墮落した貴族、墮落させる貴族等、大方は嘲笑の目標に置かる。當代の各階級の人間が網羅せられてゐる。そして或る種の性格、或る種の型の人物が他の人々と對照接觸するところから、一種の際立つた可笑味が生じて來る。この意味でモリエル劇は性格喜劇である。智的から見ても、社會的に見ても、俄か紳士とか、博識ぶる女とか、僞信者とか、慾深かとか、醜くして滑稽である。我々は「人間嫌ひ」でも、「タルテュフ」でも見て、近代的現實さに面接せしめ

られ、「女學者」や「俄か紳士」や「ドン・ジュアン」を見ても決して舊い遠い事とは感じない。
 “Et ce n'est pas ainsi qu'on parle la nature.” 自然はそんな物言ひはしない。

これは「人間嫌ひ」のなかの言葉であるが、モリエルが人間を見る標準は自然であるか、どうかといふ事である。彼が最も積極的に描き出した典型的な女性、「女學者」の中の妹娘アンリエットは、自然である、それ故美しくすなほで眞實な生活をしてゐる。この生活が、具體的に、母や姉や叔母などの誇張した生活と對照して、それ等を空虚なものに見るのである。

ラスイヌもまた一篇の喜劇「訴訟狂等」を書いてゐる。これはモリエルの性格喜劇とは異つて、一層廣く當代の世相を見せてゐるもので、若しラスイヌがこの喜劇の方面でこの社會批評を具體化したならばモリエルとはまた異つた喜劇を持ち得たであらう。けれど彼の作風は細かすぎて、喜劇を大成する好き意味の通俗味が稍々缺けてゐる。そこでラスイヌは喜劇はこの一篇にとどめて、情熱解放の悲劇に専念したものであらう。彼の悲劇の特色はコルネイユの意力の悲劇に比すれば、情熱に終始するものである。而もその情熱は、統制的強權と結び付き、それと干渉するところから生ずる悲劇である。ルイ十四世の王宮内の生活を上代歴史に假偶して、二重の色彩に於いて古典美を織り出してゐるのである。九篇の悲劇は所謂異教的驚異に取材して、實は十七世紀當代の盛り上つた情熱解放を具現し、二篇の宗教悲劇ではクリスト教的驚異を、抒情味豊かな表現に於いて表出してゐるのである。

コルネイユ劇では女性は未だ十分の姿に於いて解放せられてゐない。ラスイヌ劇になつて、女性は初

めて、情熱の中で男性と平等に立ち、寧ろ男性を壓倒してゐるのである。これは當代に於ける女流の進展を反映した姿でもあり、たゞに情熱の中に於けるばかりでなく、風格の現はれに於いて、或ひは野心の姿に於いて、彼女等は十分な追究を受けてゐるのである。

彼の悲劇の一絲亂れざる構成と、流麗自在な風調と、息をもつかせざる迅速さもて、凡ゆる性格が合製する當然の歸結へと、快調と整美とをもつて導いて行く自在さは、全く古典文藝の典型である。コルネイユ劇が道理をもつて臨むところをラスイヌ劇は感動をもつて自然に導いて行くのである。コルネイユは論ずる。ラスイヌは黙して達成する。

十七世紀の文藝が終りに近づくと、即ちルイ十四世の治政が十八世紀へ互る頃になると、當代の時相は次第に批評的精神の發露を示すやうになつて來るのである。モラリスト（社會批評家）なる人々が露はにその言説を示すのが特色である。モリエルでもラ・フォンテーヌでも人生社會批評家ではあるが、その文藝は具體的である。この期の代表者、ラ・ブルユイエル (La Bruyère, 1645—1696) は、「自然に力強く微妙に描かんためには、眞實を表示しなければならぬ」と、彼もまた同世紀の人と同じく眞實を何よりも求むるのであるが、彼にはボワロオやモリエルに見る綜合力を缺いてゐる。併しそれだけ細かく鋭く、斷片的ではあるが觀察が透徹する。彼の著作「カラクテール」(Caractères) は、その一部はラ・ロシュフコオの「格言」の如く簡結な文章で道破した人生批評の格言もあれば、また當代の王侯貴族より民衆に到るまでの人間描寫がある。ルイ十四世の豪華な生活の下に、全く野獸の如く蒼黒い顔

をして、地上を爬ひ廻る農夫等の無數がある。ラ・ブルユイエルのみがこれ等の農人生活を描破してゐるのである。更に當代の典型人物、社交人、流行人、機智豊かな人間、物識り振りなぞを簡明に皮肉に叙述する。多少とも厭世的ではあるが、人間善を信するが故に、彼の文藝からは鋭くして多少の苦痛は感ぜらるゝが、一種澄んだ温みが生れる。けれどこの小刻みな解剖的觀察が即ち終期代表の特色であるのである。

フ・ク・ロン (Fénelon, 1651—1715) もまたこの大世紀の終末を代表する一人である。「何物をも愛せぬは生きぬことである。弱く愛するは生くることよりは萎むことである」と彼はいふけれど、彼の宗教はボスキエの如き華かな活動的な総合的な宗教ではなく、人の靈は完全に神を觀照する域に達すれば、絶對靜寂の状態となり、幸福も歌はず、地獄も恐れない。靜寂主義 (Le Quietisme) がそれである。彼は宗教の儀禮を撤した。神祕的か神との情感的結合、靜寂涅槃境を求む。これは世紀末の宗教の極致を思はしむるものである。彼の「テレマク物語」(Télémaque) は、古代賞讃の如き姿には見らるゝけれど、この中では、「民衆を愛せよ」「王者等は自分等の光榮のために支配するのではなく、民衆の利益のために支配することを忘るゝな」と叫び、戦争の惨害を説き、「同胞の血を流す」事をいましむ。これは顧みて大世紀に對してなした批評の如く、又來るべき十八世紀的思想の啓示とも見らるゝ。更に彼の文藝表現には凡ゆる要素が混淆してゐる。異教的クリスト教的、上代的近代的、物語的叙事詩的、論文的叙述的、十七世紀の總ての要素はフェヌロンその人を通せずしては、十八世紀へ流れ入

れぬ姿である。サン・スイモン (Saint-Simon, 1675—1755) もまた十七八世紀の推移期に當つて、その宮廷生活の目撃者、批判者として、我々に當代の生きた歴史を提供する。彼の回想録 (Mémoires) 二十一卷がそれであり、彼が凡ゆる事に對して日々新らしき知識を得ると言つてゐるその強い好奇心は、まさに十八世紀式思考の先驅をなすものであり、その日常生活の細かな解剖分析的觀察は、同時に世紀末的な心理を見せてゐるものである。

けれど何と言つてもこの時期の特色を最も好く見せてゐるのは、「舊新の争ひ」(La Querelle des Anciens et des Modernes) といふ現象である。その起りはサン・ソランが叙事詩「クロヴィス」でクリスト教的驚異を歌つてこれぞ「眞の佛蘭西の詩」であると言つた事から生じ、やがてシャルル・ペロオ (Charles Perrault, 1628—1703) が近代が特に上代に優る所以を進化の方則で説明し、「文化併行論」(Parallèles) によつて、萬物に變化す、文藝とても同じである。政治や風習の進化に併行して文藝の進化が生ずることを主張し、上代文藝の持する權威に反抗を示したのである。これは既にデカルトによつてアリストオトの權威を倒して純理性に立脚して進化の原則を打ち立てたと同じ思想が次第に強くなつて來たもので、權威に對する反抗獨立の精神が舊新の争ひ、古今の優劣論といふ形となつて現はれたものである。ペロオ、フォントネルその他の人々と、ボワロオを先頭に上代を尊崇する人々との間に論争がなされ、一時は協定が出來たのであるが、後にまたラ・モットの取扱つた「イリアド」の翻譯からして問題が再燃し、果てはオメエルは實在人物なりしやの疑問すら生じ、偶像破壊的精神 即ち十八

世紀的精神が次第に起りかけて來たのである。

更にこの推移期に於ける劇作家、物語作家を見るに、モリエル以後は、モリエルのみならず、ボワロオ、ラスイヌにも敵對してゐたブウルソオ (Boursault, 1638—1701) と、モリエルの正系の傳ふるルニアル (Regnard, 655—1709) とがある。ブウルソオは「メルキュル・ガラン」(Mercure Galant) を代表作として、新時代の勢力とならんとしてゐるジュルナリスムの舞臺の上で初めて見せた人である。ルニアルは、彼もまた巴里人であり、彼の喜劇要素は、モリエルに負ふところが多い。「投機者」(Le Joueur)、「戀ひ狂ひ」(Les Folies-amoureuses) など、快活さはあれど軽すぎる。モリエルに見るが如き、典型的喜劇ではなく、笑劇に近い。最早や典型時代は過ぎたのである。ダンクワル (Dancourt, 1661—1725) もまた佛蘭西座の座附作者として、場當りの作品、見る目を悦ばす作品に巧みなれど存續價値は殆どない。

ルサージュ (Lesage, 1668—1747) もまたその喜劇「テウルカレ」(Turcaret) に於いてモリエルを傳へてゐるが、彼は一層現實的に時代相に迫つてゐる。現實主義のこの期の傑作と言つてよろしい。モリエルを承けて、後に來るポオマルシェの先驅をなし、この二大作家の中間を撃ぎ、推移期を代表してゐる。彼の物語は當然十八世紀に屬すべきものではあるが、その「びつ」の悪魔」(Le Diable boiteux) は世紀末期の社會相の皮肉な觀察であり、「ジル・プラス」(Gil Bias) は「冒險譚と同時に當代社會の觀察、批評、描寫との極めて興味深い物語、觀察は精細、批評は機智縱横である。劇作家であり、同時

に物語作家であるといふその事自體が、既に古典文藝の旺盛期には見られぬ現象で、文藝種類の混淆を來たす十八世紀の時代相を示してゐるのである。

八、十八世紀の文藝

王朝衰落期の文藝——先驅者ベエイル・フォントネル等——世紀前半の悲劇——マリヴェオオの喜劇——デイドロオのドラマ——「百科辭典」及び諸家——モンテスキユ、ピュツフォン、ヴォルテエ、テイドロオ、ルウソオ等——十八世紀の散文物語——ポオマルシェとアン・ドレ・シエニエ——

ルイ十四世の隆盛時にヴェルサイユの宮殿は造營せられた。そしてそれを總ての中心地、權力の發源地とした。併し彼の晩年は多くその近くへ建てられた瀟洒なトリアノン王宮をこそ愛して籠つてゐた。彼の強權も豪奢も既に疲勞の姿を見せて來たのである。そして千七百十五年、彼の歿後は、ルイ十五世は更にそのトリアノン王宮を離れて、一ブルジョワの住宅ほどでもない小トリアノンを建て、愛好し、其處で最後の病氣に罹つたのである。ルイ十六世はその小トリアノンを女皇に與へた。マリイ・アントワネットは更にその小トリアノンを離れて小さな農村の形をしつらへ、農婦の日常生活の眞似をして日を暮らした。併し遂にはその小村にも止まつてはゐられなくなつた。千七百十五年から千七百九十三年まで、七十八年間、一大傾斜面を滑り落ちて行く文化現象、その滑走の必然相を表現してゐるの

が十八世紀の文藝である。大宰相リシュリューの後胤、リシュリュー元帥 (Le Maréchal de Richelieu, 1696—1788) はルイ王三代に歴任した。彼はルイ十六世に向つて言つた。「ルイ十四世の治下では人は敢て物を言はうともせず、ルイ十五世の治下では人は小聲で語り合ひ、陛下の治下では人は大びらに物を言つて憚りません」と。

即ち十八世紀は、大體として傳統否定、偶像破壊、權威に對する反抗、反宗教的、反中央集權的、國王は君臨すれど支配する力を缺き、宮廷生活は最早や當代の文藝社交の中心ではなく、統制綜合は如何なる方面に互つても力弱きものとなつた。従つてこの世紀では、歴史、科學、法學が特色を示し、論争が烈しくなり、文藝も飽くまで理智的であるが、この場合に働く理性は、前世紀とは異つて、解剖分析的で、社會組織繼承傳統を容赦なく批判し、その缺陷を指摘し、前世紀の集注に對しては離反を、專制に對しては民主を、社交的に對しては個人的を、國民的に對しては世界的を主張するにいたつたのである。前世紀の哲學的精神は十八世紀では科學的精神となり、科學は宗教に代つて人間生活を説明せんとする。官能開放の論理的出發がなされる。最早や文藝には上代崇拜は不可能となり、傳統の破壊となり、自由人を現出し、英、獨、佛、交互の影響は國境を越えて縱横になさるゝにいたつたのである。

この十八世紀的思想の傾向を眞先に示したのはベエル (Bayle, 1647—1706) とフォントネル (Fontenelle, 1657—1757) とである。ベエルは最初新教徒であり、やがて舊教に改宗し、再度新教に復歸し

た人、この度々の改宗が既に當時の宗教に對する不安懷疑を示してゐる。ベエルの中には近代懷疑主義、純理主義、博學的批評家がこめられてゐる。彼の「歴史批評辭典」(Dictionnaire historique et Critique) は、後に多くの學者等が協した百科辭典の源泉であり、十八世紀的解剖啓蒙精神の搖籃である。彼は第一に宗教に對し、その命ずるまゝを受け入れることを得ず、科學的方法で内外から解剖し、凡ゆる獨斷と迷信とを去つて、尙ほ殘留する原始的宗教情緒に立ち返つて、出直して來ることを求むる。これが近代懷疑主義であり同時に科學的合理主義である。彼の解剖は鋭く、晦澁な問題であればあるほどその力は銳利となり、源泉を究め單純化せずんばやまない。自由討究の十八世紀的精神である。フォントネルは大コルネイユの姪を母に持つ人、百歳にして死ぬるまで活動を止めぬ剛毅な人である。その著は「佛蘭西劇史」、「コルネイユの生涯」、舊新の争ひに關する優劣論、悲劇の作もあれば、文藝批評も、科學上の述作もあるが、科學の普及化に關する「多數世界問答」(Entretien sur la Pluralité des Mondes)、「神託史」(Histoire des Oracles) など特色を示すものである。機智に溢れ愛嬌が豊かで、辯舌に秀で人を外らさず、哄笑はしないがいつも微笑を帯んでゐて、彼は當代の社會を批評するとしても決して正面からはしない。神託の歴史を示して迷信は無智の人間の所有たるを諷し、天地の凡ゆるものは理性に反せざる事を語ると同時に眼前の時相のいかに背理であるかに氣附かしむる。微笑の中に批評あり、理智の指示を通俗化することを努めてゐる。

この十八世紀的解剖批評の精神の動きから殆ど影を没してしまつたといつてもよい文藝の形式は第

一に詩歌である。殊に抒情詩の類である。理智主義、殊にその解剖的明確を求むる時代には、暗示とか召喚とか印象とかを生命とする詩歌は榮えぬ。それに韻文の形式方則などは人爲の甚だしきものとして排せらるゝ傾向も強かつた。ラ・モット (La Motte, 1672—1731) の如きは作詩はしてゐながら極力詩の破壊を企てた。事實十八世紀は散文時代である。世紀末にいたつて、次代の若き生命が動き出した時たゞ一人アンドレ・シュニエが詩の復興を見せただけである。悲劇もまたこの解剖的精神の前に典型形態の次第に崩れて行つた文藝形式の一つである。

十八世紀前半の悲劇作者はまづクレビヨン (Crébillon, 1674—1762) である。彼は「コルネイユは天をとり、ラスキヌは地をとり、自分には地獄しか残つて居らぬ、自分はその中へめちやくちやに突き行つて行く」といつてゐるが、實際彼の劇は恐しい残酷性を示してゐる。父が子を殺すとか、父がその子の血を飲むとか、子が母親を殺すとか、残忍な取材と共に劇が非常に複雑多様になつて來た。「ラダミストとゼノビア」(“Rhadamiste et Zéobie”) が彼の代表作である。ラ・モットはまた三一一致の方則に攻撃を加へ、劇作中の端役を撤廢し、獨白をやめ、物語要素を除き、作中人物をして國王の義務を説かしむるなど、前世紀の古典悲劇とは異つた十八世紀的特色を十分示すにいたつたのである。その他一時全佛蘭西にもてはやされた劇作「カレエの包圍」(Siège de Calais, 1765) の作者ル・オーラン (De Belloy, 1727—1775) の如き、ルミエール (Lumière, 1723—1793) の如き、ソオラン (Saurin, 1706—178) の如き人々はあれど、それ等總てを包括して、十八世紀の悲劇に終局を告ぐる役目を演じてゐるのが、

欠

欠

第四篇 現代佛蘭西文學

- 一、明治文藝と佛蘭西文藝
- 二、自然派、象徴派、傳統派の文藝
- 三、個人主義、民族主義、世界主義の文藝
- 四、現代の諸流派
- 五、現代小説、劇の概観

一、明治文藝と佛蘭西文藝

千八百七十年(明治四年)普佛戦争の戦敗の結果、佛蘭西は、ナポレオン三世の所謂第二帝政が倒れて、やがて現在の第三共和政が組織立てられて以来三十年間、即ち十九世紀の終末に到るまでは、物質的にも精神的にも言ふべからざる苦惱の時代であつたのである。戦敗國として償金の支拂ひをなさねばならず、しかもその戦敗たるや、自己の帝王ナポレオン三世の野心の誤算から生じたものとして、その戦争の責任を一般人が自國の側にあるものと自認してゐるが故に、その戦敗の痛苦たるや、自業自得として、あきらめればあきらめ得らるゝものではあれど、それだけ意氣の銷沈を來たし、壞廢の氣分は全國に瀰漫して、佛蘭西は再び起ちがたいといふ他國からの觀察も下されたのであつた。この壞廢期の文藝が即ち、一は象徴サエボリスム義の文藝であり、他は自然主義ナチュラリスムの文藝であつた。

この期間我日本は明治維新の革新以來、新組織を建設するに急であつたところへ、佛蘭西のこの政變は大なる刺戟を與へ、それより以前の佛蘭西大革命を誘致した十八世紀の思想家の書物は初めて日本へ紹介せられ、ルウソオ、モンテスキュ、ヴォルテール等は相當に研究せられたものであつた。ルウソオの「民約論」コントラクトゥシヤム、モンテスキュの「萬法精理」エヌプリシプリの如き早くから翻譯書も出來、ヴォルテールのフレデリック大王へ送つた書簡の如きは、中學校に於いて教科書に用ひられた事さへあつた。加之、明治初年佛蘭西へ留學してゐた人々の間には、随分この七十年以來の佛蘭西の變革には刺戟せられて歸朝した

人も多かつたやうである。

とにかくルウソオによつて民權自由を鼓吹せられ、モンテスキュによつて三權分立論を教へられ、民選議員、國會開設の請願運動は明治十年代に入つて急激に一般的に伸展し、遂に二十二年、三年に憲法發布、國會開設となつて現はれて來たのである。

それと一方には、それより時期は勿論遅れてはゐるが、佛蘭西のその時代の苦惱の表現たる象徴主義詩歌の翻譯が上田敏氏によつてなされ、それがいかに日本の明治三十年代以後の清新な詩歌の精髓となつたことであるかは、多く言はずとも明かなことである。島崎藤村や薄田泣菫によつて代表せらるゝ日本の浪漫派の詩歌について、上田氏の翻譯によつて喚起せられた日本の象徴派の詩は、初めて格調にのみ捉はれない、自由な表出をなし得たといつてさしつかへないのである。現在までの日本の詩歌はいまだ大體に於いてその系統を本流としてゐる。

それと同時に、明治三十年代の末頃から日本ではまた、佛蘭西のその苦惱期の散文的表現である自然主義文藝を盛んに取入れて、明治四十年から大正の四、五年頃まで約十年以上は、日本文藝は自然主義時代であつたことも今さら説くまでもなく明瞭な事實である。

佛蘭西に於ける千八百八十年より千九百年に到る世紀末の苦惱の文藝は、日本へ影響しては明治三十年代の末から、即ち日露戦争以後から大正四、五年まで、即ち廿世紀初頭に於いてその表現を見せてゐるのである。詩歌に於けるポオドレエル、ヴェルレエヌ、マラルメ、ランボオ等の名前、小説物語に於

けるフロベール、ゾラ、ゴンクウル、モオパッサン等の名前は、そしてそれ等の作者は、佛蘭西に於けるが如く、日本に於いても相當親しきものとして見られてゐるのである。詩歌と小説とのこの方面に於ける佛蘭西文學の影響を與へずしては、全く日本の現代文學は解説することが出来難いものである。

二、象徴主義の文藝

それでは象徴主義の詩とは、自然主義の文藝とは如何なるものであらう。一體佛蘭西の文藝に於いては、或る時期には、久しく鬱屈してゐて、自由な發露をなすことを得ないで内抗的な悩みが積み重なつて來ると、一時に爆發して、混亂をまき起し、革命的な表現をとるやうになるのである。文藝上ではそれを主觀の革命と呼んでさしつかへない。そして詩は大體に於いてこの先進的な爆發的な主觀的革命的な作業を遂行し、散文はその爆發混亂を整理し、一般的な平明な秩序あるものに持ち來たす役目を演じてゐる。

十九世紀初頭の爆發的表現、主觀的革命的表出は浪漫派の詩歌となつて現はれ、それを整理し、一般的な平明な生活に普遍せしむるために、やがて現實的な小説物語とならずにはゐられなくなつた。然るに世紀後半に於いて、この平明な常套的な文藝表現は、第二帝政といふブルジョアジイズムの統制の下に、一時的統一の形式をとつて、その平明凡俗さの文化の頂上を示したのであつた。この凡俗平明を打破する要求は、その第二帝政の倒れると共に一時に爆發し來つたのである。しかしその時期には

實際生活の苦惱を伴ひ、自己分裂、多岐亡羊の惱ましき、祈らんとして祈り得ず、幻影は滅し、希望は閉し、如何ともいたし難き絶望状態が出現したのであつた。この絶望と爆發とが相伴つて生じた文藝表現が即ち壞廢派(デカダンテイス)の文藝であり、象徴派(サニボリスム)の文藝である。更に、世紀前半の浪漫派の詩歌に於いては、人間生活の機能のうち、主として視覚と聴覚とを解放して、それと情緒とを結合せしめ、主情的畫趣的な詩歌を作り出したのである。が、この壞廢派、象徴派の詩歌に於いては、人間生活機能の嗅覺味覺、觸覺、凡ゆる機能を開いて、さらにその五感の解放の上に、言ひ換へれば五感の同時的解放の上に浮び上る一種の幻を把まうとしたのである。これが象徴の世界である。即ち絶望の極、凡ゆるものを吐き出して、殆ど狂ほしい迄の表現をしたのが壞廢派、象徴派の文藝である。或ひは地獄に行くのではなくして、地獄より出て來た人の呼吸であるとか、或ひは生きながらの人の姿に骸骨の舞踊を認めるとか、甘き戀人間のキッスに、死體の臭ひを感ずるとか、これは壞廢の生の姿であり、その渦まく苦惱の表象のなかに、されど何物かを求めて生きて行かずにゐられぬ。それは五官の解放の上に更に統一を持つ世界でなければならぬ。人間生活を極度まで解放して、常日頃の兎にも角にも統一ある意識生活をなしてゐるものを打ち壞はすと、その底から浮び上るものは、死の姿か、動物の姿かでなければならぬ。人間の意識は、この恐ろしきものの解放の前に、をのゝきつゝも生きて行かねばならぬ。この放たれたる死の姿を、この解き放つた動物の姿を、そのままに生かして、そのものの餌食となることは、人間生活の終りである。其處で、この死か動物かに對して争

ひ、再び取押へんとする闘争が生ずる。半神半獸の争ひ、それが人間そのものの生活である。古代希臘神話の中に出て来るサントオルの如きものが人間である。上半身は神であり、下半身は動物である。その動物をして全身を支配せしめてはゐられない。また明るかるべき生の中にいつも暗い死の影を漂はせ、若しくは死の臭ひを放散せしめてのみはゐられない。死も動物も我々の日常生活のどん底には棲息してゐても、いつもそれを生活の全表面に浮ばせてはゐられない。何とかして、それを最一度、適当な地位に縛留しなければならぬ。この死と動物生とに對しての争ひの上におぼろげながら浮び上つて来るものは、カトリックの傳統の力、或ひは萬人の病苦のみに、いつも柔しい微笑を投ずる聖母の白衣の姿である。

それ故、壞廢派、象徴派の文藝は、苦惱の狂ほしい爆發的な絶望的な表現から、一種の象徴浮動の世界の表出に伸展し、最も主觀的で同時に最も客觀的な音樂の世界と一致し、やがてそれを宗教的な統一感情に持ち來たさんとするのである。そしてこの苦惱壞廢期の若い最も代表的な詩人は、アルテュル・ランボオであらう。

アルテュル・ランボオは極めて短き期間に、同時代の詩人等が一生かゝつてするであらう如き、内意識の轉回改反を経験した人である。彼は詩人として極めて早熟な人であり、十六、七歳から二十一歳までの四五年間を作詩に従事しただけであつて、それより後の生活は全然異つた、作詩とは何の關係もない植民地の商人として送つた人である。しかもこの短き期間の経験及びその表現なる詩作は、

まつたくそれ以後の、今日にいたるまでの詩人及び一般文藝家の表現の上に、多大の影響を及ぼしてゐる極めて不思議な詩人である。

彼に於いてこそまつたく内心革命が爆發的表現をなしてゐるのである。我々の表面意識の生活を破つて、深奥なる意識、或ひは隠れたる意識を覺醒せしめ、それを縦横に表出してゐるのである。従つてその表出されたる世界は、我々の日常生活に慣らされたる肉眼を絶した幻の如き世界である。「閉ぢたる眼をもつて、四方を見る」詩人である。「未知へ到達したる詩人」である。この未知の世界、幻とも思はるゝ世界、それは香氣、音響、色彩、思想、總てが溶けて一つになつた世界である。平俗な日常的な、即ちブルジョワジイの生活から見れば、その壞廢したる世界であり、また從來の限られたる生活意識より見れば、いまだ知られざる不思議の世界であり、同時にブルジョワジイの生活者には、不可解な世界であり、少くも難解な詩境であるのである。

「醉へる船」は、この壞廢し行く世界の體驗を表出したものであり、「レ・ジュルミナシオン」は深き意識のなかに覺醒せられたる無數の影像の色づけられたものであり、その初めて目の目を見たるものゝ頭へ戦く召喚といつてもよからう。從來の限定せられたる事象は、彼の前には姿を崩して、その後へ、從來の言葉では説明し難きものが浮び來る。深奥の底から、從來日の目を見なかつたものが、おぼろげに立ち上る。詩人はその不思議なものに形をあたへ、昏惑を限定し、初めて生きて動き呼吸するものを一つの世界に整理する。彼の心胸はこの不思議なもの湧き上り跳る舞臺となるのである。「自分